長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第20集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

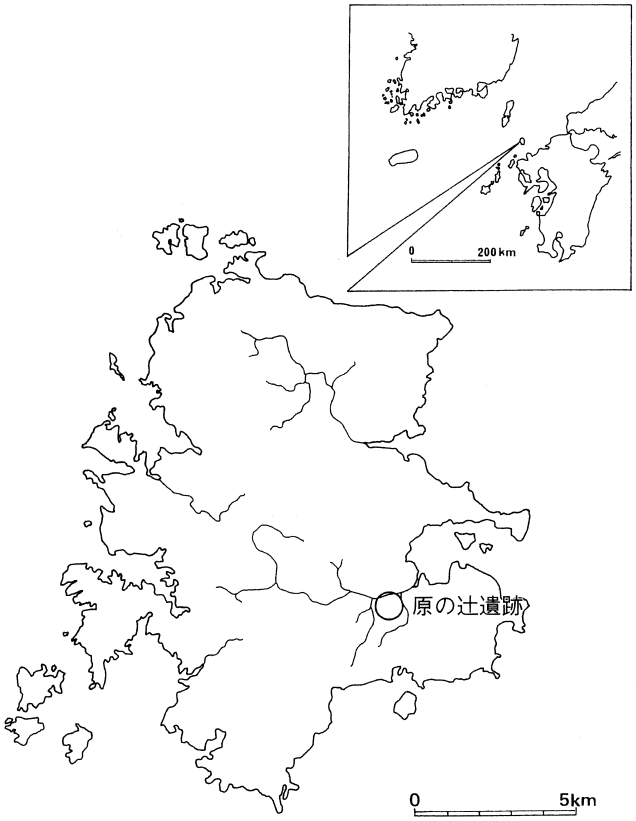
２０１７

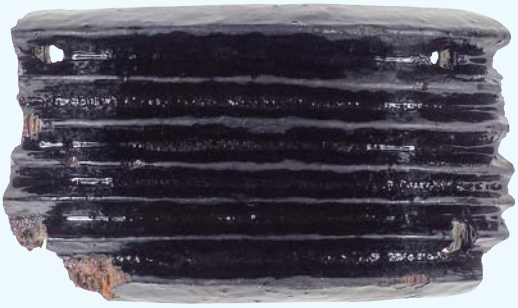
長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第20集

原の辻遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書





カラー写真１　腕輪状木製品（外面）

カラー写真２　腕輪状木製品（内面）

カラー写真３　調査区遠景（西から）

カラー写真４　調査区近景

カラー写真５　３区東側自然河川跡土層堆積状況

カラー写真６　３区東側自然河川河床面土器出土状況

カラー写真７　３区東側自然河川河床面土器出土状況

カラー写真８　３区東側自然河川河床面獣骨等出土状況

カラー写真９　３区１号礫群

カラー写真10　２区仮設橋遺構

発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、平成27年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は、これまでの調査で、多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに、中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の国邑（こくゆう）と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが、国邑が特定されたのは原の辻遺跡だけで、当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡とされ、平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で３例目の特別史跡として指定を受けました。また、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物の中で、遺構や場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1670点が、平成25年６月19日に重要文化財に指定されました。

平成27年度の範囲確認調査は、壱岐市芦辺町深江平触字高原で実施しました。その結果、弥生時代の河川跡の延伸状況を確認することができたこととともに国内で初めて弥生時代中期中葉の腕輪状木製品が出土するなど貴重な資料を得ることができました。

発掘調査の実施に当たり、ご理解とご協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成29年３月31日

長崎県教育委員会教育長
池　松　誠　二

例　　言

1．本書は、原の辻遺跡調査研究事業として実施した、平成27年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。

2．本事業は、遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。

3．本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市芦辺町深江平触字高原である。

4．平成27年度の調査は長崎県教育委員会が主体となり、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室が担当した。

調査組織

調査指導委員会	委員長	西　谷　　正	（九州大学名誉教授）
	委　員	大　坪　志　子	（熊本大学埋蔵文化財調査研究センター助教）（平成28年度～）
	委　員	工　楽　善　通	（大阪府立狭山池博物館館長）
	委　員	佐　古　和　枝	（関西外国語大学教授）
	委　員	徐　　光　輝	（龍谷大学教授）
	委　員	髙　倉　洋　彰	（西南学院大学名誉教授）
	委　員	武　末　純　一	（福岡大学教授）
	委　員	松　井　　章	（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）（～平成27年度）
	委　員	村　上　恭　通	（愛媛大学教授）

［委員記載は50音順］

長崎県埋蔵文化財センター

所　　長（平成27年度）	山　本　忠　敬
所　　長（平成28年度）	岩　永　正　弘
東アジア考古学研究室長	川　道　　寛（調査担当）
東アジア考古学研究室　主任文化財保護主事	古　澤　義　久（調査・整理担当）
東アジア考古学研究室　文化財保護主事	楠　本　正　樹（調査担当）
調査課　文化財調査員	谷　口　智　亮（調査担当）

出土木器については福岡市文化財部文化財保護課板付遺跡指導員山口譲治氏にご教示を賜った。また、龍谷大学大学院生　王達来氏、楊方昊氏が研修の一環として遺構測図にあたった。このほか遺物実測にあたっては調査課　山梨千晶主任文化財保護主事、宮木貴史文化財調査員の助力を得た。

5．本書で使用した遺構・遺物の実測、製図、写真撮影は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。

6．本書に収録した遺物・図面・写真類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。

7．本書で用いた座標は旧日本測地系である。

8．本書で用いた方位は座標北である。

9．本書の中国語要旨の翻訳は王達来氏に依頼した。

10．本書の執筆担当者は、本文目次に（　）で示している。

11．本書の編集は古澤義久が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地する環境
　１．地理的・地質的環境……１（川道　寛）
　２．歴史的環境……４（古澤義久）
　３．民俗的環境……６（古澤義久）

Ⅱ　調査の経緯と進行……９（楠本正樹）

Ⅲ　芦辺高原地区の調査……11（古澤義久）
　１．調査概要……11
　２．３区の調査……11
　３．２区の調査……34
　４．１区の調査……44
　５．1939年埋立土……45

Ⅳ　三次元計測器を用いた漆塗り木製品の復元……64（片多雅樹）

Ⅴ　総括……66（古澤義久）

付　編
　平成27年度原の辻遺跡調査研究事業発掘調査における自然科学分析
　　……73
　　（株式会社　パレオ・ラボ）

　中国語・韓国語要旨……82

挿 図 目 次

図１　壱岐島位置図と遺跡所在地……1
図２　原の辻遺跡下層（幡鉾川層）から産出した後期更新世哺乳類化石の分布……2
図３　2013年度調査川原畑地区１ｂ区土層断面図……2
図４　鳥山井……8
図５　郷ノ浦町庄触水汲み場……8
図６　2015年度調査研究事業調査区位置図（１/8,000）……10
図７　芦辺高原地区調査区位置図……12
図８　芦辺高原地区の発掘調査箇所……12
図９　３区平面図・土層図……13
図10　３区自然河川東側遺物出土状況……17
図11　３区東側自然河川河床面出土遺物(1)……19
図12　３区東側自然河川河床面出土遺物(2)……21
図13　３区東側自然河川河床面出土遺物(3)……22
図14　３区東側自然河川河床面出土遺物(4)……23
図15　３区東側自然河川河床面出土遺物(5)……24
図16　３区東側自然河川河床面出土遺物(6)……25
図17　３区東側自然河川堆積土下層出土遺物……27
図18　３区東側自然河川堆積土上層出土遺物(1)……28
図19　３区東側自然河川堆積土上層出土遺物(2)……29
図20　３区西側自然河川遺物出土状況……30
図21　３区西側自然河川堆積土出土遺物(1)……31
図22　３区西側自然河川堆積土出土遺物(2)……32
図23　３区西側自然河川堆積土出土遺物(3)……33
図24　３区１号礫群……35
図25　３区１号礫群出土遺物(1)……36
図26　３区１号礫群出土遺物(2)・近代層出土遺物……37
図27　２区平面図・土層図……39
図28　２区近代河川河床面出土遺物(1)……41
図29　２区近代河川河床面出土遺物(2)・近代河川堆積土出土遺物……42
図30　２区仮設橋遺構……43
図31　２区２号礫群……43
図32　１区平面図・土層図・出土遺物……44
図33　1939年埋立土出土遺物(1)……46
図34　1939年埋立土出土遺物(2)……47
図35　1939年埋立土出土遺物(3)……48

図36　1939年埋立土出土遺物(4)……49
図37　1939年埋立土出土遺物(5)……50
図38　1939年埋立土出土遺物(6)……51
図39　1939年埋立土出土遺物(7)……52
図40　1939年埋立土出土遺物(8)……53
図41　1939年埋立土出土遺物(9)……54
図42　1939年埋立土出土遺物(10)……55
図43　漆塗り木製品……64
図44　復元に使用した装置……64
図45　漆塗り木製品の三次元計測データと復元案……65
図46　芦辺高原地区と周辺の様相……67
図47　多条凹線銅釧……69
図48　三角集線文施文広口壺……70
図49　須玖Ⅰ式土器口縁……71

表　目　次

表１　調査区座標……11
表２　土器・陶磁器・ガラス器観察表……56
表３　石器観察表……63
表４　木器観察表……63

写 真 目 次

カラー写真１　腕輪状木製品（外面）
カラー写真２　腕輪状木製品（内面）
カラー写真３　調査区遠景（西から）
カラー写真４　調査区近景
カラー写真５　３区東側自然河川跡土層堆積状況
カラー写真６　３区東側自然河川河床面土器出土状況
カラー写真７　３区東側自然河川河床面土器出土状況
カラー写真８　３区東側自然河川河床面獣骨等出土状況
カラー写真９　３区１号礫群
カラー写真10　２区仮設橋遺構

Ⅰ　遺跡の立地する環境

１．地理的・地質的環境

壱岐島は、九州北西方の玄界灘に浮かぶ、主に新第三紀～第四紀中期の火山岩からなる島である。そのため壱岐島の地質研究は火山を中心に行われてきた経緯があり、更新世後期から完新世についての情報は乏しいのが実情である。

壱岐市は、2004年に郷ノ浦町・勝本町・芦辺町・石田町の４町が合併してできた市である。日本の島の中で21番目の大きな本島と周辺の属島からなり、総面積138.57平方㎞、岳ノ辻の標高212.9m を最高点とする低平な島である。2017年１月末現在の人口は27,540人、観光と農業・漁業を主な産業とする。来島者は年間55万人強である。気候は、玄界灘を北流する対馬海流が島の周囲を洗うため温暖で、年平均気温は15度台、年間降水量は約1900㍉である。

原の辻遺跡の位置する深江田原は、周囲を50m 以上の溶岩台地に囲まれた盆地状の地形である。遺跡は盆地の東側、石田町と芦辺町にまたがっており、石田町側から北へ伸びる舌状の低平な丘陵とその周辺の低地部からなり、面積は100ha である。座標軸では祭儀場跡付近で、東経129度45分19秒、北緯33度25分19秒である。

遺跡のある深江田原を流れる河川が幡鉾川である。幡鉾川は、壱岐島中央部を流れ、東部の内海（うちめ）湾に注ぐ二級河川で、壱岐島最大で、河内川（こうちがわ）ともいう。芦辺町湯岳地区の西にある鉾の木山（標高135m)を水源とし、全長9.25km、流域面積は25.6km²におよぶ。広大な平野部は水田に利用され、壱岐最大の穀倉地帯となっている。

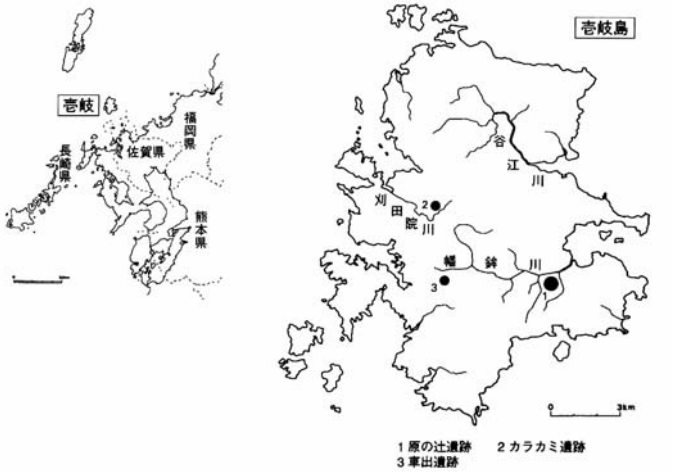


図１　壱岐島位置図と遺跡所在地

原の辻遺跡低地部の地質的環境

これまで遺跡周辺の低地部は、地形分類では三角州および海岸平野に区分（長崎県土地対策室1980）されていたが、1992年にナウマンゾウの化石骨が発見されたことを契機に低地部の地質環境の研究が大きく進んだ。ナウマンゾウの発見は、稲田孝司を代表とする研究グループに注目され、考古学と古生物学等との学際的研究が行われた（稲田編1998・2005）。併せてそれに依拠した長岡らの研究もあった（長岡ほか2005）。

原の辻遺跡周辺の沖積低地は、ほぼ全域が圃場整備され起伏に乏しい。標高８～５m 程度である。南から北へ舌状に伸びる丘陵をぐるりと取り囲んでいる。現在の幡鉾川は1939（昭和14）年に行われた河川改修によって直線化しているが、往時の幡鉾川は陸軍地図（大正９年）では大きく蛇行を繰り返しながら流れており、その一部が２b 区で確認された。

原の辻遺跡周辺の沖積低地には、ナウマンゾウ・ヤベオオツノジカの化石骨を産出することで知ら

れる下部の幡鉾川層とその上位に堆積する弥生時代以降の環濠等が構築された原の辻層の２層からなる。両層とも稲田らによって命名された（稲田編1998）。

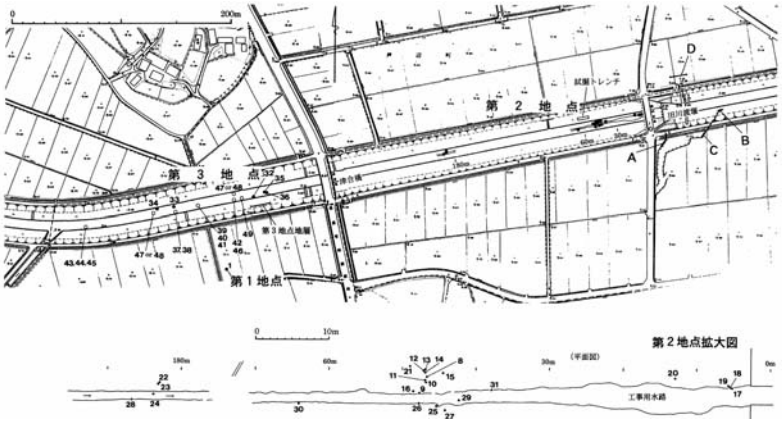


図２　原の辻遺跡下層（幡鉾川層）から産出した後期更新世哺乳類化石の分布

①幡鉾川層

幡鉾川層は、原の辻ガイダンス横の津合橋付近から下流の田川渡橋付近の幡鉾川沿いを模式地とする。層の厚さは３ｍ以上であるが下限が確認されておらず不明である。本層の下部は、やや固結した玄武岩を主体に安山岩・流紋岩・スコリアの礫層で、一部に砂の多い部分をラミナとして挟んでいる。

幡鉾川層の最上部（海抜2.6m）には細礫の固結した部分（33層）が２～３cmあり、上面は侵食面となっており、この上に沖積層である原の辻層が不整合に堆積する。固結した部分の下位に青灰色を基調としたやや粗い砂層がある。この層には時折トラフ型斜交層理がみられることから河川推積物と考えられる。この層中からナウマンゾウ・ヤベオオツノジカの化石が多数出土している。出土した哺乳類化石は49点がリストされている。出土地点は津合橋付近から田川渡橋までの500m 以上の範囲に広がっており、おおきく３地点とすることができる。その産状は、河川堆積と思われる砂層もしくは砂礫層から出土しており、河川によって運搬され堆積した可能性が高い。ナウマンゾウは、保存状態の良好なものが臼歯６点、下顎骨２点で、遺存状態の悪いものが多い。象牙質・セメント質が藍鉄鉱に置換しているものもみられる。ヤベオオツノジカは、角が３点、角の指状突起の破片２点と右踝骨。下額骨が出土している。本層からは化石化していない木材も出土している。その木片の14C 年代値が公表されている。39920±440yBP（Beta - 91193）という（古環境研究所1998）。こうしたことから幡鉾川層から産出する動物群の年代は後期更新世と考えられる。今回の調査では34層から出土した自然木の14C 年代は＞43.000yBP（Beta - 371845）であった。同じ34層の花粉分析によれば草本が多く62％を占める。寒冷な湿原で優占する草本のカヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属などが分布する。樹木は31％と少ないがその種類は多様で、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ、クマシデ属－アサダ、トネリコ属、ハシバミ属、カバノキ属の落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹、モミ属、スギ、マツ属複維管束亜属の針葉樹が森林の主要素である。

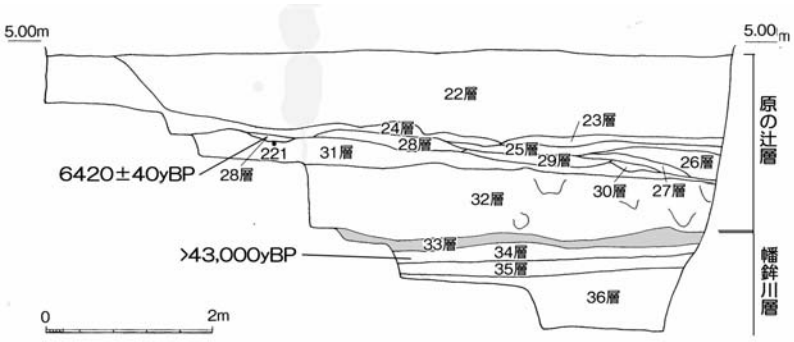


図３　2013年度調査川原畑地区１ｂ区土層断面図

したがって当時の環境は、寒冷種が多いモミ属、湿地林を構成する種類や寒冷種を含む落葉広葉樹、寒冷な湿原で優占する草本のカヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属などからみて、現在よりも寒冷な気候で原の辻の低地には湿原が広がっていたと思われる。

2015年度の３区では弥生時代中期中葉の河川跡が検出されている。その河床面の標高は最下面で1.96mであり、弥生時代の河川が更新統面を侵食して流れていたことが想定される。

②原の辻層

原の辻層は、幡鉾川層と模式地を同じくする。層の厚さは３m以下である。層相は地点によって異なるが、泥層～シルト層を基本として、砂質の部分も介在する。木材等の有機質を多く含む部分もある。植物痕跡もみられることから、原の辻層の形成は、湖沼堆積もしくは河川堆積が繰り返し行われたことよると考えられる。現在の幡鉾川は下流部で玄武岩台地が迫る狭窄部となっており、そこを通って幡鉾川は海に注ぐ。この狭窄部は両側とも地すべり地帯になっている。ボーリング調査によっても、基盤の壱岐層群の泥岩、砂岩を覆って、地表から深度11mまで地滑り移動体の崩壊堆積物が確認されている（長崎県壱岐支庁1991）。長岡は、地質情報が乏しいため、断定はできないと断りながら、地すべりや人為により幡鉾川が堰き止められて上流側に湿地が出現し、そこに原の辻層が堆積した（長岡ほか2005）と指摘した。

長岡らは、原の辻層の形成年代を模式地で得られた14C年代を根拠にして4200±40yBP（GX‐24661、長岡未公表資料）、つまり縄文時代後期以降に想定する。ところで2015年度川原畑１b区の28層から得られた炭化物の補正14C年代は6420±40yBP（Beta‐371844）であった。28層の下位には原の辻層が１m弱堆積していることからこの地区の原の辻層の堆積年代はもっと古いことになる。原の辻層の形成はおよそ次のようになる。後期更新世に形成された幡鉾川層の上面を浸食するイベントが少なくとも6430±40yBP以前に起こったことは確実である。周辺地形の分析によって盆地から海への流入は幡鉾川河口しか考えられないことから、長岡の指摘するように鶴亀地区の下流部が地すべりによって堰き止められてできた後背湿地に湖沼堆積による粘土・シルト層が堆積し、地すべり部分が開析され、海とつながった際には河川堆積と思われる砂質土が堆積したと考えられる。こうした堆積環境の違いは地すべりの頻度に関係するものと思われるが詳細は不明である。しかし複数回繰り返し生じた事象であろう。原の辻層の形成は、石田高原地区で弥生前期末に環濠の構築が開始されるのでそれまでには終焉したものと思われる。幡鉾川が常時海と通じた弥生時代中期以降低地部への進出が顕著になり、川原畑地区に見られるように居住空間が形成したものと思われる。

１b区32層は約80cmの厚さをもつ黄褐色粘質砂層である。この層にみられる沈着した鉄分は砂パイプによって擾乱されている。砂パイプはマグニチュード６クラスの大地震か長周期震動によって生じた液状化現象と思われる。原の辻遺跡で地殻変動の痕跡が確認されたのは初めてである。

２．歴史的環境

原の辻遺跡は深江田原平野に立地する約100ha の広大な環濠集落遺跡である。ここでは、原の辻遺跡自体の歴史的な変遷について概観する。

⑴　旧石器時代・縄文時代草創期

原の辻遺跡で最初に人類活動が確認されるのは旧石器時代ナイフ形石器文化期である。不條地区、八反地区、原地区、大川地区、柏田地区、池田大原地区、苣ノ木地区、原の久保地区、鶴田地区でナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器、石錐、抉入掻器などの遺物が出土している。遺構としては苣ノ木地区で落し穴状の土坑が１基発見されている。ナイフ形石器文化期における包含層が確認された地点の変遷は AT 降灰直前の鶴田遺跡（萩原編年中期段階１）→AT 降灰後の原３区（中期段階２）→苣ノ木地区（中期段階４）となる。このほか原位置から遊離した資料の中で時期が比較的明確なものとしては原の辻型台形石器、国府型、狸谷型ナイフ型石器、西北九州型角錐状石器が中期４期、基部裏面加工のナイフ型石器、枝去木型台形石器が後期段階２とみられる。原の辻遺跡では AT 降灰前後に最初の人類の足跡がみられ、その後旧石器時代後・晩期まで連綿と継続している。

原の辻遺跡では川原畑地区、不條地区、八反地区、高元地区、原地区、芦辺高原地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保Ａ地区で20点以上の細石刃、細石刃核が出土している。細石刃核には旧石器時代の野岳型が不在で、全てを縄文時代草創期の所産とみることができる。細石刃文化期の遺物は丘陵部での出土が激減し、低地部での出土量が丘陵部の５倍弱にのぼることから標高の低い地点への進出が進行したものと想定される。

⑵　縄文時代

確実に縄文時代早期以降と考えられる遺物として、坂の下式土器、局部磨製石鏃、剥片鏃、石匙、楔形石器、鎌崎型スクレイパーが不條地区、八反地区、高元地区、石田高原地区、苣ノ木地区、石田大原地区、大川地区、原ノ久保Ａ地区、原ノ久保Ｂ地区、池田大原地区、原地区で出土している。このほか多くの打製石鏃や磨石・凹石・敲石、石皿などが出土しているが弥生時代のものと判別が困難である。これまでのところ弥生時代以降の堆積層から出土しており、遺構等も確認されていない。時期としては坂の下式土器、剥片鏃、基部のみを研磨する局部磨製石鏃、鎌崎型スクレイパーなどから縄文時代後期前葉を中心とする時期に土地が利用されたことが想定されるが、石匙などの一部の遺物は縄文時代早・前期に位置づけられる可能性がある。これまで出土した縄文時代遺物は土器よりも石匙や石鏃などの石器が多く、原の辻遺跡周辺は一時的な野営地や狩猟場であった可能性が高いものと思われる。

⑶　弥生時代

Ⅰ期　原の辻遺跡集落形成期（弥生時代前期後葉～前期末）

弥生時代の原の辻遺跡における最古の遺物は板付Ⅱ式であり、それ以前の遺物はほとんど知られていない。前項で述べたとおり縄文時代に拠点集落が確認されず、また弥生時代早期・前期中葉までの遺物もほとんど知られていないことから原の辻遺跡の集落は、前代から連綿と継承されたものではなく、弥生時代前期後葉に突如、誕生したものであるとみるのが穏当である。この段階の居住域は丘陵

先端部の高元地区にみられ、東側低地部には大溝が掘削された。墓域は原地区に集約して形成され、後に大原地区に移動する。

Ⅱ期　原の辻遺跡集落確立期（弥生時代中期初頭～中期中葉）

丘陵裾部に環濠が廻り、丘陵部全体で居住域がみられる。この時期には多くの外来系遺物がみられ北西低地部に多くの粘土帯土器が集中して出土する。西側低地部に船着き場が設けられる。北側丘陵の閏繰地区で列埋葬が確認されている。Ⅰ期から形成された大原地区の墓域が拡張する。

Ⅲ期　原の辻遺跡集落第１次盛行期（弥生時代中期後葉～中期末）

Ⅲ期はⅡ期で確立した環濠集落が盛行する時期であり、集落自体の規模は拡張していく。丘陵頂部ではあまり建物が建てられず、公共性が高い空間であった。この最頂部を取り囲む形で有力者の居住域があったものとみられる。低地部では環濠が複雑化し、多重の環濠が掘りめぐらされる。小規模な青銅器・鉄器生産が行われていた可能性があるが、大規模な工房は確認されていない。この時期にも大陸系遺物は多く確認されており、対外交流の拠点であった。墓域は大原地区に加え、大川地区、原の久保地区、苣ノ木地区に拡がる。

Ⅳ期　原の辻遺跡集落後退期（弥生時代後期前葉）

紀元前後を境に集落は一時衰退する。船着き場は機能を失っている。低地部で粒子の細かい灰白色の粘質土層が確認されており、大規模な水害に伴う低地部の水没によって衰退したという考えがある。墓域は大川地区、原の久保地区、苣ノ木地区で確認されていることから、集落の拠点がほかの地点に移動した可能性がある。

Ⅴ期　原の辻遺跡第２次盛行期（弥生時代後期中葉～後期後葉）

環濠も再掘削され、丘陵部に生活拠点が戻る。丘陵頂部は祭儀場として利用された。居住区は祭儀場東側斜面に集中して築かれている。墓域はⅣ期に築造されたものが拡大する傾向にある。

Ⅵ期　原の辻遺跡解体期（古墳時代初頭）

古墳時代初頭までは転地低地に環濠も存在し、環濠内で生活が営まれていたものの、その後、多重の環濠も埋没し、集落は解体する。

川道寛2014「旧石器時代～縄文時代草創期の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』４
川道寛・古澤義久編2016『原の辻遺跡総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
福田一志・中尾篤志編2005『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
古澤義久・田中聡一2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』４
松見裕二2013「原の辻遺跡の概要」『原の辻遺跡－原の辻遺跡出土資料集成－』壱岐市文化財調査報告書第21集
宮﨑貴夫2008『原の辻遺跡壱岐に甦る弥生の海の王都』同成社

3．民俗的環境

今次の調査では、近世・近代の水汲み場と考えられる遺構を検出した。ここでは、水汲み場遺構の理解にあたっての参考として、現在の壱岐島にみられる民俗事例について述べる。

⑴　壱岐島の水汲み場の民俗事例

・鳥山井（壱岐市指定有形民俗文化財）（図４）

郷ノ浦町大原触に所在する。吉野秀政『壱岐国続風土記』〈寛保２（1742）年〉に「水東流、大雨にもまさず、旱魃にもへらず甚だ清水なり。」という記述がみられる。また、後藤正恒・吉野鞆千代『壱岐名勝図誌』〈文久元（1861）年〉には「此井、縦弐尺三寸三分巳亥を縦とす、横壱尺七寸、深三尺八分、同下井竪壱丈二尺、横六尺、深同上。水ハ東に流れ供（洪ヵ）水にも増す、旱魃にも減らす、甚清水にして、夏ハことに冷やかにして、近所の老若、水辺に集りて納涼す。冬ハ余所の水よりハ暖なれハ、里の男女、朝夕に群りて洗物をす。往来の人々も此水を愛さるハなし。囲（国ヵ）中大清水の一二とも思はるゝ。」という記述がみられる。

上井戸は飲料用、下井戸は洗い場として上水道の普及する近時まで利用されてきた（壱岐郷土館・郷ノ浦町教育委員会編1992）。湧水点を取り囲むように径30～100cm 程度の礫が配置され、礫によって取り囲まれた平面形は隅丸長方形を呈している。北側には板石により石畳状に平坦地が形成されている。南側には1.5m 程度の屹立した板石や地蔵像があり、信仰の対象となっている。また、西側にも自然礫を依り代とした信仰が認められる。

・御手水井

芦辺町深江東触に所在する。『壱岐名勝図誌』には「此井、竪弐間壱尺、横五尺五寸、深三尺、水中壱尺五寸。水ハ子丑より出て午未に流る。いかなる旱魃にも減しす。実に霊水なり。むかし日吉山王、神崎よりあからせ給ふ時、此井水にて御手を洗ひ給ひしより、かくハ名付たりといひ伝ふ。」と述べられている。上井戸と下井戸にわかれ、上井戸は飲料水用で、長さ約１m、幅約1.3m、下井戸は洗い場用で、長さ約２m、横約３m、深さ約0.4m である。上井戸と下井戸の間には石祠があり、信仰の対象となっている（山内2015）。

・郷ノ浦町庄触の水汲み場（図５）

郷ノ浦町庄触に所在する。径30～50cm の礫で湧水点を取り囲んでいる。礫で囲まれた範囲は長さ約2.0m、幅約1.5m である。平面形は隅丸台形に近い不整形である。北側は１m 程度の大きな礫が１点配されるだけで開放されており、川へ水が流れている。西側には石祠があり、その中には依り代として丸みを帯びた楕円形の礫が配されており、信仰の対象となっている。

⑵　水汲み場の構造

壱岐島の水汲み場には上で触れた鳥山井や庄触の水汲み場以外にも多くの水汲み場が現存しているが、その形態はさまざまである。井戸を掘削し、周囲を礫で取り囲んだものや、中には筒状にコンクリートを固め井戸としたものもみられる。このような滑車で釣るような井戸を「ツリカワ」や「釣瓶井戸」と呼ぶ。このような掘り井戸は壱岐島では大正時代に多く構築されたという。一方、竿や柄杓で汲む井戸を「クミカワ」や「柄杓ごう」として壱岐島では区別している（林1981）。鳥山井、御手水井、庄触の水汲み場などは「クミカワ」に該当する。「クミカワ」では湧水点を取り囲むように礫

が配され、汚物などが入らないようにしている。一方向は礫を配置せず開放したり、粗く礫を配することで排水できるようにしている。礫は何らの加工痕も認められない自然礫であることが多く、礫の大きさも一定ではないことが多い。

⑶　水汲み場の立地

このような水汲み場は標高の低い海岸沿いの箇所、標高の比較的高い山中といった箇所など壱岐島内の各所に認められる。地質上では、壱岐島は全般的に玄武岩に覆われているが、玄武岩の多くが柱状節理か、それに近い縦の割れ目が通っており、降雨がこの縦の割れ目を伝って徐々に下降し、地中深く滲み通っていくが、玄武岩層の下層にあたる第三紀層の泥岩層に達すると、透水が遮られて、波状褶曲の窪みから地表に湧出するに至る（林1981）。従って、このような条件が整えば、湧水点が確保されるのであるが、集落の各戸にあるわけではなく、おおむね集落内の限られたところに所在する。

⑷　水汲み場の社会的役割

上で触れた『壱岐名勝図誌』の鳥山井の記述にみられるとおり、水汲み場は水を汲むという生活手段としての役割以外にも、集落の人々が集う一種の集会場としての役割も持っている。そのため、水汲み場の周囲はある程度整地され、平坦な場所がみられることが多い。

⑸　水汲み場の信仰

水汲み場のほぼ全ての事例で信仰事例が確認される。このような水汲み場における信仰は、多くは川の神に対する信仰である。毎年盆月の七日には「かわさらえ」といって水汲み場の関係者が集まり周囲の雑草や樹木を切り払い底の泥や小石などをきれいに浚えて清浄にし、年の初めや彼岸の前後にも祭祀を行ったという（林1981）。山口麻太郎によると壱岐では川の神には２種類あり、それぞれ「川の神」と「カワの神」と区別して考えられている。「川の神」は川の側やため池に座す神で河童はその使いであるとか、川の神そのものであると考えられている。広く水を司る神とされている。一方「カワの神」は井戸に座す神で、飲料水を司る神であるとされている（山口1934）。この両者の川祀りについて喜多はさらに詳細な説明を加えているが（喜多2011）、水汲み場における信仰対象は後者の「カワの神」（喜多分類のＡ型）に該当する。なお、前者の「川の神」は原の辻遺跡周辺でも幡鉾川で現在も信仰されている（古澤2012）。

壱岐郷土館・郷ノ浦町教育委員会編1992『郷ノ浦町の文化財』壱岐郷土館
喜多正2011「壱岐島の民俗あれこれ」『島の科学』48
林徳衛1981「かわの神様」『島の科学』18
古澤義久2012「民俗的環境」『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第５集
山内正志2015「御手水井とシロダモの大木」『島の科学』52
山口麻太郎1934『壱岐島民俗誌』一誠社

図 4　鳥山井

図 5　郷ノ浦町庄触水汲み場

Ⅱ　調査の経緯と進行

1．調査の経緯

原の辻遺跡は、壱岐在住の小学校教員松本友雄によって明治37（1904）年頃に発見された。本格的に調査が開始されたのは昭和26（1951）年の東亜考古学会による調査であり、昭和36（1961）年まで継続的に実施された。その後、昭和49（1974）年、長崎県教育委員会が行った石田大原地区における調査では弥生中期を主体とする墓域が確認され、長崎県教育委員会は昭和50（1975）年～昭和52（1977）年の３ヵ年計画で範囲確認調査を実施した。また、平成３（1991）年から実施された幡鉾川流域総合整備事業に伴う遺跡周辺の低地一帯を対象とした範囲確認調査を経て、平成５（1993）年以降、広大な面積の発掘調査が実施された。これらの結果、原の辻遺跡は約100ha の範囲に及び台地を多重環濠で囲む大規模環濠集落であることが判明したため、平成７（1995）年『魏志』倭人伝に記された「一支国」の王都と特定された。その後、平成９（1997）年には国史跡に指定され、平成12（2000）年には弥生集落遺跡では登呂遺跡（静岡県）、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）に続いて３例目となる国特別史跡に指定された。

平成14（2002）年以降、長崎県教育委員会は原の辻遺跡の集落構造の把握を目的とした調査研究事業を進めているが、これまでの調査では相対的に丘陵東部低地部の調査が遅れており、土地利用について不分明な部分が大きかった。特に船着き場に連続する弥生時代の河川は、具体的な流路の確定には至っていない。このようなこともあり、平成27（2015）年度は、丘陵北東部の低地部にあたる芦辺高原地区を調査区とし、平成25（2013）年度の川原畑地区で確認された弥生時代の河川との連続状況について確認することを目的とした調査を実施した。

2．調査の進行

平成27（2015）年度は、平成27（2015）年11月２日から同年12月25日まで調査を行った。まず調査区の設定を行い、バックホウによる表土と客土の掘削後、人力による掘削を進めた。この調査区では、昭和14（1939）年の幡鉾川直線化工事によって大規模な埋め立てが行われていたため、バックホウによる掘削には計４日間を要した。またこの調査では発掘作業が順調に進む一方で、雨天と湧水による水抜き作業に時間をとられることも多かった。その後、12月11日には原の辻遺跡調査指導委員会を開催し、指導委員から現地指導を得た。12月14日には航空写真を撮影、12月16日からは埋め戻しを行い、12月25日に全作業を終了した。

発掘調査期間中には、発掘調査の体験・実習を実施した。11月６日には壱岐市立三島小学校の児童・教諭11人が発掘作業を体験した。11月11日には長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースの１年生９人が原の辻遺跡発掘体験実習として発掘作業を体験した。さらに、発掘調査の公開も実施した。11月19日には長崎県教育委員会の教育委員等11人による視察、12月１日には壱岐市副市長による視察、12月４日には埋蔵文化財担当者専門技術研修の受講者６人による視察を受けた。

楠本正樹2016「平成17年度～平成26年度の調査経過」『原の辻遺跡総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
福田一志・中尾篤志2005『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

図６　2015年度調査研究事業調査区位置図（１/8,000）

Ⅲ　芦辺高原地区の調査

1．調査概要（図７、図８）

調査区は、現在の水路から35m 西側に暗渠を避けるように３箇所設定した。西から東へ１区～３区とし、１区と３区はそれぞれ５m×20m の100㎡、２区は５m×30m の150㎡で、総調査面積は350㎡である。

今次の調査区は1939年に幡鉾川直線化に伴う埋立工事が行われている。そのため表土と圃場整備に伴う客土を除去すると、1939年の埋立土が確認された。埋立土には原の辻遺跡の丘陵北部からもたらされた遺物を多量に包含する黒褐色粘質土と遺物をほとんど包含しない灰オリーブ色粘質土がみられる。このうち表土と客土をバックホウで掘削し、1939年埋立土の内、黒褐色粘質土は人力で掘削し、遺物を収集した。その後、灰オリーブ色粘質土については再度、バックホウを投入し、掘削を行った。その結果、1939年埋立土が厚さ１m 程度にも及ぶ箇所もみられ、全体の掘削深度が大きくなった。そのため、安全性と調査期間の関係から１区は調査区中、1.25m×8.75m、２区は1.5m×17m、３区は1.8×17.5m について人力で掘削し、調査を進行することとした。また、調査期間中、降雨や湧水などの影響で土層が崩落する可能性があったので、不整形に土層を除去した箇所がある。

発掘調査の結果、３区では弥生時代の自然河川跡と近代の水汲み場跡も発見された。１区と２区では近代の河川跡が発見され、２区では近代の仮設橋跡や集石遺構が発見された。調査終了後は、掘削面に砂を30cm 程度、敷いた上で埋め戻し、遺構等の保護を行った。

表１　調査区座標

調査区	杭	X	Y
１区	北西杭	84365.532	23389.306
	北東杭	84369.473	23408.866
	南東杭	84364.591	23409.848
	南西杭	84360.670	23390.225
２区	北西杭	84359.638	23410.865
	北東杭	84365.575	23440.226
	南東杭	84360.700	23441.223
	南西杭	84354.889	23411.793
３区	北西杭	84375.460	23438.280
	北東杭	84379.328	23457.884
	南東杭	84374.449	23458.882
	南西杭	84370.512	23439.271

2．３区の調査

⑴　土層（図９）

1939年の埋立土を除去した下層の状況は次のとおりである。

１層：にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト土。粒径が比較的揃っている。赤色（10R4/6）鉄分を含む。しまり弱い。この層には木が生えており、旧地表面であることがわかる。

２層：にぶい褐色（7.5YR5/3）シルト土。粒径が比較的揃っている。１層より赤色（10R4/6）鉄分を多く含む。しまり弱い。

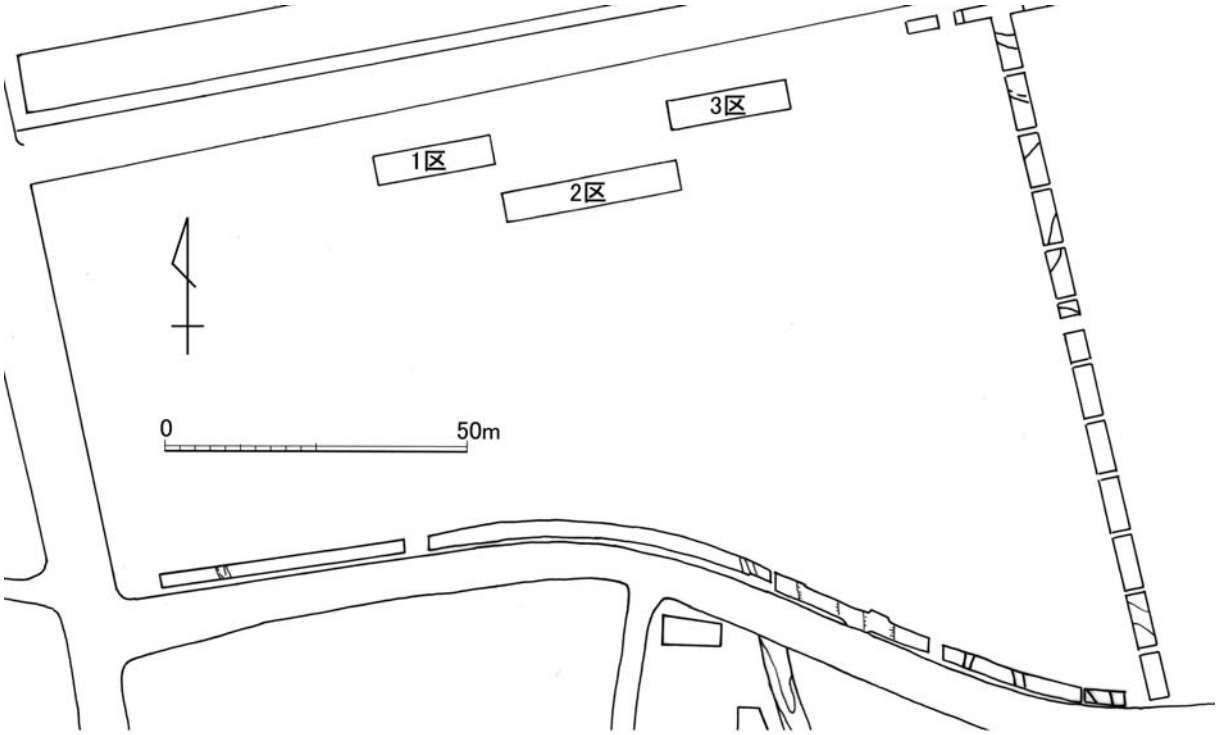


図７　芦辺高原地区調査区位置図

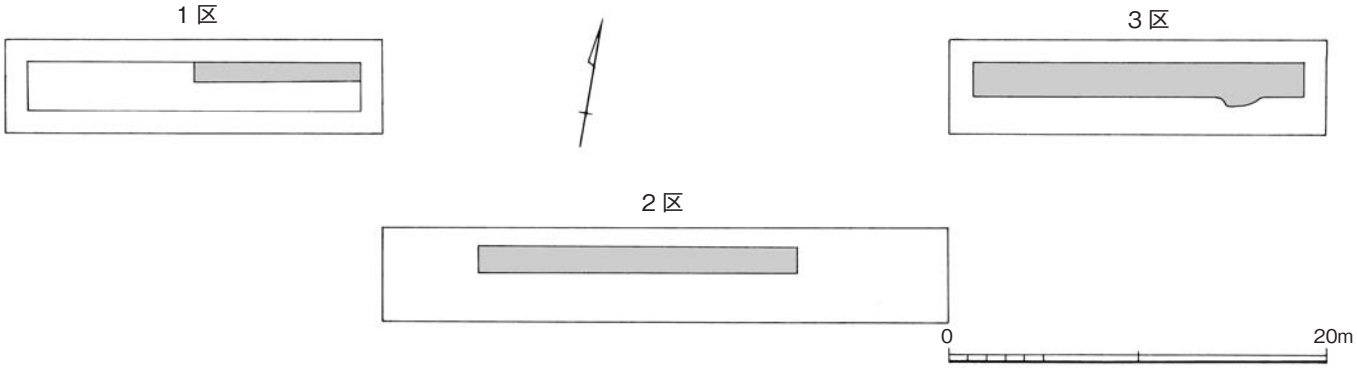


図８　芦辺高原地区の発掘調査箇所

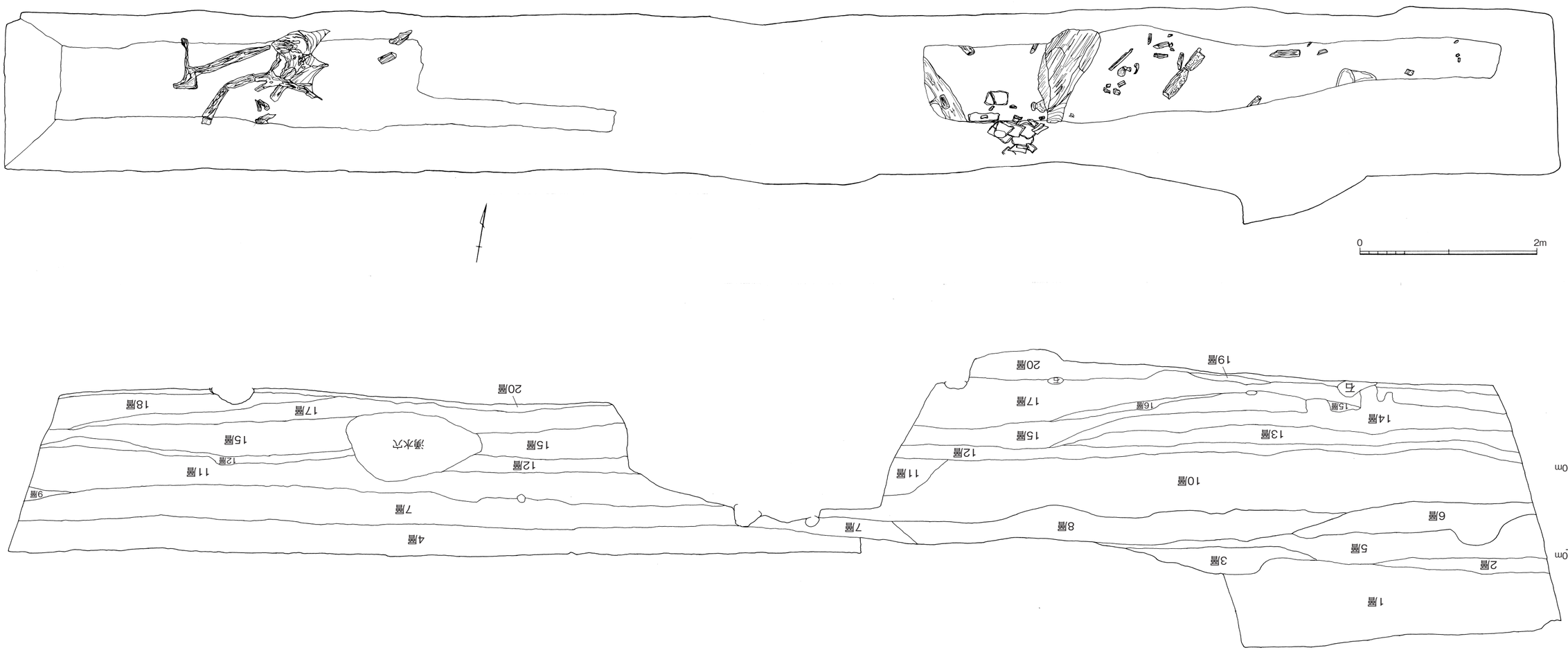

1層
2層
3層
4.000m
5層
6層
8層
10層
11層
12層
13層
14層
15層
16層
17層
19層
20層
石
7層
4層
9層
湧水穴
18層
3.000m
0
2m

図9　3区平面図・土層図

３層：灰色（5Y4/1）砂質土。明赤褐色（5Y4/1）砂と灰白色（5Y7/1）粘土を含む。しまり弱い。
４層：明赤褐色（5YR3/6）粘質土と褐灰色（5YR4/1）粘質土の混合。しまり弱い。
５層：灰色（7.5Y5/1）粘質土。暗赤色（10YR3/4）混じり。しまり弱い。須恵器出土。
６層：青灰色（10BG5/1）と灰オリーブ色（5Y4/2）が混合したシルト土。しまり強い。
７層：褐灰色（5YR4/1）粘質土と明赤褐色（5YR3/6）粘質土の混合だが、より褐灰色が強い。しまり弱い。
８層：褐灰色（5YR4/1）粘質土と明赤褐色（5YR3/6）粘質土の混合だが、より褐灰色が強い。しまり強い。

９層：明褐色（7.5YR5/6）と暗緑灰色（10GY4/1）の砂質土。しまり弱い。
10層：褐灰色（10YR4/1）シルト土。部分的に黒色（10YR1.7/1）が混じる。しまり弱い。
11層：緑灰色（10GY5/1）粘質土。粘質強い。しまりは極度に強い。
12層：緑灰色（7.5YR5/1）砂質土。粘性強い。しまり強い。
13層：黒褐色（10YR3/2）粘質土。部分的に黒色（10YR1.7/1）が混じる。しまり弱い。９層に類似。
14層：灰オリーブ色（5Y4/2）砂質土。有機物を多量に含む。しまり弱い。
15層：黒褐色（10YR3/2）粘質土。有機物を少量含む。しまり弱い。
16層：暗黄褐色（2.5Y4/2）砂質土。有機物を含む。しまり弱い。
17層：黒褐色（10YR3/2）粘質土。有機物・自然木を多量に含む。しまり弱い。
18層：褐灰色（10YR5/1）粘質土。部分的に黒色（10YR1.7/1）が混じる。
19層：暗緑灰色（7.5GY4/1）砂質土。１～３cm 大の礫を含む。しまり強い。
20層：砂礫土。上部は暗緑灰色（10GY4/1）、下部は明黄褐色（2.5Y6/6）。しまり強い。多量の自然木・弥生土器を含む。

湧水穴充填土：灰黄褐色（10YR5/2）粘質土。明赤褐色（2.5YR5/8）鉄分が多い。しまりは極度に弱く、脆い。湧水が甚だしく、検出後、自然崩壊する。

１層～８層は近代層である。１号礫群は10層及び11層上面に構築されている。９層～19層は自然河川の堆積土である。20層の砂礫層は自然河川の河床面である。

湧水穴は11層上面で検出されたが、湧水が甚だしく平面形態を図化することはできなかった。

⑵　自然河川跡及び自然河川跡に伴う遺物

○河川跡の構造と年代

３区全面で検出された。東西方向・南北方向とも立ち上がりを確認することはできなかった。そのため、３区は河川の流路中に該当するものと考えられる。出土遺物中の最新遺物を確認すると、最古の河床面であると考えられる20層では出土遺物は須玖Ⅰ式に限定されるため、弥生時代中期中葉頃に流路があったものと考えられる。河川堆積土は砂質土層（19層、16層、14層、12層）と粘質土層（18層、17層、15層、13層、11層、10層）が互層堆積している。砂質土層がその時点での河床面であると

すれば、河川は徐々に堆積を繰り返しながら流れていたものと考えられる。19層～12層で出土した最新遺物は須玖Ⅱ式で、弥生時代中期後葉以降に形成されたことがわかる。10層の最新遺物は８世紀頃の須恵器であるため、古代以降に堆積したものであることがわかる。11層では最新遺物は弥生土器であるが、10層と土質が類似することと標高から10層に近い堆積年代が想定される。このため、以下では河床面、河川堆積土下層、河川堆積土上層に分けて記述する。

○河川跡からの遺物出土傾向及び出土遺物（図10、図20）

河川跡から出土した遺物は、基本的に平面図化及び標高測量を行い、出土位置情報を把握している。遺物出土傾向及び出土遺物について層位ごとに記述する。

・自然河川河床面（20層）

河床面は砂礫層（20層）で構成され、３区の全面で確認される。河床面上面の標高は最高部が2.44m、最低部が1.97mである。比較的大きな自然木が３区東側でも西側でも出土した。しかし、人工遺物の分布は東側と西側で大きく異なる。遺物の分布は調査区東端から約４ｍまでに限定され、調査区西側では遺物が出土しない。特に３区東端から約3.5～４ｍの地点では東西方向約50cmの範囲で、比較的遺存状況の良い大型壺、樽形土器のほか多量の土器片、腕輪形木製品など多量かつ遺存状況のよい遺物が集中する遺物集中部が確認された。遺物は遺物集中部からの出土品も含めて、おおむね遺存状況が良好で、磨耗などは著しく少ない。

【遺物】（図11～図16）

1は大型壺である。底部が欠損しているが、全体の70％程度が残存している。調査区の端で出土したため、未掘部分に欠損部分が残存している可能性が高い。口径は25.0cm、残存器高は54.1cm、想定される底径は約10cmである。胴部最大径は胴中央で、46.4cmである。頸部に１条の断面三角形の突帯が廻る。外面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、胴上部は横位や斜位のミガキ、胴下部は縦位のミガキが施される。内面は口縁部はヨコナデ、頸部はミガキ、胴部はナデが施される。突帯直下にも一部ミガキが及んでいる部分もあり、突帯貼付後にミガキ調整がなされたものとみられる。外面には、２条の縄による網目の痕跡が明瞭に残る。また、焼成後の穿孔が胴部中央に１箇所認められる。須玖Ⅰ式に属する。

2は樽形土器である。口縁部が欠損しているため、全体の器形を把握することはできない。胴上部でやや内湾気味となっているため、肩部を有し、頸部を持つ壺形になる可能性もあるが、収束して、単純な樽形になる可能性もある。残存器高は35.3cm、胴部最大径は30.2cm、底径は21.6cmである。胴上部から２条、１条、２条、１条と断面三角形の突帯が廻る。胴上部には４条または５条の沈線が放射状に配され、構成される三角形集線文が幅１mm程度の線刻で施される。外面は胴部は横位のミガキ、底部はナデ、内面はナデ調整である。重複関係から製作工程は突帯貼付→ミガキ→線刻という順序であったことがわかる。また、焼成後の穿孔が胴部中央に１箇所認められる。突帯は２条近接している部分もあるが、断面M字突帯までには至らないため、須玖Ⅰ式の範疇で理解したい。

3～26、**30**は須玖１式の甕である。**3～21**、**24～26**は口縁部である。胴部外面はハケメ調整がなされる例が多いが、**12**は胴上部は横位、胴下部は縦位のミガキが施される。**22**、**23**は甕の底部で、**30**は胴上部である。**27～29**、**31**は壺である。

図10　3区自然河川東側遺物出土状況

図11　3区東側自然河川河床面出土遺物(1)

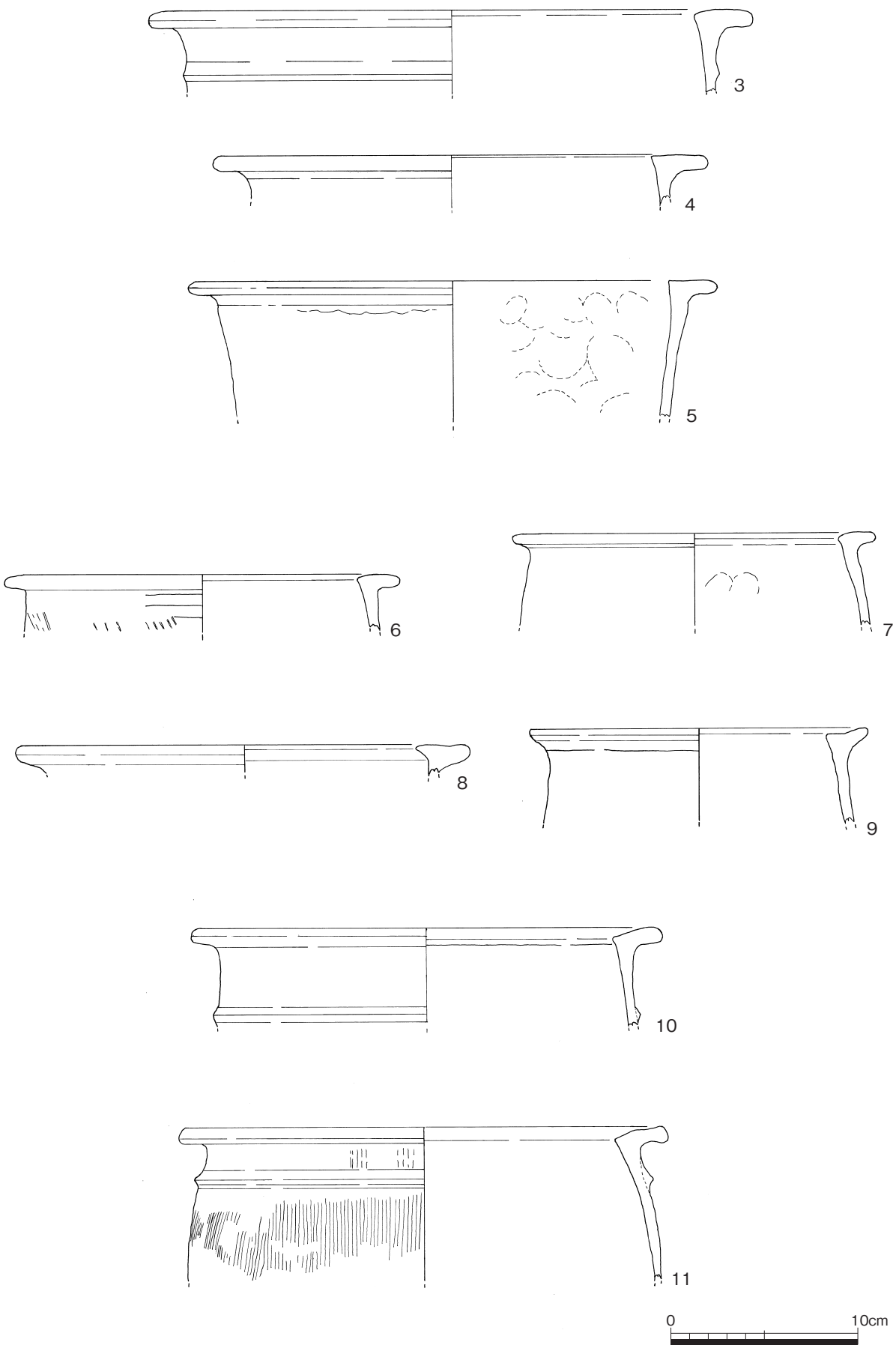


図12　3区東側自然河川河床面出土遺物(2)

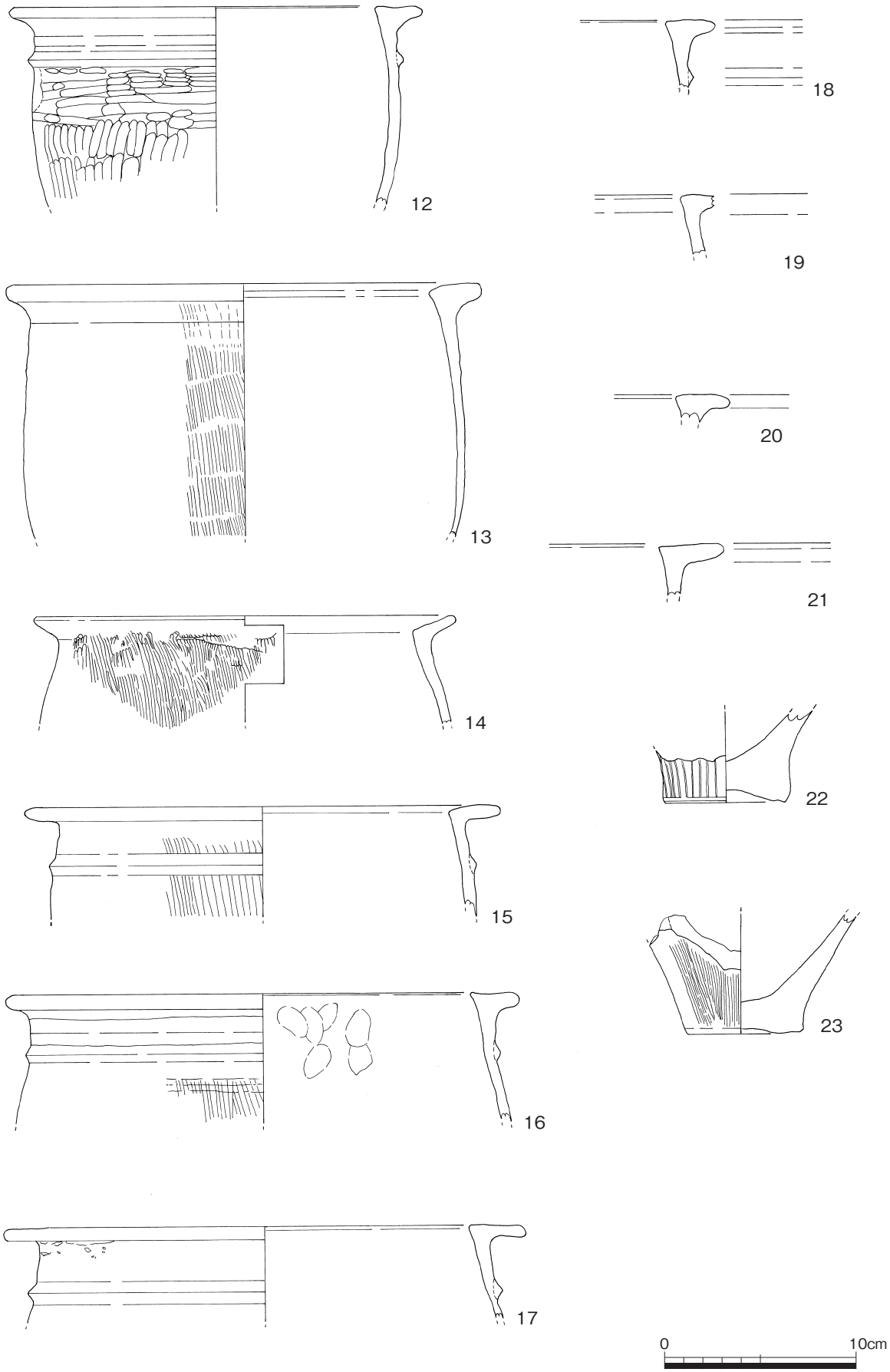


図13　3区東側自然河川河床面出土遺物(3)

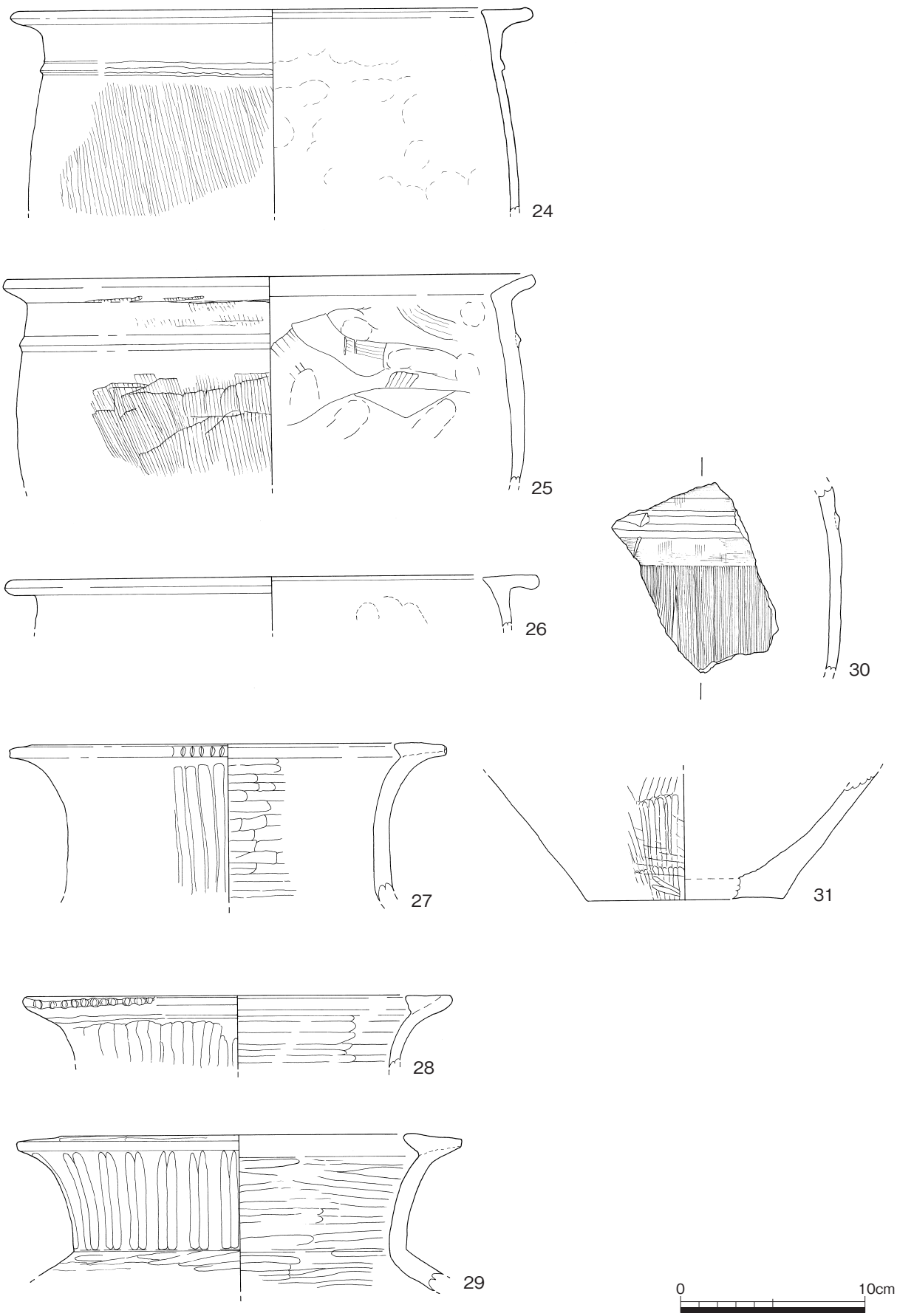


図14　3区東側自然河川河床面出土遺物(4)

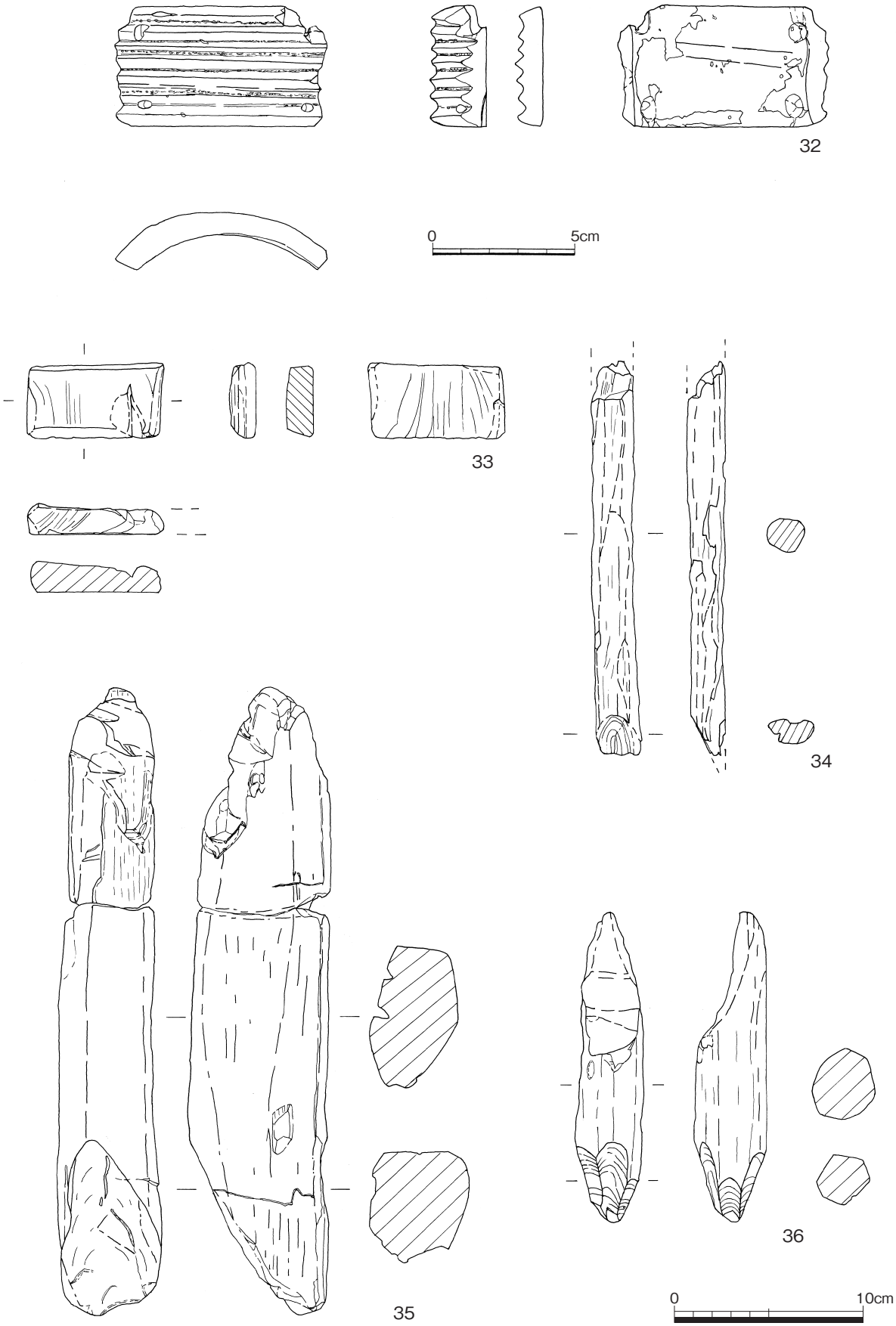


図15　3区東側自然河川河床面出土遺物(5)

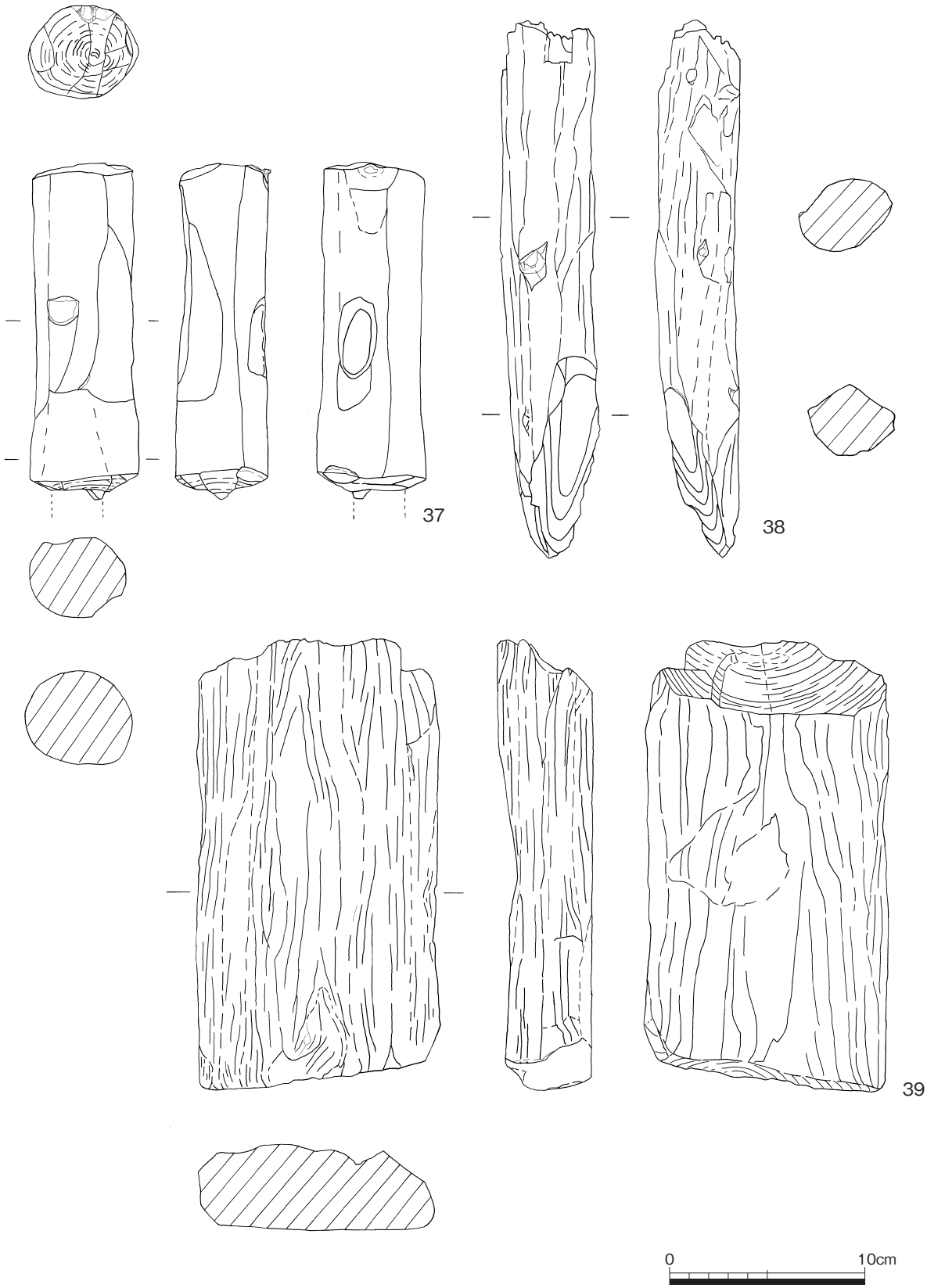


図16　3区東側自然河川河床面出土遺物(6)

32は腕輪状木製品である。長さ7.5cm、幅4.2cm、厚さ0.9cmである。木材はカヤである。平面形は長方形で四隅に穿孔がある。全体に黒漆を塗っている。孔の内部にも黒漆がみられることから、製品として完成した当初より穿孔がなされていたものと考えられる。６条の刻線が入り、断面形は三角形に近い。刻線部分には微細な粒状の細工が施されている。

33は板状木製品である。**34**は棒状木製品である。一方向を斜めに切断されている。**35**は杭である。一方向を斜めに切断されている。**36**は杭である。６方向で斜めに切断されている。**37**は横槌である。柄部は欠損している。芯持ち丸太材を利用している。**38**は杭である。２方向で斜めに切断されている。**39**は板状木製品である。

・河川堆積土下層（19層～12層）

砂質土層と粘質土層が互層堆積しており、３区全面で確認される。砂質土層、粘質土層ともに自然木など多量の有機物を包含している。遺物の分布状況としては、河床面の状況と同様に、調査区東端から約４ｍまでの地点に分布し、調査区西側では遺物が確認されない。遺物の状況は小片が多く、磨耗しているものが多い。

【遺物】（図17）

40～45は甕である。**43**は遠賀川以東系の跳ね上げ口縁で須玖Ⅱ式に属する。**45**は弥生時代後期に属するとみられる。

46は棒状木製品である。一端は方形の刳りこみ加工がみられる。**47**は網枠であると考えられる。叉を利用し柄部は薄く加工されている。組み合わせて利用するため、一方向は平坦に加工されている。

・河川堆積土上層（11層・10層）

11層は調査区東端から約４ｍの地点から西側に分布し、10層は東側に主に分布するが、相互に類似した性格を有する層である。遺物は、調査区東側でも西側でも確認され、全面に広がっていることがわかる。３区西側では河床面および堆積土下層からは遺物が出土しておらず、西側河川跡で出土した遺物は全て堆積土上層に属する。このような遺物分布からみても、河川堆積土上層と下層ではその性質を異にしていることがわかる。10層の最新遺物には古代の須恵器が含まれており、下層の堆積年代とは時期差が認められることがその要因であるとみられる。遺物の状況は小片が多く、磨耗しているものが多い。

【３区自然河川堆積土上層東側（10層）遺物】（図18～図19）

48～67は甕である。須玖Ⅰ式～須玖Ⅱ式に属するものが多い。**68**、**69**は壺で、**69**は外面に丹塗がみられる。**70**は器台である。**71**は須恵器の蓋天井部である。８世紀の所産であるとみられる。

【３区自然河川堆積土上層西側（11層）遺物】（図21～図23）

72～91、**94**、**100**、**103～106**、**109**、**110**は甕である。須玖Ⅰ式～須玖Ⅱ式が多い。**92**、**113～115**は高坏である。**93**、**111**は須玖Ⅱ式の長頸壺で、外面に丹塗りがみられる。

116、**118**、**119**は磨石である。**117**は凹石である。

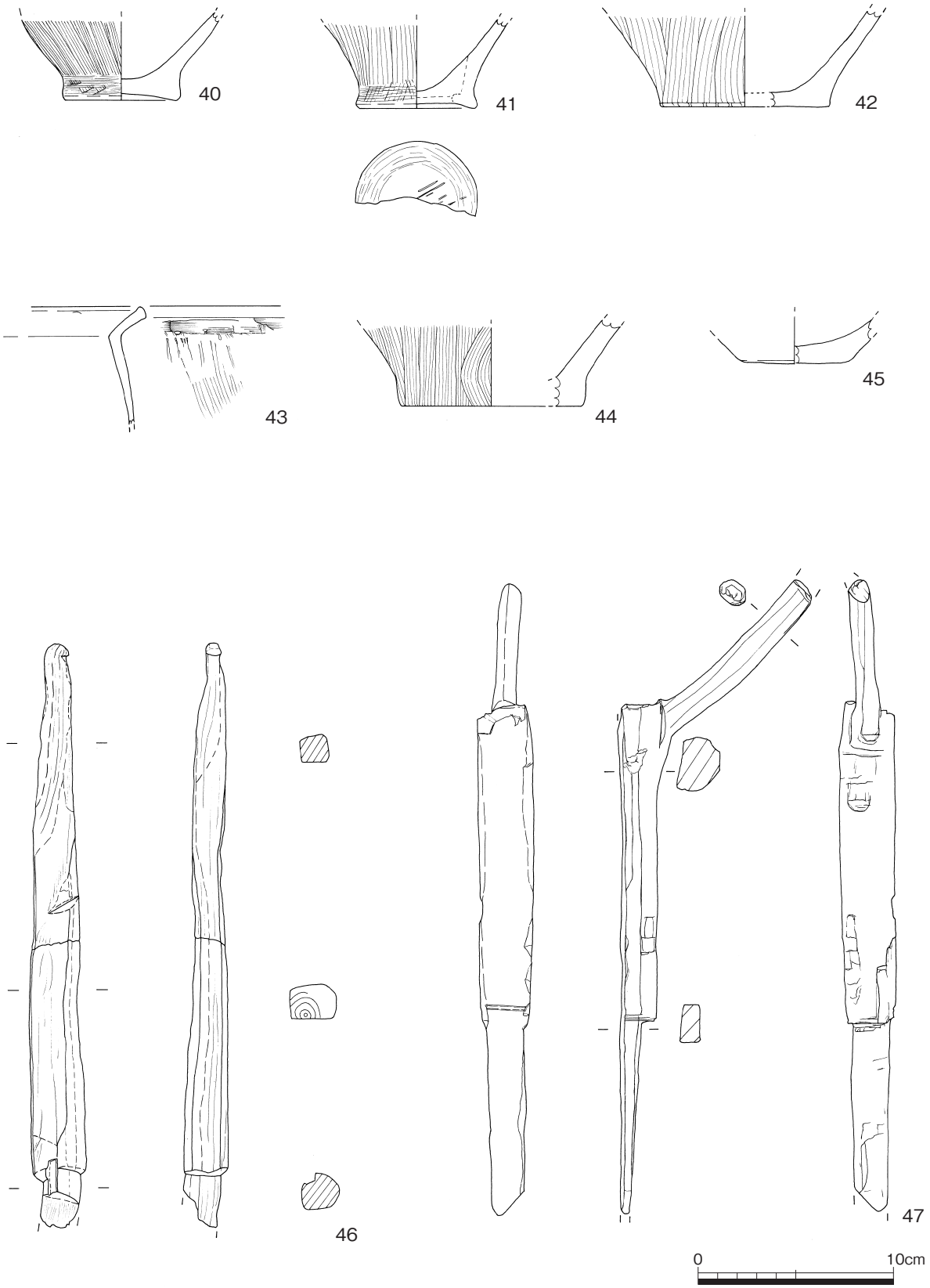


図17　3区東側自然河川堆積土下層出土遺物

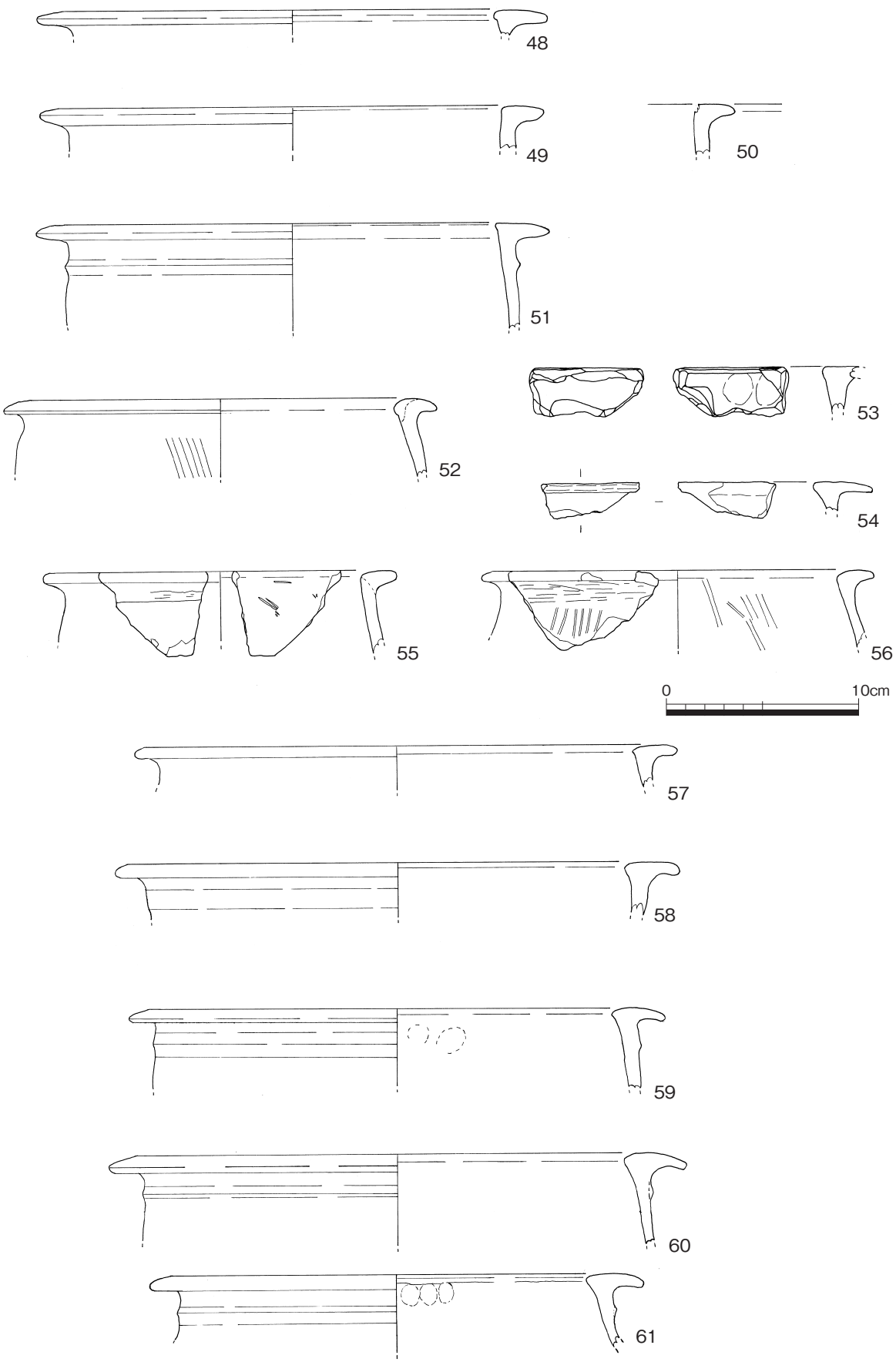


図18　3区東側自然河川堆積土上層出土遺物(1)

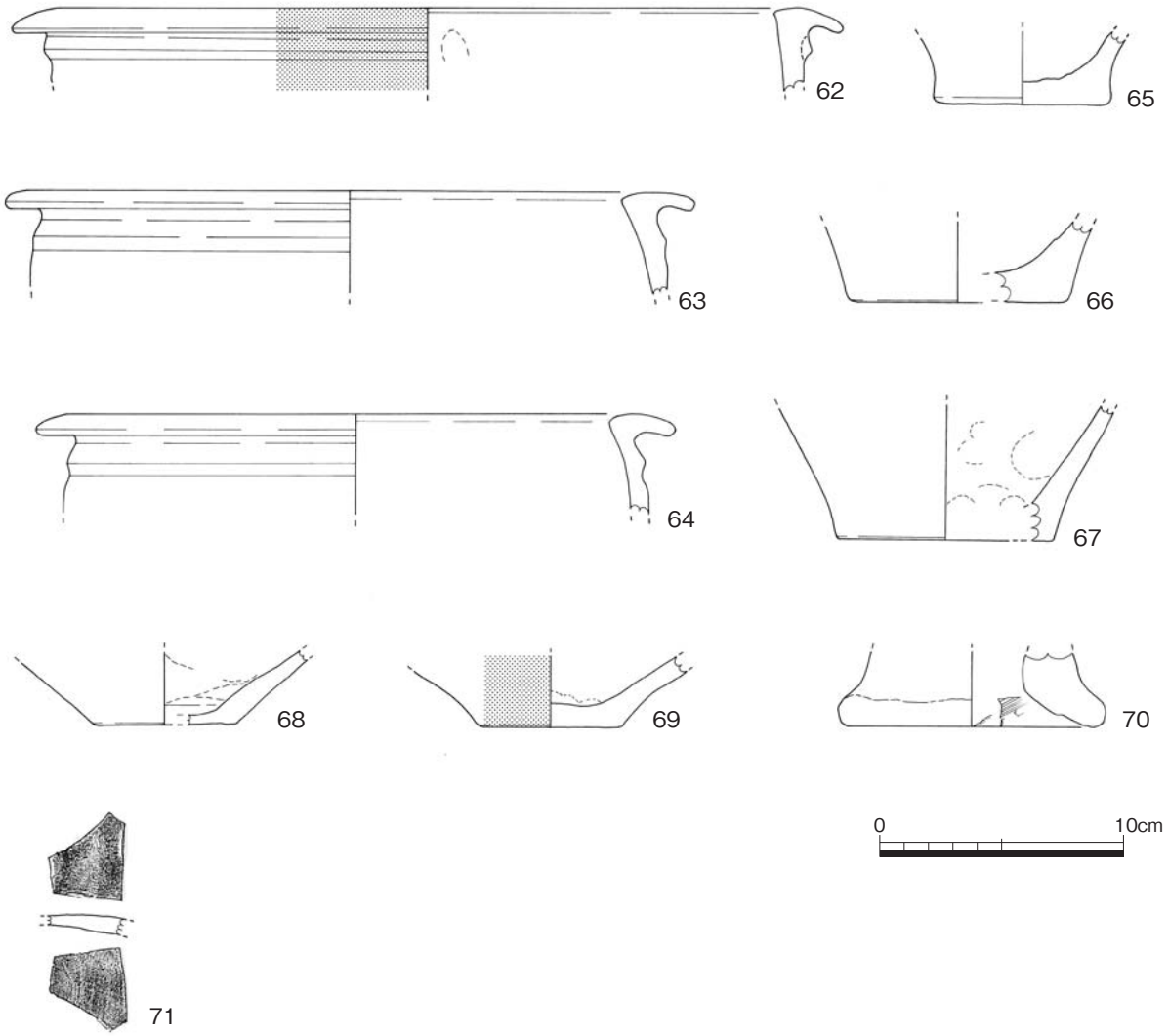


図19　3区東側自然河川堆積土上層出土遺物(2)

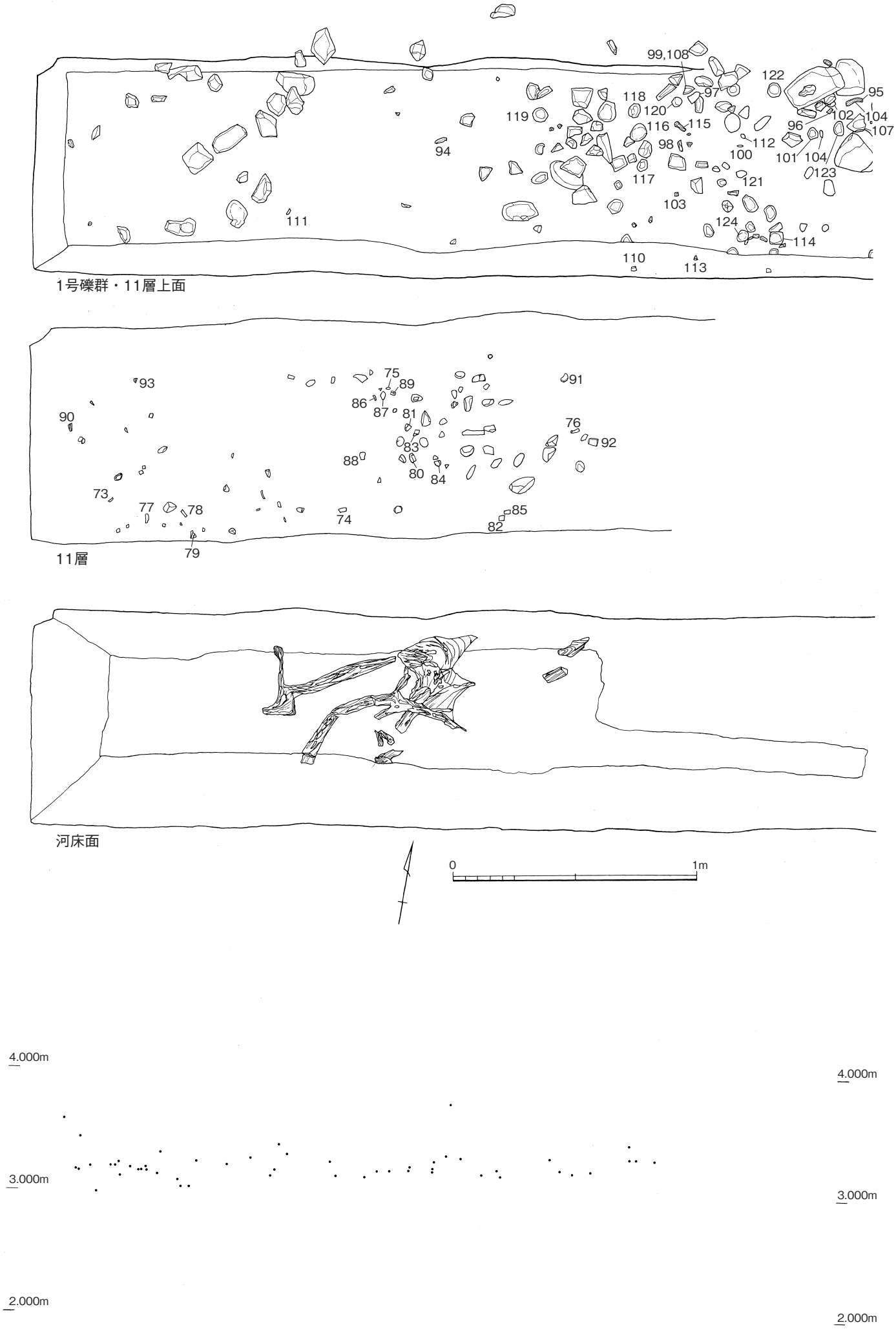


図20　3区西側自然河川遺物出土状況

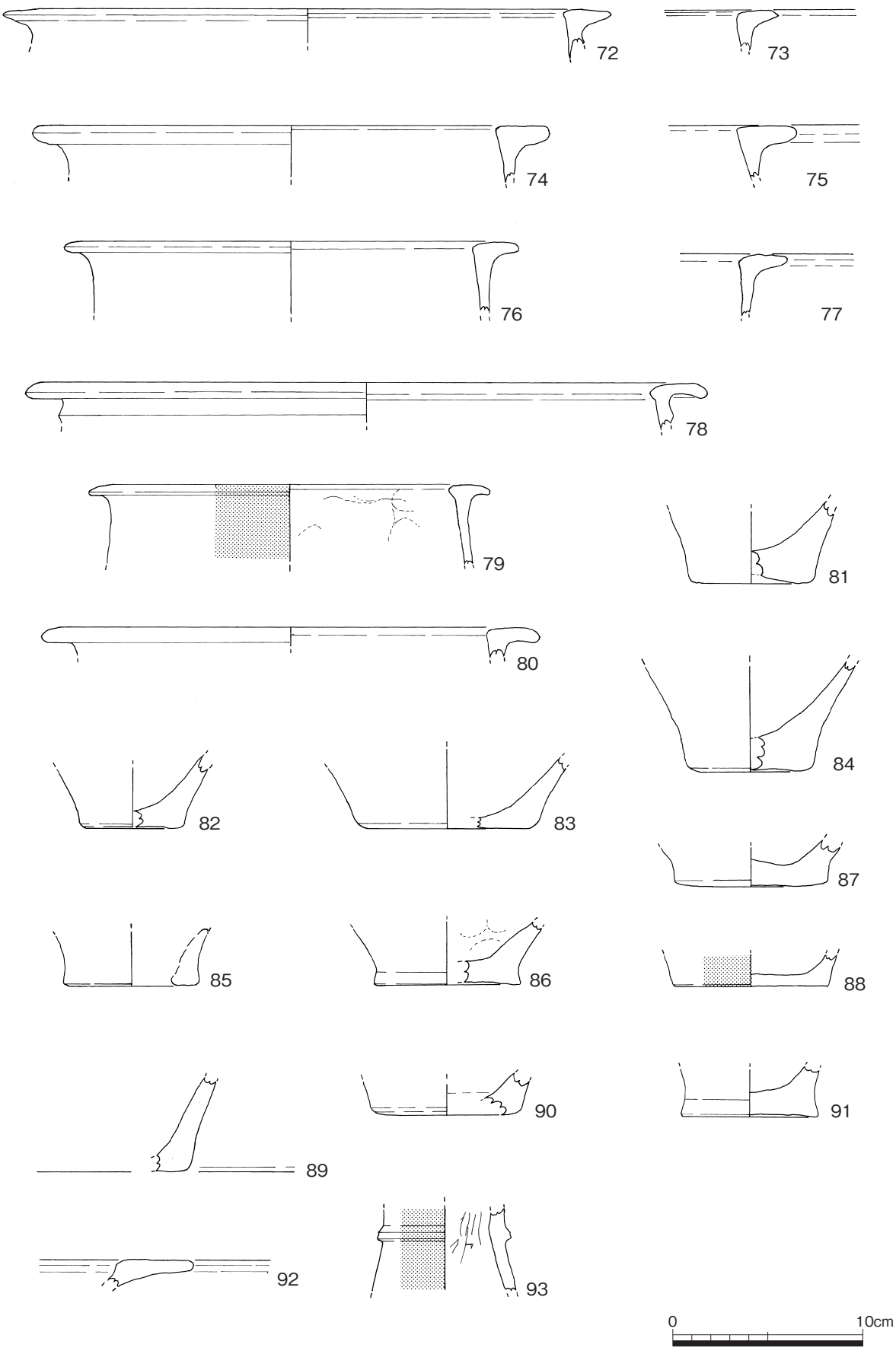


図21　3区西側自然河川堆積土出土遺物(1)

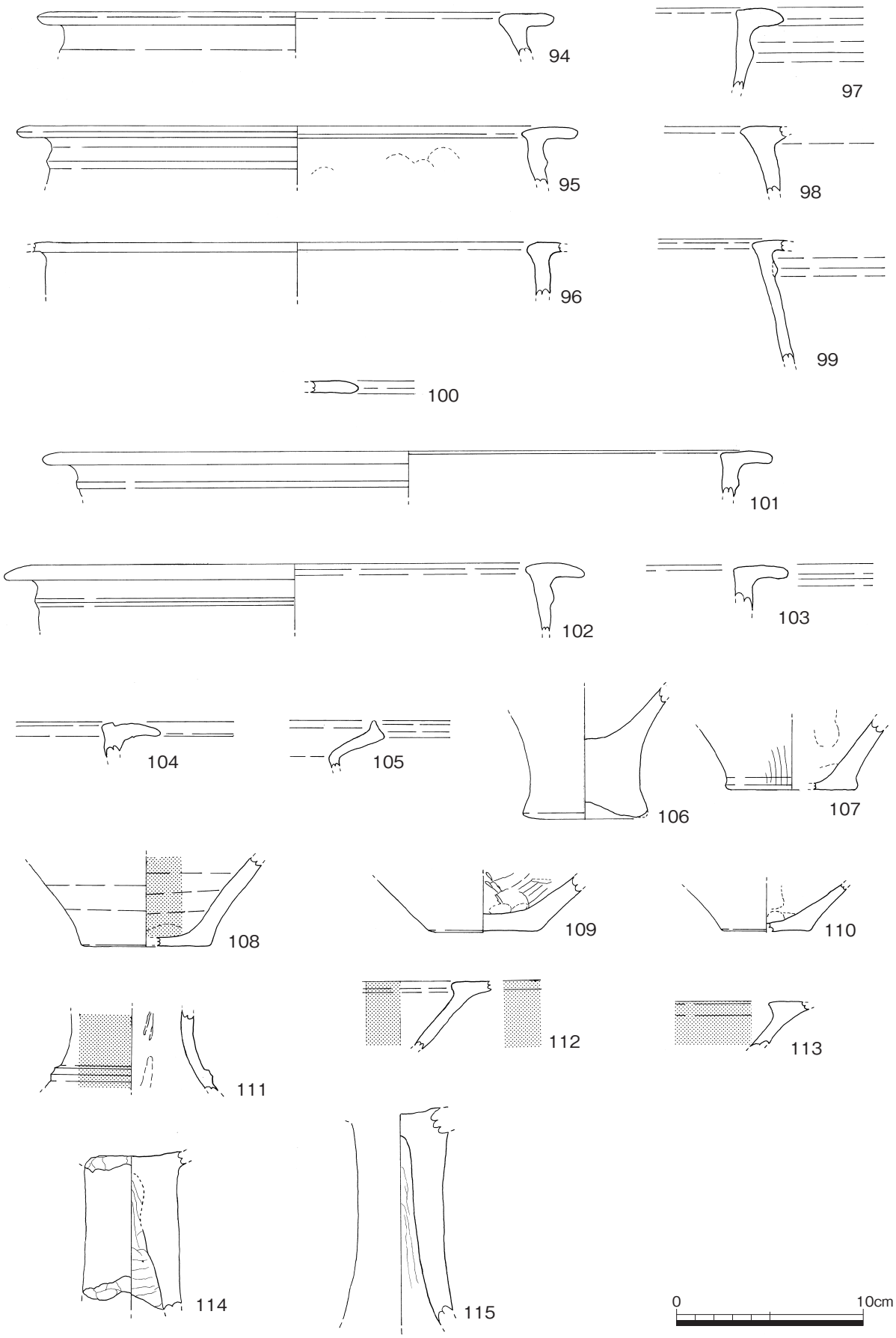


図22　3区西側自然河川堆積土出土遺物(2)

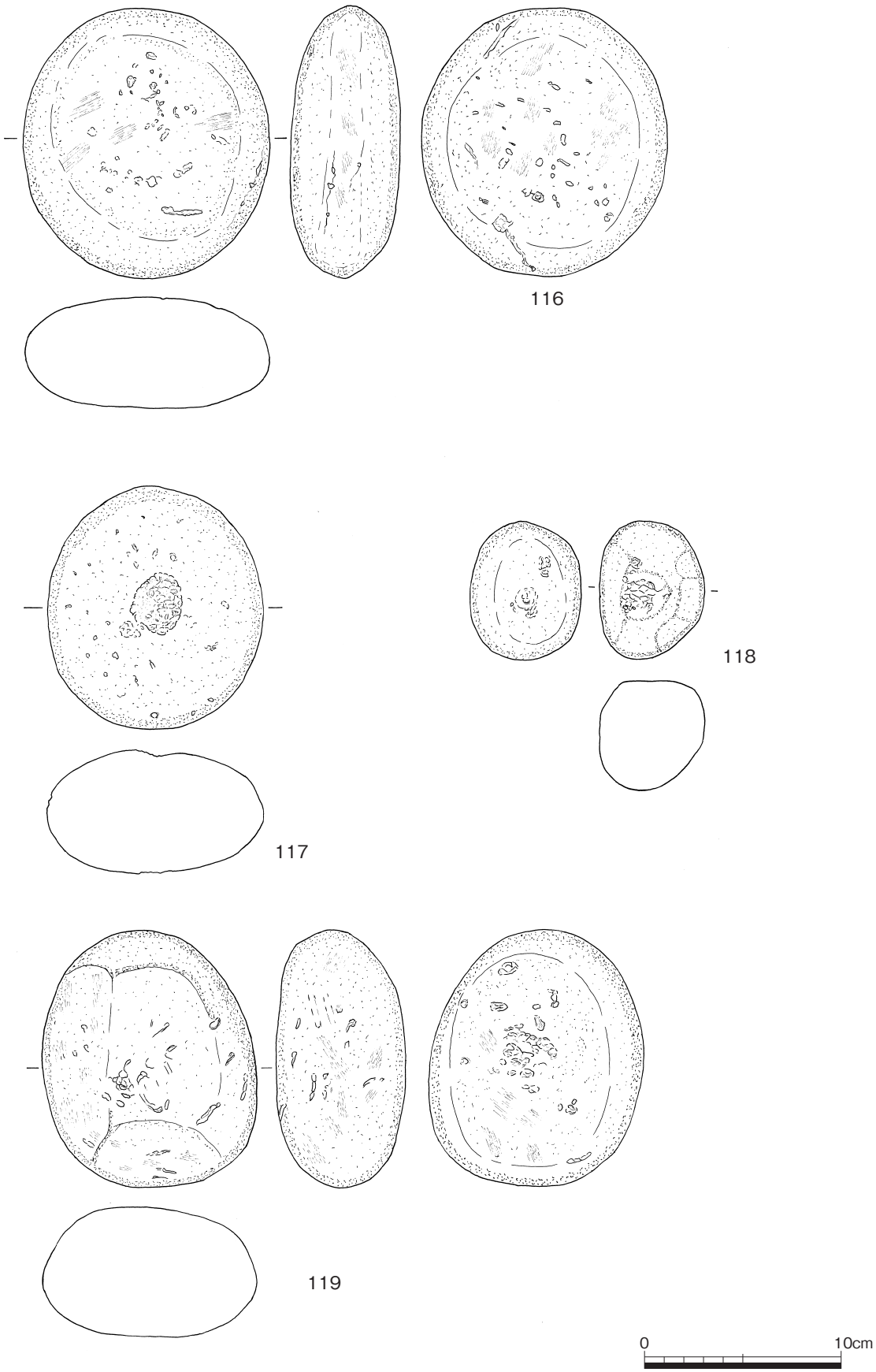


図23　3区西側自然河川堆積土出土遺物(3)

⑶ 遺構及び遺構に伴う遺物

○１号礫群（図24）

３区中央から西側で検出した。河川堆積土上層の11層上に構築されている。従って層位土は、古代以降の構築となる。また、近代の土層に覆われている。調査区内では中央約６ｍの範囲で礫が集中して分布し、西側にも間歇的に礫が分布する。礫の大きさは、大きいもので直径50cm 程度で、10～20cm のものが多く使用されている。集石周辺の遺物としては弥生土器のみが確認されている。11層上面で穴がみられ、西側南壁では長径140cm、短径80cm を測る穴として確認される。この穴には褐灰色粘質土が充填されていたが、この粘質土を除去すると、多量の湧水がみられた。そして、この穴を取り囲むように礫が配置されている。また、この穴に向けて礫群は傾斜している。本書「民俗的環境」で述べたとおり、壱岐島の水汲み場では湧水点を取り囲むように礫が配され、本遺構の特徴によく合致する。礫の大きさや、水汲み場全体の規模などは、水汲み場によって異なることから、規格性があるものではなく、自然条件等によって適合する形に構築されたものとみられる。インフォーマント（1932年深江平触出生・在住）の言によれば、1939年の河川改修以前に、この附近に水汲み場があったという。このような遺構の形態、土層堆積状況及び民俗調査によって、本遺構は近世・近代の水汲み場であると考えられる。

なお、水汲み場には「カワの神」が祭られることが多く、祠や巨岩などがその依り代となる。本遺構では、石祠などの明確な祭祀遺構は確認されていないものの、礫群北側で出土した花崗岩製の丸石は依り代であった可能性も想定される。

【遺物】（図22、図25、図26）

遺構が11層上に構築されているため、出土遺物は、11層（河川堆積土上層）に伴う可能性があるが、ここでは１号礫群検出中に出土した遺物をとりあげる。

95～99、101、102、107、108は甕である。須玖Ⅰ式～須玖Ⅱ式が多い。**112**は内外面に丹塗りが施される。

120～122、124、125は磨石である。**123**は台石である。**126**は叩石である。**127**は花崗岩製の丸石である。部分的に研磨されている。大きさ、重さ、石材からみて弥生時代の磨石ではない。磨石花崗岩は壱岐島では産出しないので、島外からもたらされたものである。近世には唐津方面や瀬戸内方面から花崗岩を搬入し、鳥居や石祠を製作することが壱岐島内で認められる。丸石を神の依り代であるとみる信仰も認められることから、本例もそのような事例である可能性もある。128は黒曜石剥片である。風化面から旧石器時代の所産であるとみられる。

遺物としては、弥生時代遺物が大半であるが、遺構は、近世・近代の所産とみられる。近世・近代の遺物が少ないのは、水汲み場という性格上、清浄が保たれたことが反映されたものとみられる。

⑷ 近代層出土遺物（図26）

129は須恵器の壺肩部である。１条の沈線がみられる。５層で出土した。**130、131**は明青花である。１層で出土した。

３．２区の調査

⑴ 土層（図27）

1939年の埋立土を除去した下層の状況は次のとおりである。

１層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土。褐灰色（10YR5/1）が混じる。部分的に黒色（2.5YR1.7/1）が混じる。しまり弱い。

２層：にぶい褐色（7.5YR5/3）粘質土。明赤褐色（2.5YR5/6）が混じる。しまり弱い。

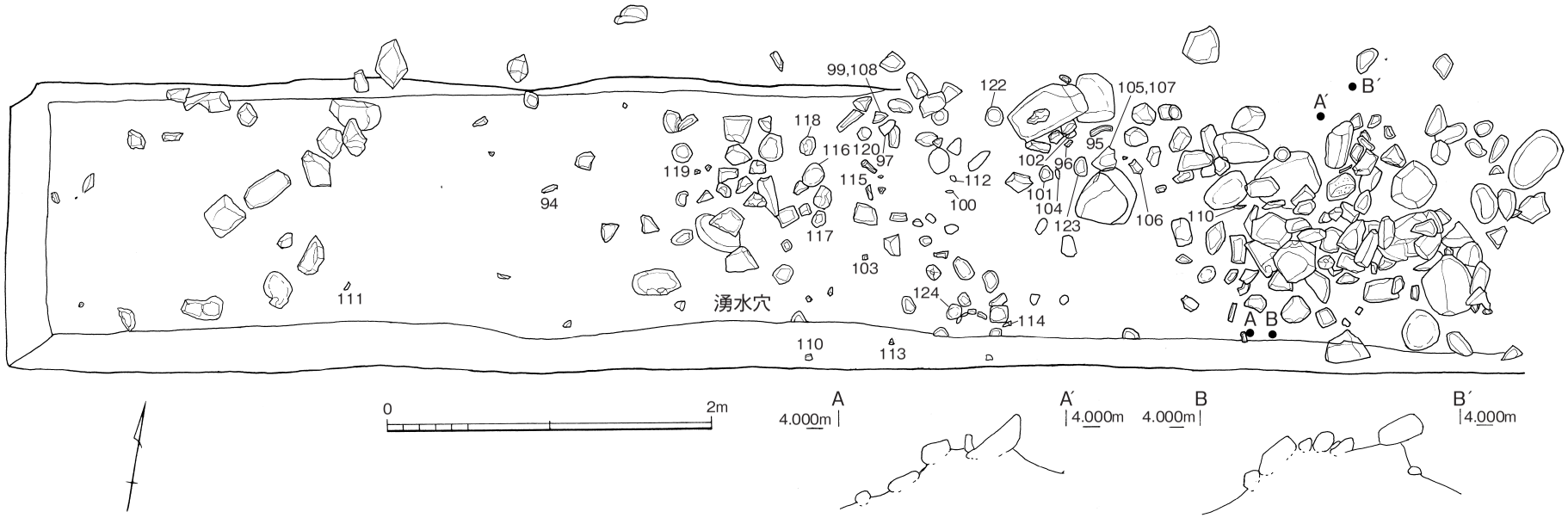

99,108
122
105,107
A′
B′
118
116
120
97
95
119
115
112
102
96
101
104
123
106
110
94
100
117
103
111
湧水穴
124
114
A
B
110
113
0
2m
A
4.000m
A′
4.000m
B
4.000m
B′
4.000m

図24　3区1号礫群

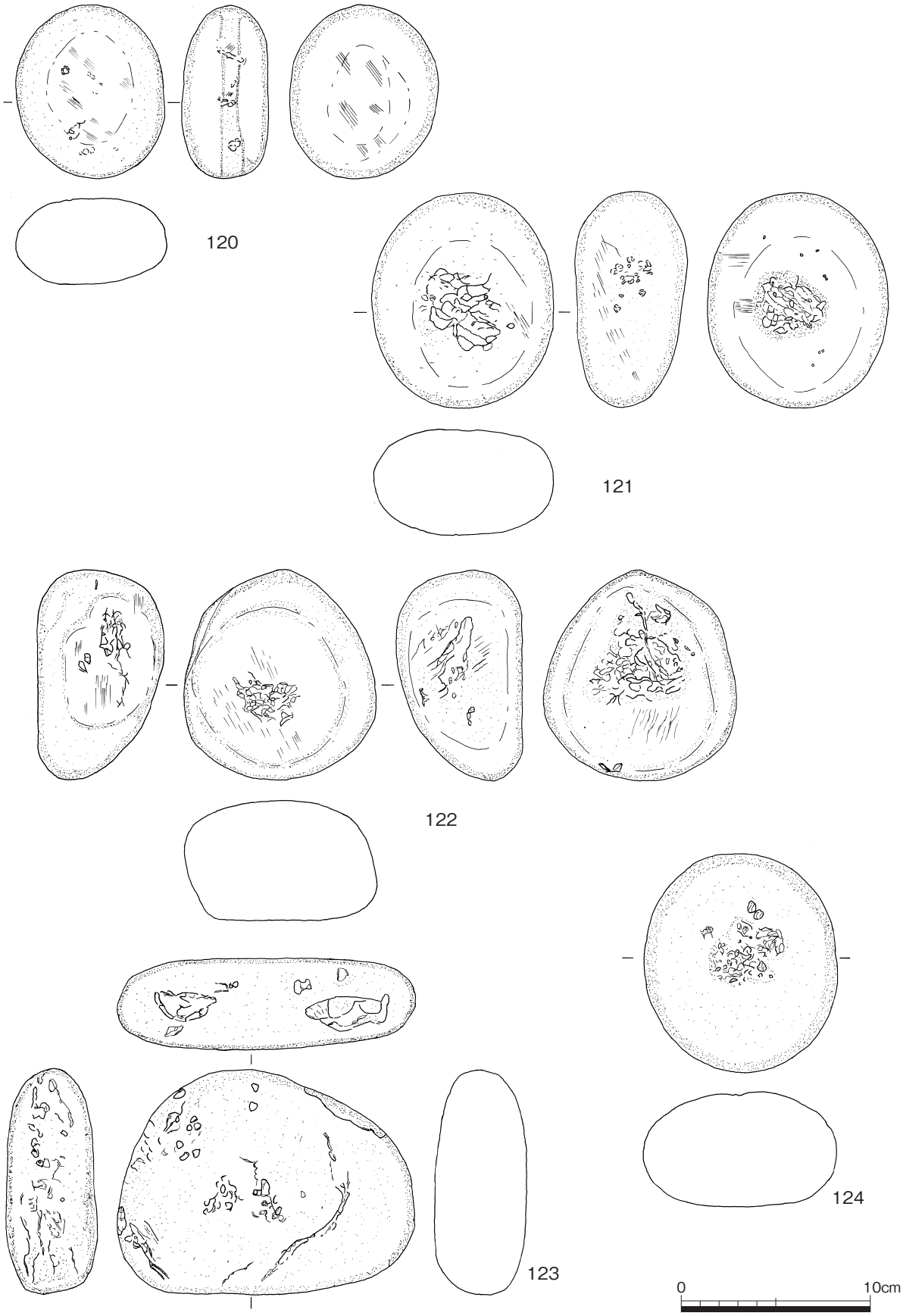


図25　3区1号礫群出土遺物(1)

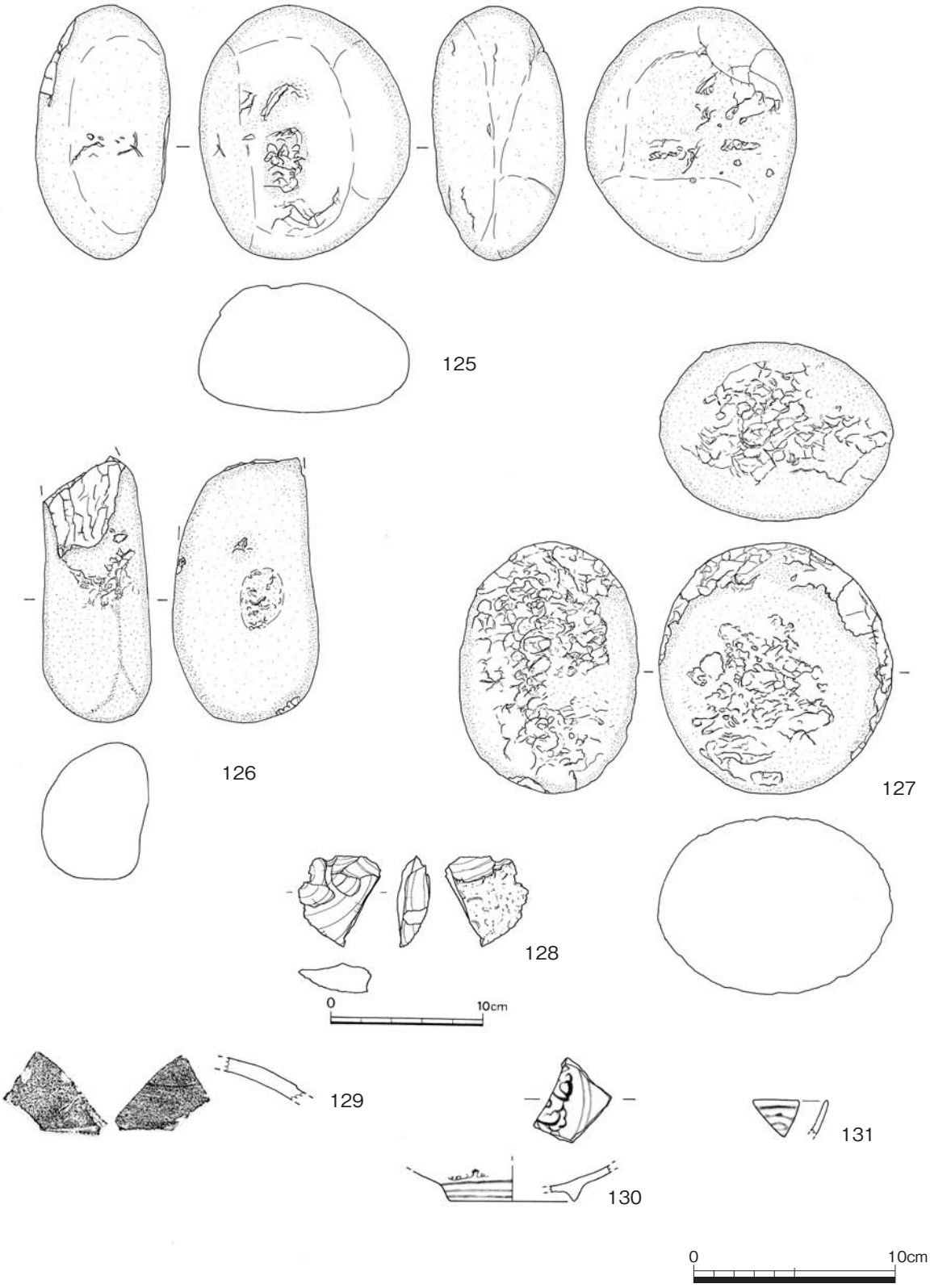


図26　3区1号礫群出土遺物(2)・近代層出土遺物

３層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土。褐灰色（10YR5/1）が混じる。黒色（2.5YR1.7/1）が斑に混じる。しまり強い。１層と類似する。
４層：褐灰色（5YR4/1）粘質土。黒色（2.5YR1.7/1）が混じる。しまり弱い。
５層：明オリーブ色（2.5GY7/1）シルト土。しまり弱い。
６層：褐灰色（5YR4/1）粘質土。しまり弱い。
７層：褐灰色（10YR4/1）粘質土。しまり弱い。
８層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土。褐灰色（10YR5/1）が混じる。しまり弱い。
９層：褐灰色（10YR5/1）粘質土。しまりは極度に弱く、ぼそぼそしている。
10層：褐灰色（10YR4/1）粘質土。褐色（10YR4/6）が混じる。しまりは極度に強い。
11層：褐灰色（10YR5/1）粘質土。灰色（7.5Y6/1）が斑に混じる。しまりは弱い。
12層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土。褐灰色（10YR5/1）が多く混じる。しまり弱い。
13層：緑灰色（10GY6/1）粘質土。オリーブ灰色（10Y4/2）が混じる。しまり弱い。
14層：褐灰色（10YR5/1）粘質土。しまり弱い。
15層：褐灰色（10YR4/1）砂礫土。
16層：灰色（7.5Y4/1）シルト土。オリーブ黒色（7.5Y3/1）が混じる。しまり強い。
17層：黒褐色（10YR3/1）砂礫土。近代河川河床面。

⑵ 近代河川跡及び自然河川跡に伴う遺物

○河川跡の構造と年代

２区全面で検出された。東西方向・南北方向とも立ち上がりを確認することはできなかった。そのため、２区は河川の流路中に該当するものと考えられる。河床面における出土遺物中の最新遺物を確認すると、近代の陶磁器やガラス器が認められ、近代の流路であることがわかる。河床面上面の標高は最高部が2.85m、最低部が2.46m である。

【遺物】（図28、図29）

132～151は２区近代河川河床面（17層）出土である。**132～147**は弥生土器である。須玖Ⅰ式・須玖Ⅱ式が多い。**143**のような遠賀川以東系甕もみられる。**148**は近世陶器、**149**は近世磁器である。**150**は近代ガラス器である。**151**は肥前磁器である。

152～160は近代河川堆積土出土である。**152**は肥前磁器である。**153～160**は弥生土器である。須玖Ⅰ式・須玖Ⅱ式が多い。

⑶ 遺構

○仮設橋（ワタリ）遺構（図30）

２区中央で検出した。河床面から10～40cm の高さに、140cm の間隔をおいて２箇所に直径10cm 程度の木がわたされている。西側では木は１本検出されたが、東側では６本程度の木が検出された。東側では横にわたされた木を支えるために木が打ち込まれたり、直径15cm 程度の礫が配されている。この遺構についての民俗調査（聞き取り）を行ったところ、仮設の橋である「ワタリ」とみる話と、水流をせきとめたり、ごみを絡めとるための柵である「シガラミ」とする話がきかれた。「シガラミ」については対馬市峰町木坂（永留・永留1975）や諫早市沖城跡（川瀬2005）などで発見例があるが、杭の間隔は本遺構より密であった。また、２箇所で横木が渡っている点も勘案すると仮設の橋である「ワタリ」である可能性が高い。インフォーマント（1932年深江平触出生・在住）の言によれば、周囲に当時６箇所程度の「ワタリ」があったという。16層はこの仮設橋遺構を覆う形となっているが、仮設橋が廃絶した後、堆積したものと考えられる。

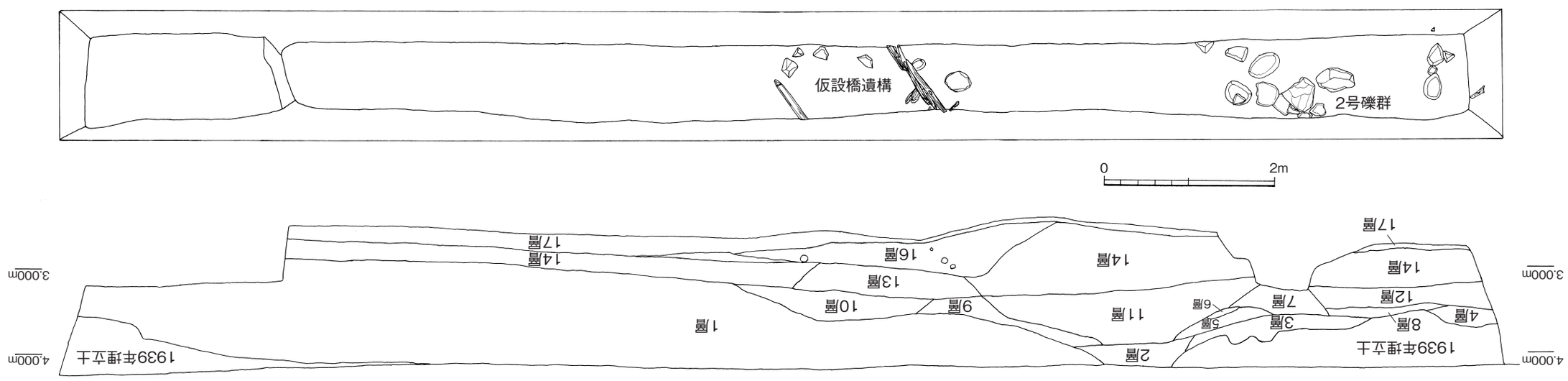


図27　2 区平面図・土層図

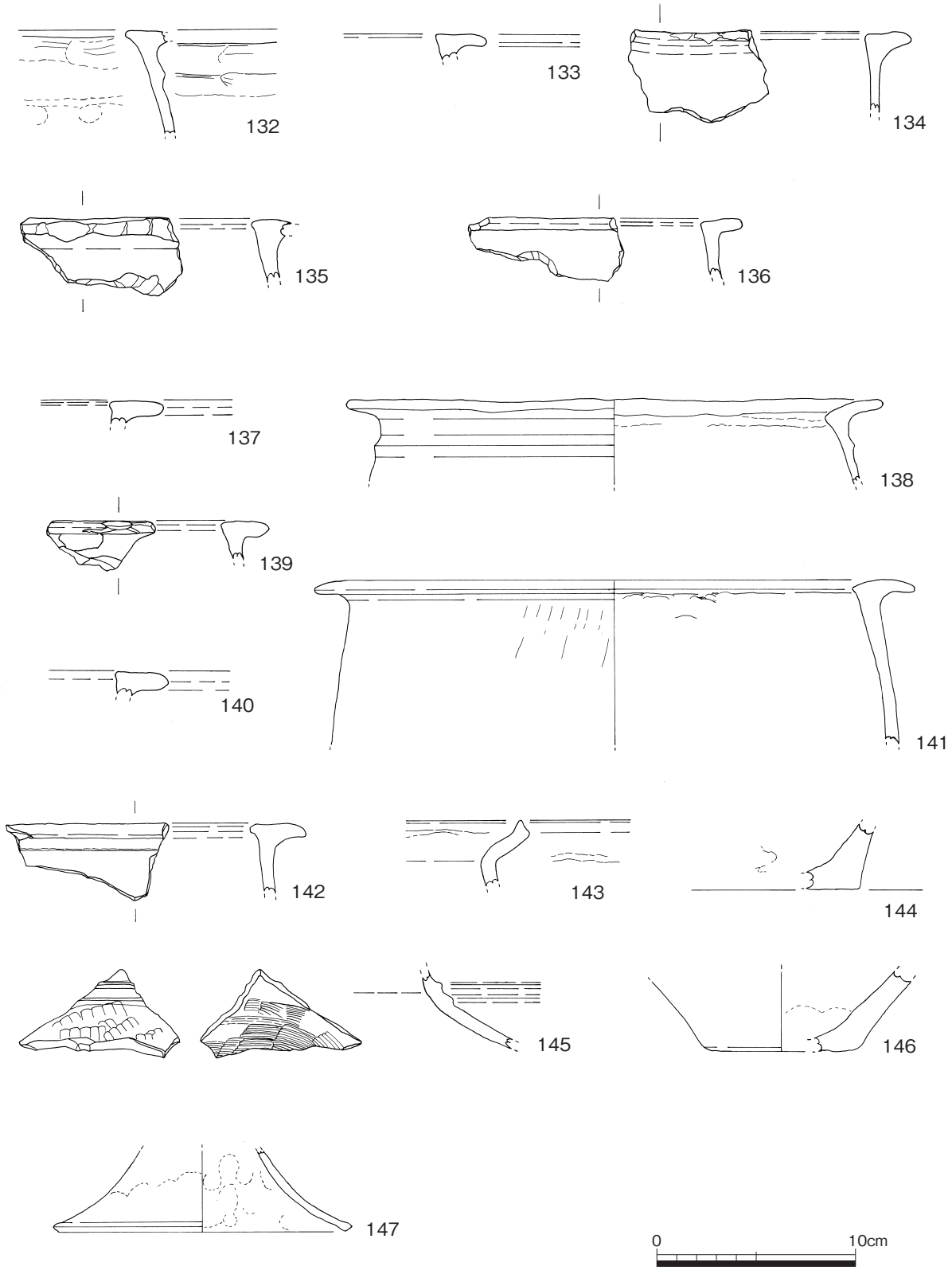


図28　2区近代河川河床面出土遺物(1)

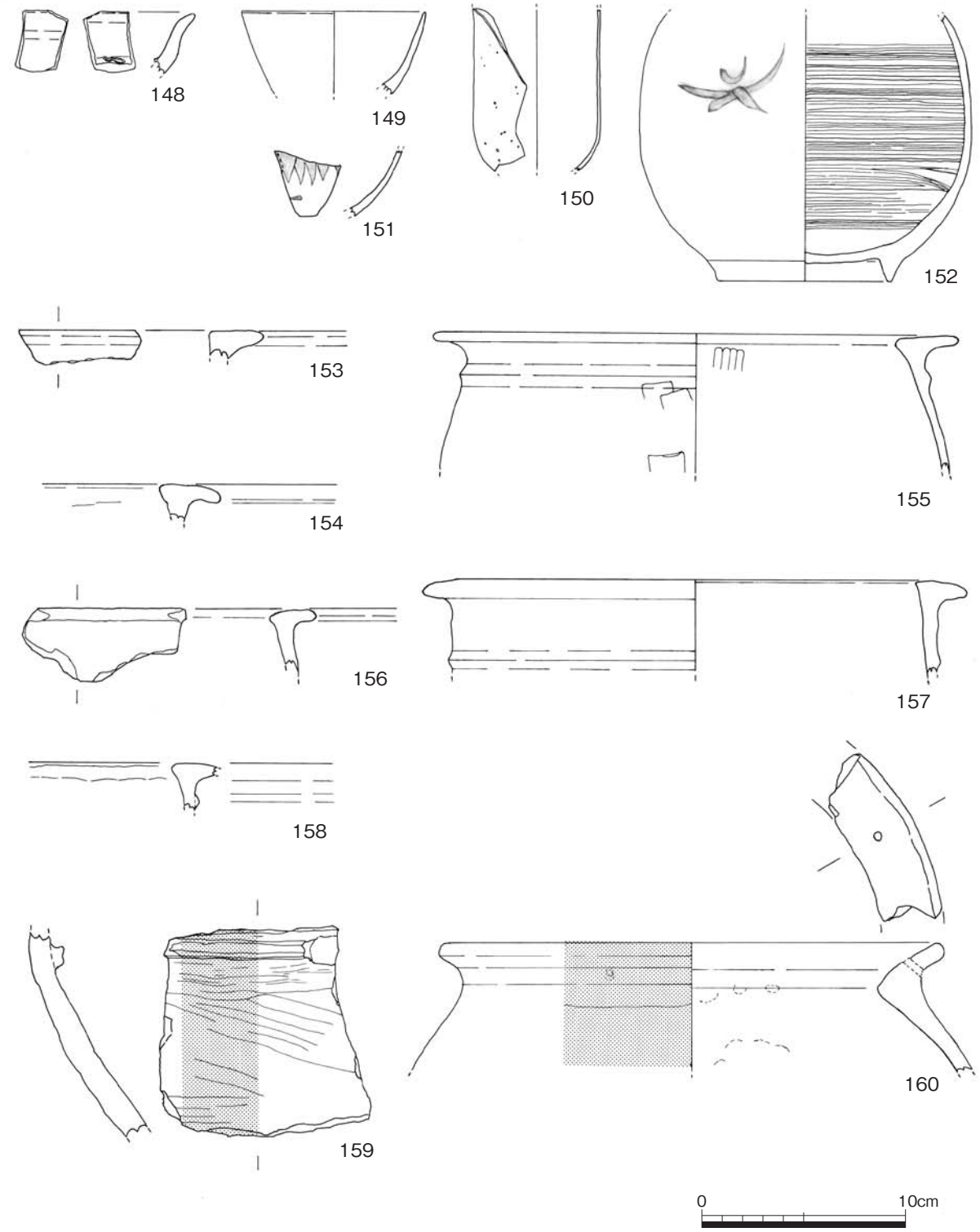


図29　2区近代河川河床面出土遺物(2)・近代河川堆積土出土遺物

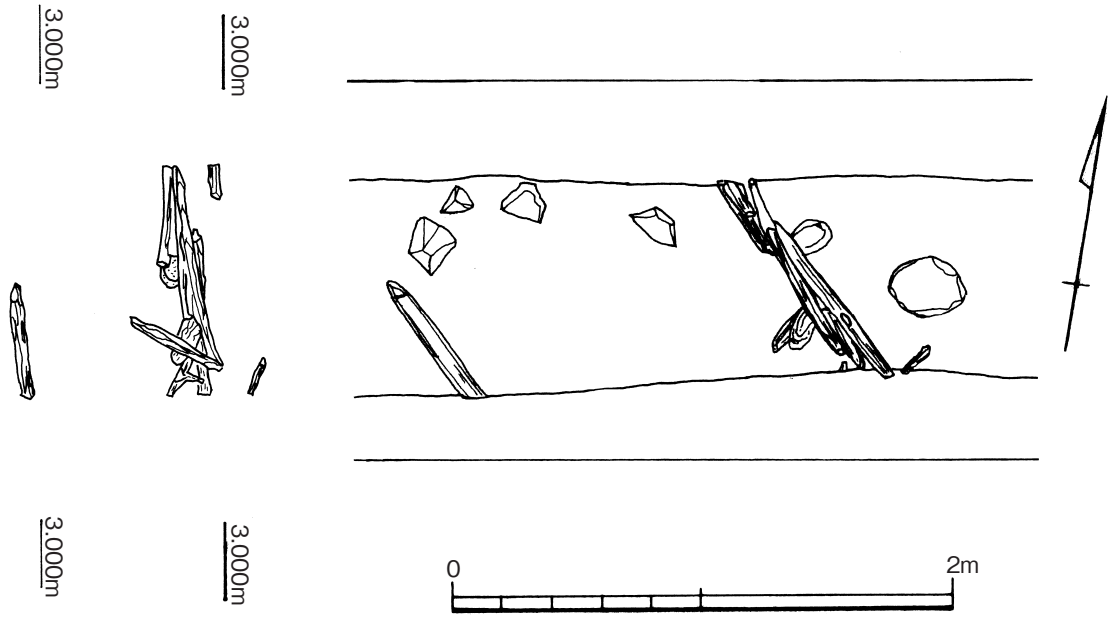


図30　2区仮設橋遺構

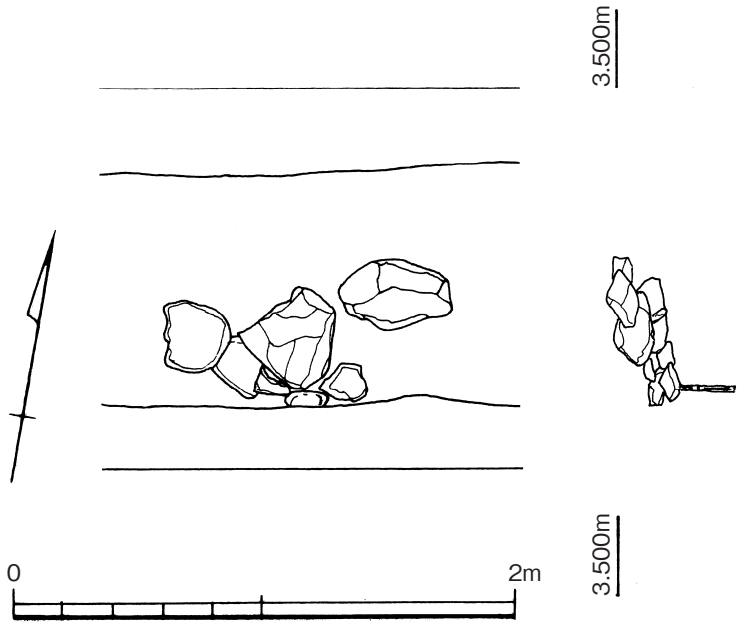


図31　2区2号礫群

○2号礫群（図31）

2区東側で検出した。40cm程度の自然礫が14層上に配置されている。7層に覆われている。23cm程度の長さの竹が打ち込まれ、その上に礫が載っている部分がある。また、礫と礫の間隙に竹が差し込まれている部分もある。近代河川跡河床面よりも層位的に上位に位置するので、年代は近代である。掘りこんで（7層）竹と礫を設置している。水田関係の遺構である可能性があるが、詳細な用途については不分明である。

4．１区の調査

⑴　**土層**（図32）

１層：橙色（7.5YR6/6）粘質土。青灰色（5B5/1）が混じる。粘性弱い。しまり弱い。

２層：青灰色（5B5/1）粘質土。橙色（7.5YR6/6）が少量混じる。下部では黒色（2.5Y2/1）が混じる。粘性強い。しまり弱い。

３層：２層と同様であるが、より黒色（2.5Y2/1）が多く、暗青灰色（5B4/1）が部分的に混じる。

４層：暗青灰色（5B3/1）砂礫土。近代河川河床面。

⑵　**近代河川跡及び自然河川跡に伴う遺物**

○河川跡の構造と年代

１区の調査範囲（東端から５m）である東側全面で検出された。東西方向・南北方向とも立ち上がりを確認することはできなかった。そのため、１区東側は河川の流路中に該当するものと考えられる。河床面では弥生土器片などが出土したが、河床面の砂礫層の様態や河床面標高が２区と類似するので、近代の流路であると判断した。河床面上面の標高は最高部が2.94m、最低部が2.57m 以下である。

【遺物】（図32）

161は須玖Ⅰ式の甕口縁部である。近代河川河床面（４層）で出土した。

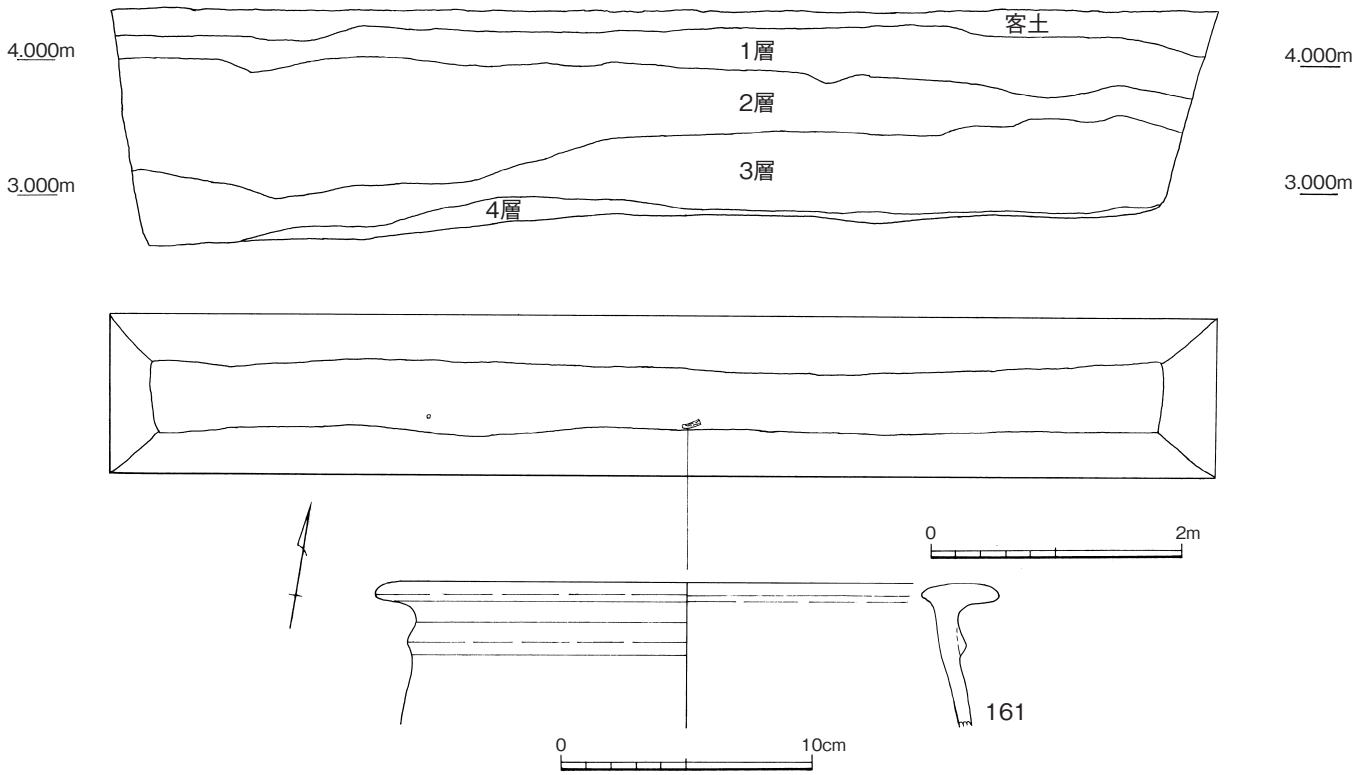


図32　１区平面図・土層図・出土遺物

５．1939年埋立土

1939年埋立土は、幡鉾川の直線化工事の際、原の辻遺跡の丘陵部で採土工事が行われ、蛇行した流路を埋め立てたことによって生じたものである。1939年４月27日、当時長崎県立壱岐中学校に勤務していた鴇田忠正は現場監督の松永武が持参した遺物をみて重要性を感じ、翌28日と29日の両日にわたって原の辻遺跡の調査を行った。このとき立会調査されたのは「東側遺跡」とされた箇所であるが、この地点から北方約50mの地点（「北側遺跡」）でも採土が行われ、遺物が出土している。鴇田は「東側遺跡」について３層の包含層を確認しており、塵捨場であると推定している（鴇田1944）。

今次の調査では、1939年の幡鉾川直線化工事に伴う土層が確認されている。埋立には主に灰オリーブ色（5Y6/2）粘質土が用いられ、2013年川原畑地区の調査でも近代河川を埋め立てた土として使用が確認されている（古澤・川道2014）。この灰オリーブ色の埋立土には遺物がほとんど包含されていないが、灰オリーブ色粘質土の上面の窪地になっている箇所や旧地形の窪地などに、黒褐色粘質土が充填されており、この黒褐色粘質土には多量の遺物が包含されている。このような遺物を多量に含む黒褐色土は今次調査の１区、２区、３区いずれの調査区でも確認することができた。特に、２区西側では、南北２m、東西３m、深さ１m程度の不整形の土坑状をなして、黒褐色土が充填されていたが、多量の遺物が出土した。土質や遺物の多量包含状態からみて、何らかの遺構に伴う土壌によって埋め立てられたものと考えられる。その供給源としては1939年の「東側遺跡」か「北側遺跡」ということになるが、どちらに帰属するかは知る術はない。なお鴇田忠正の「東側遺跡」では包含層が３層確認された。このうち、第一層は須玖Ⅱ式、第二層が高三潴式から下大隈式の過渡的様相を示すとされる（髙倉1982）。今次の1939年埋立土では、弥生時代中期中葉から弥生時代終末期にかけての土器が混在して出土し、鴇田「東側遺跡」と同型式の土器も含まれるが、より古い土器や新しい土器も含まれている。いずれの地点を供給源としていたとしても高元地区の遺構に由来するものであるということは疑いない。

【遺物】（図33～図42）

162～260は弥生土器である。甕には須玖Ⅰ式～弥生時代後期の資料がみられる。壺も弥生時代中期から後期の資料があり、豊前系の複合口縁壺（**235**）もみられる。脚付土器には小さな丹塗土器（253）もみられ特徴的である。高坏には弥生時代中期から終末期の土器もみられる。

261は擬粘土帯土器である。胎土には多量の砂粒が混じる。**262**は楽浪系泥質土器である。胴部と胴部から底部にかけての２片があり、同一個体であるとみられる。外面には縄（原体Ｓ撚）タタキが施され、内面には年輪に由来する当て具痕が残る。**263**は三韓系瓦質土器で短頸壺の肩部である。外面は肩部は縄（原体Ｚ撚）タタキ、頸部と肩部の境界は回転ナデで調整される。内面はナデ調整である。**264**は三韓系瓦質土器である。胴中部は平行タタキが施され、沈線が廻る。胴下部は格子タタキが施される。重複関係から、格子タタキ→平行タタキ→沈線の順で製作されたものと考えられる。内面はナデ調整であるが一部に工具痕が残る。胴部を平行タタキと格子タタキというようにタタキ具を使い分けて製作されている土器は、湖南・湖西地域の土器であるという指摘（寺井2001）がある。

270は青銅製鏃である。長さ3.872cm、厚さ4.67mm、幅9.61mmである。刃部は鎬が入り、断面菱形を呈する。茎部は断面が円形に近い。

271は石斧である。**272**は石庖丁の未製品である。**273**、**274**は凹石である。

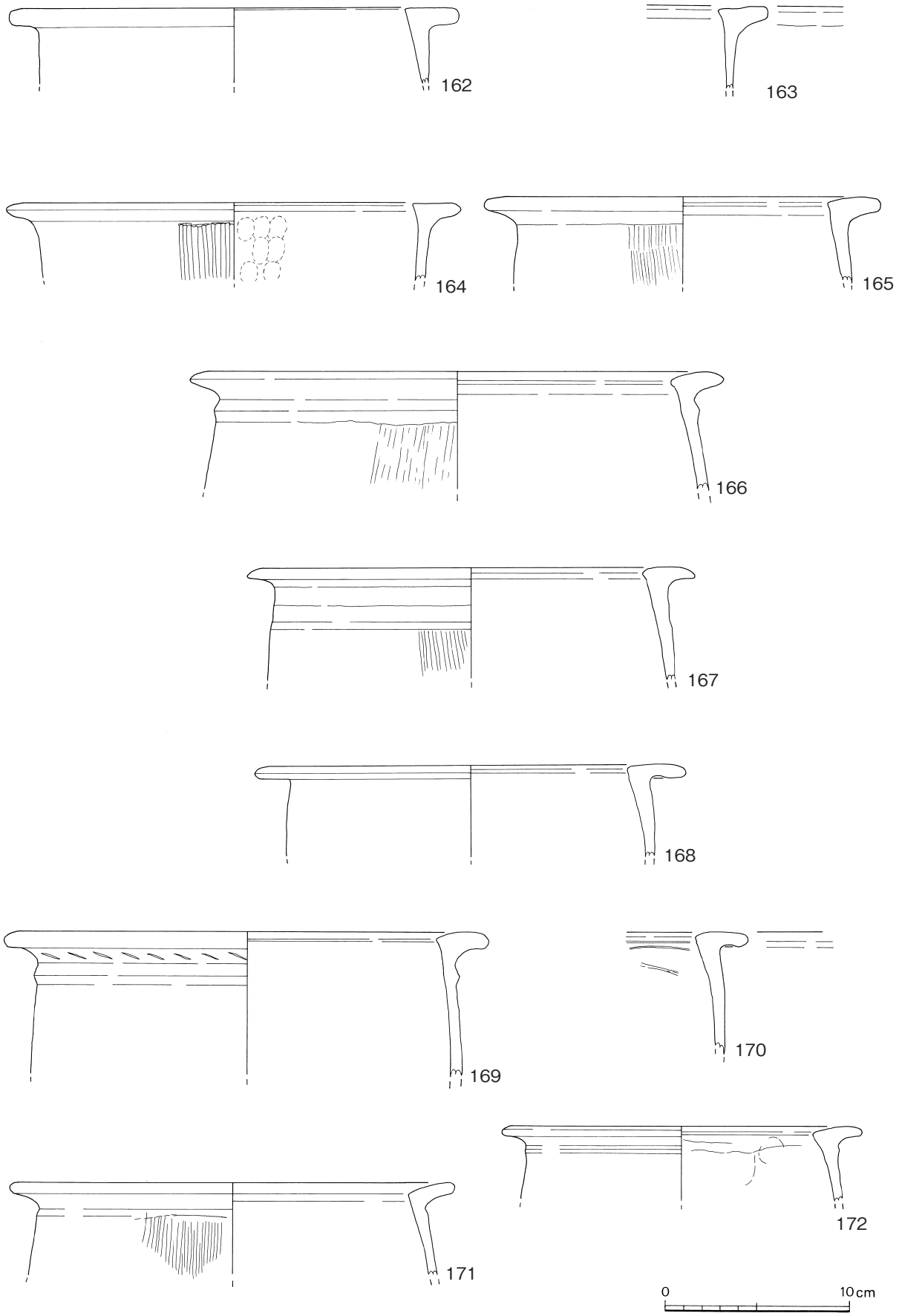


図33　1939年埋立土出土遺物(1)

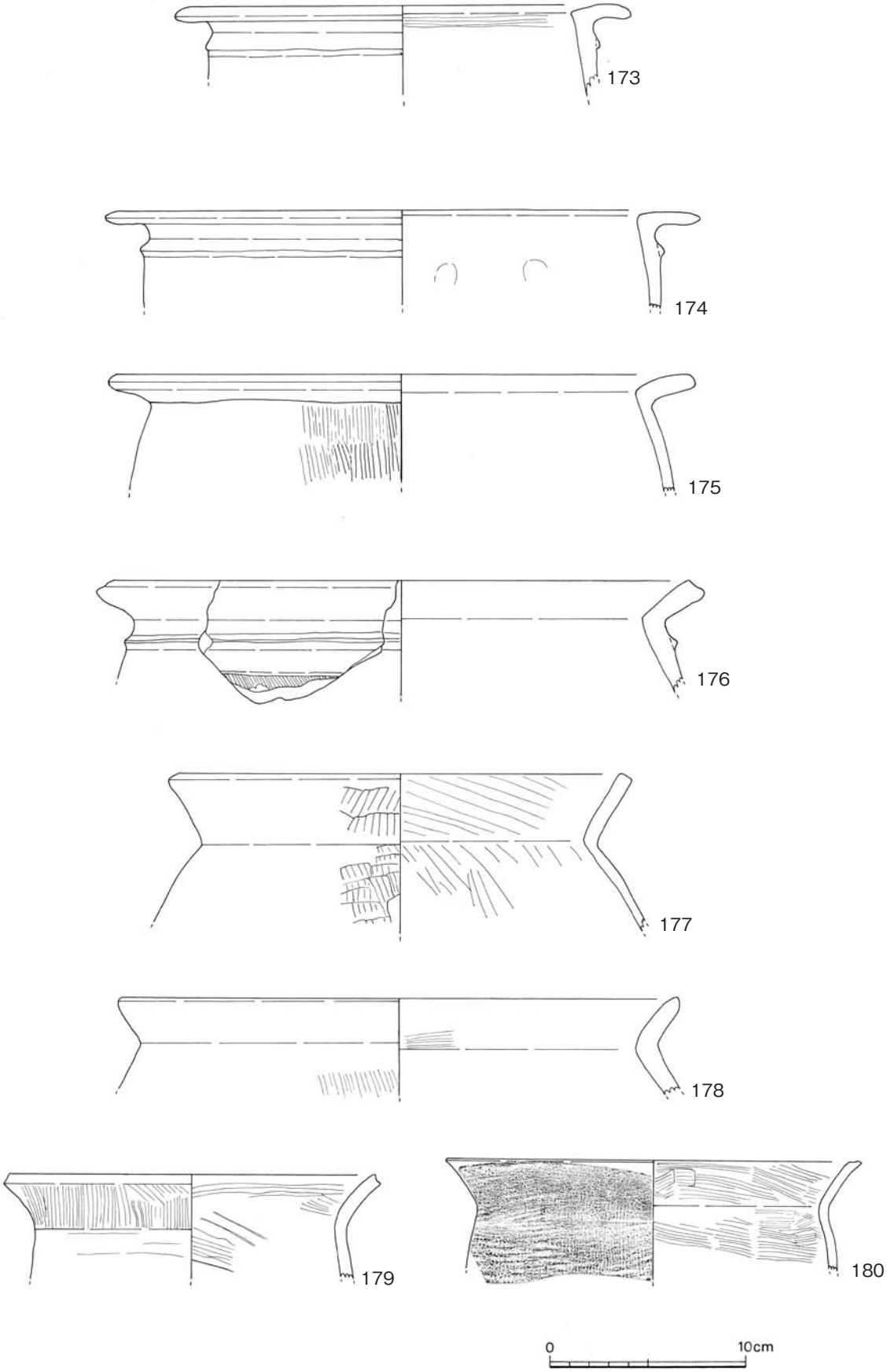


図34　1939年埋立土出土遺物(2)

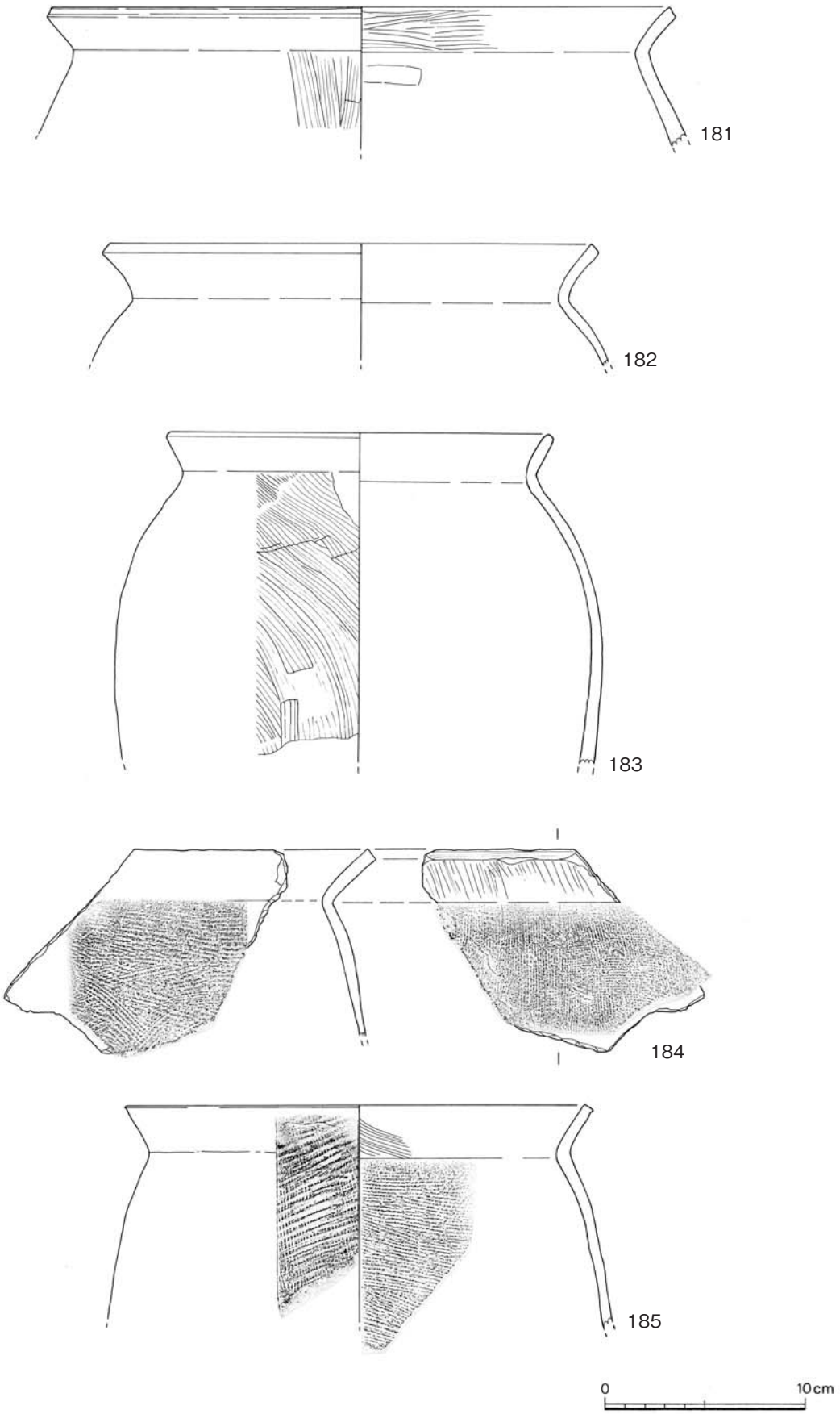


図35　1939年埋立土出土遺物(3)

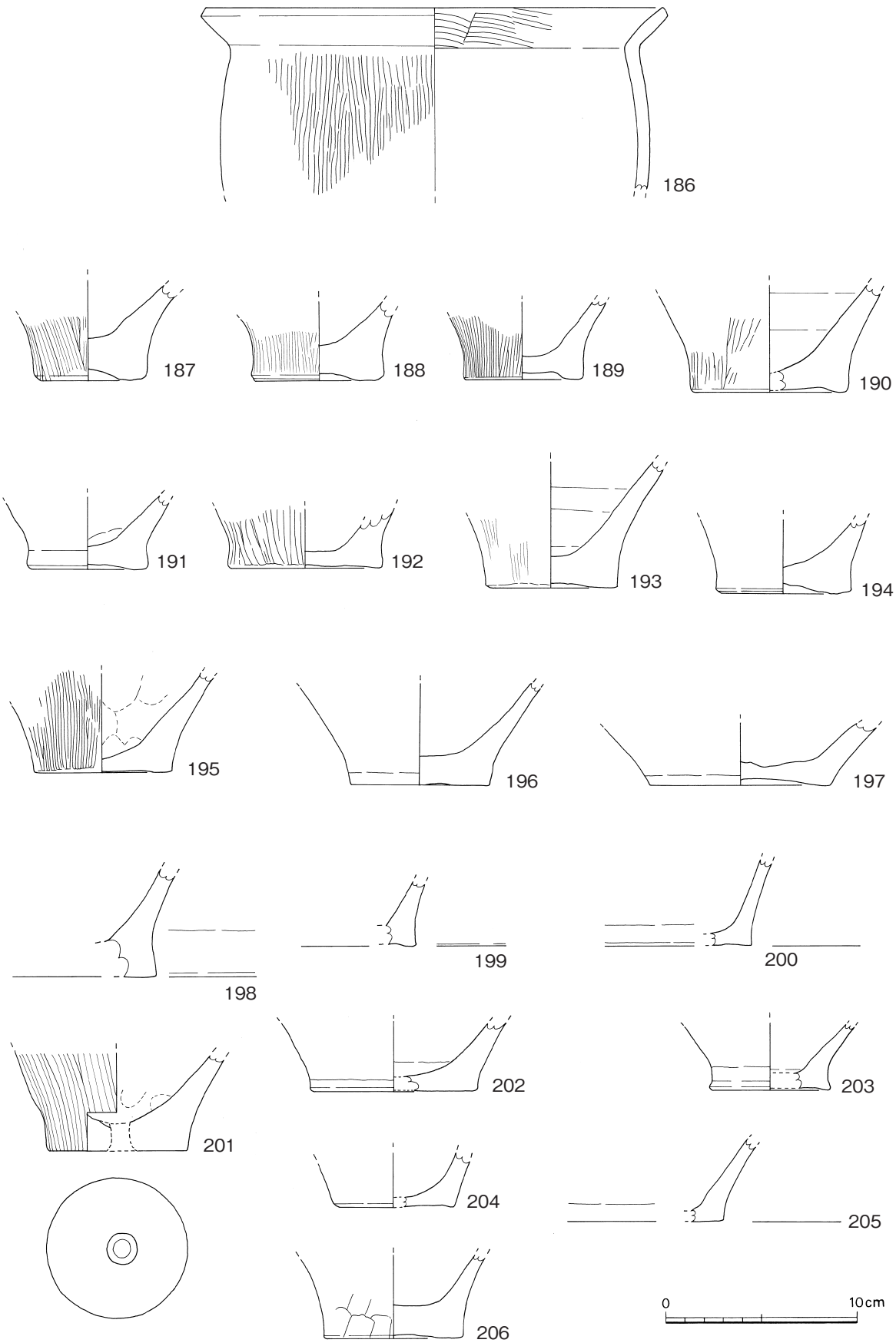


図36　1939年埋立土出土遺物(4)

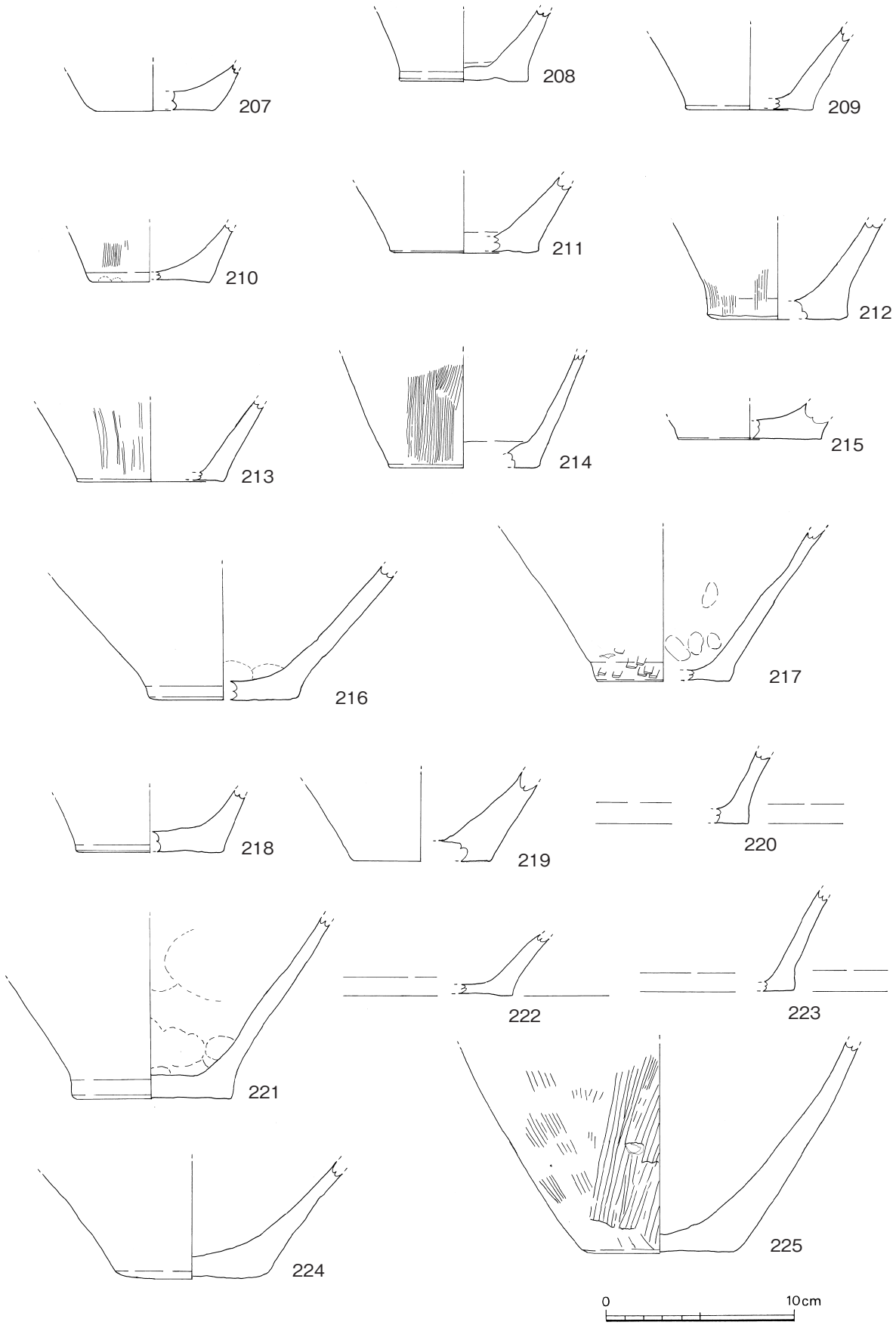


図37　1939年埋立土出土遺物(5)

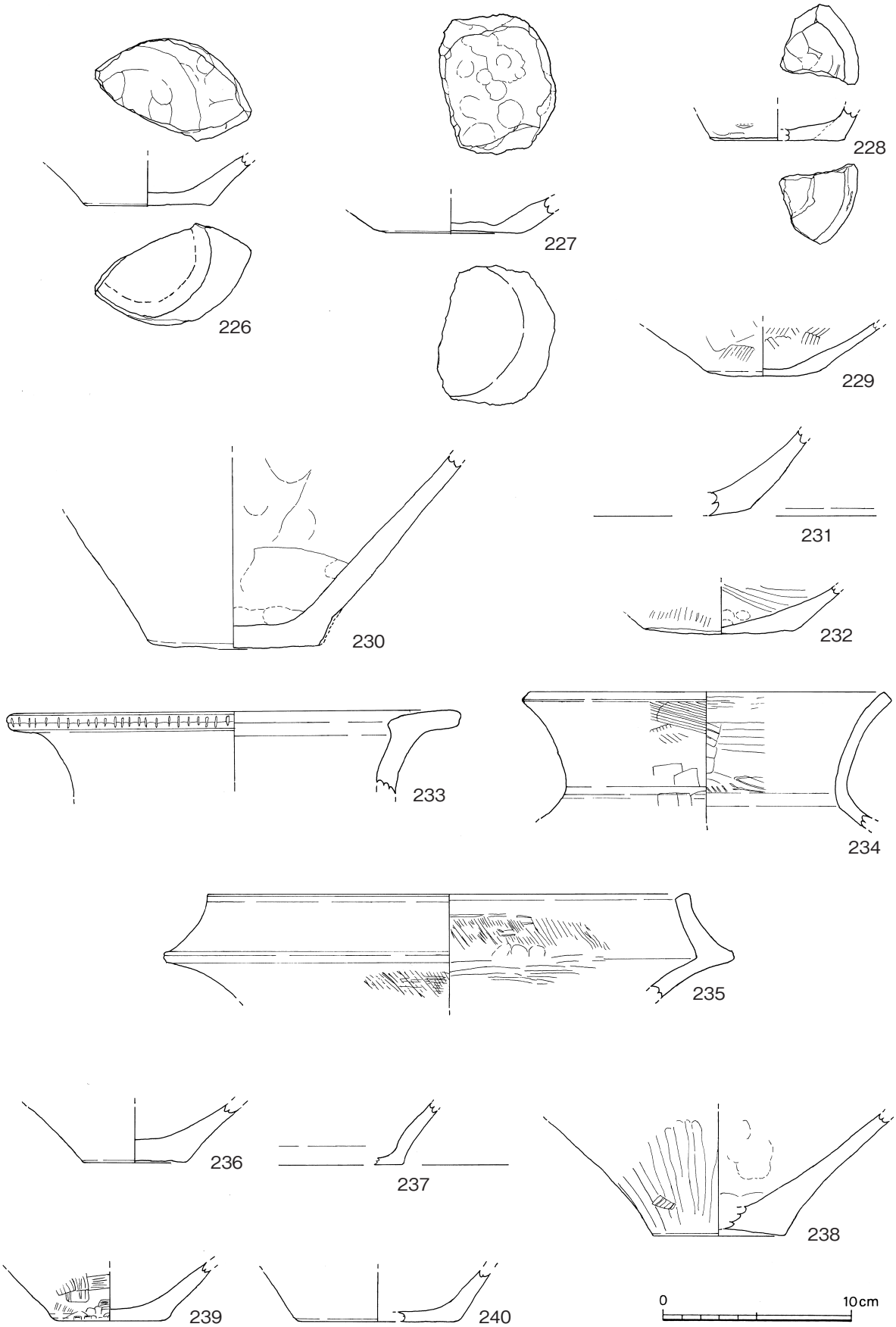


図38　1939年埋立土出土遺物(6)

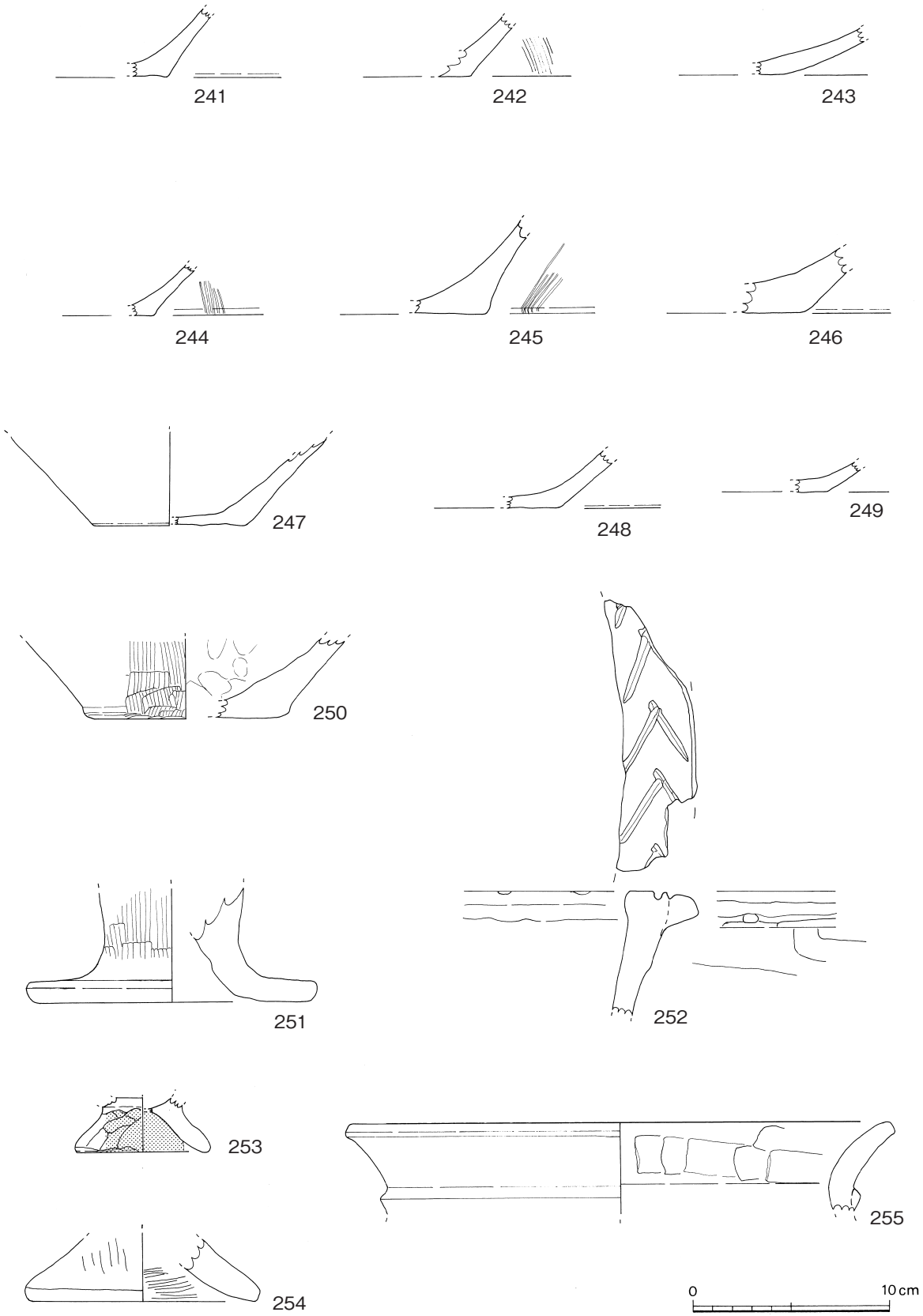


図39　1939年埋立土出土遺物(7)

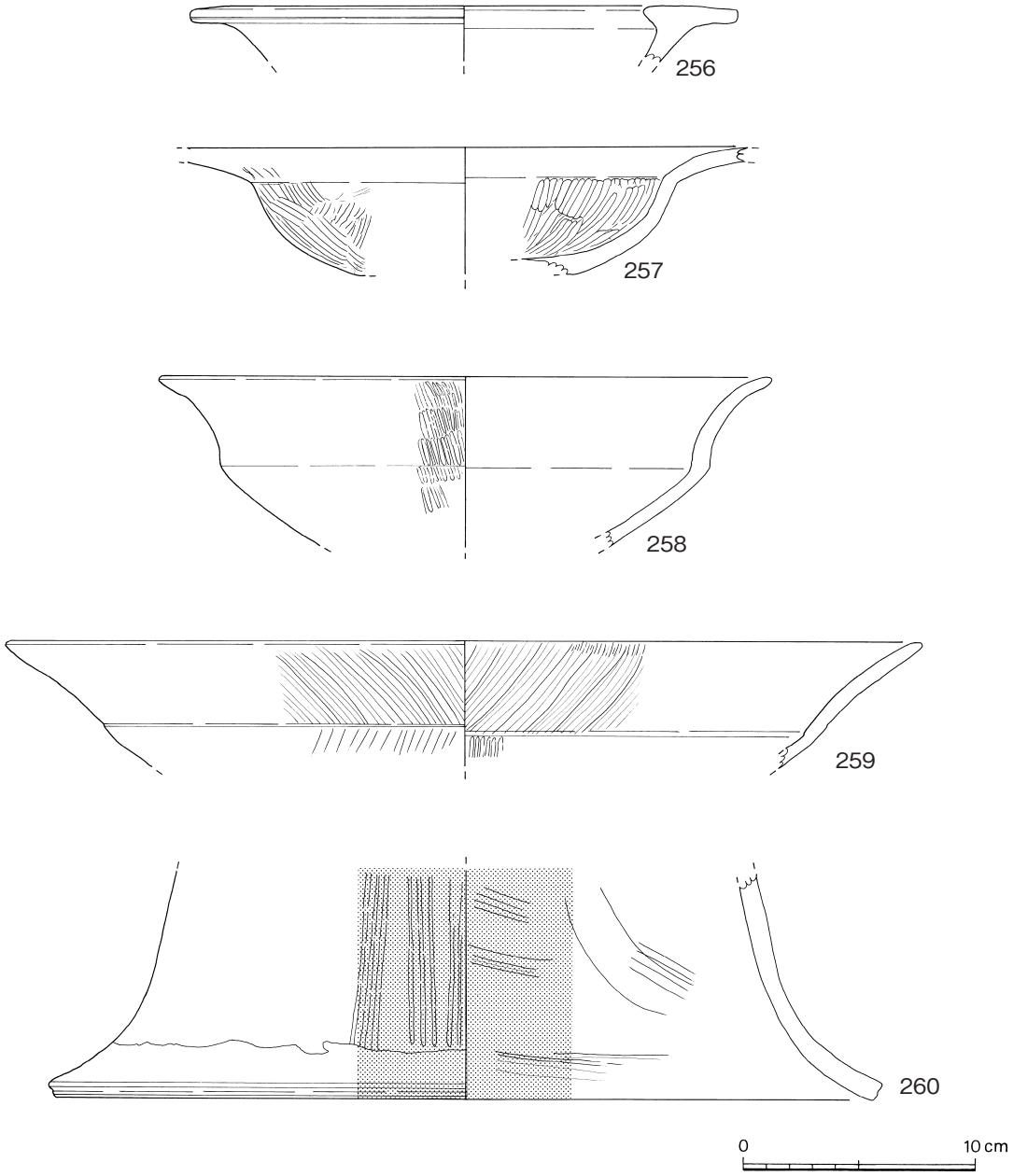


図40　1939年埋立土出土遺物(8)

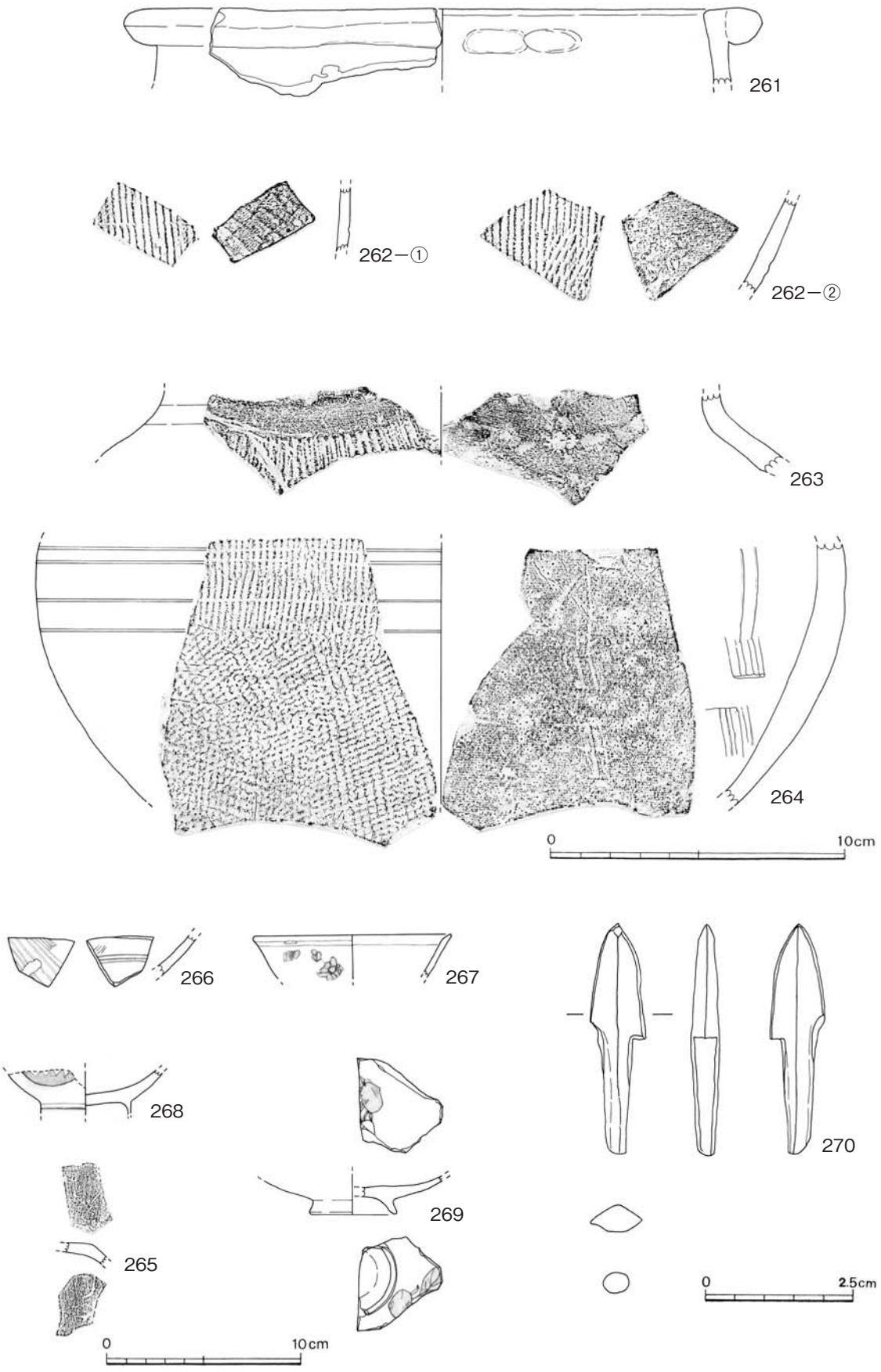


図41　1939年埋立土出土遺物(9)

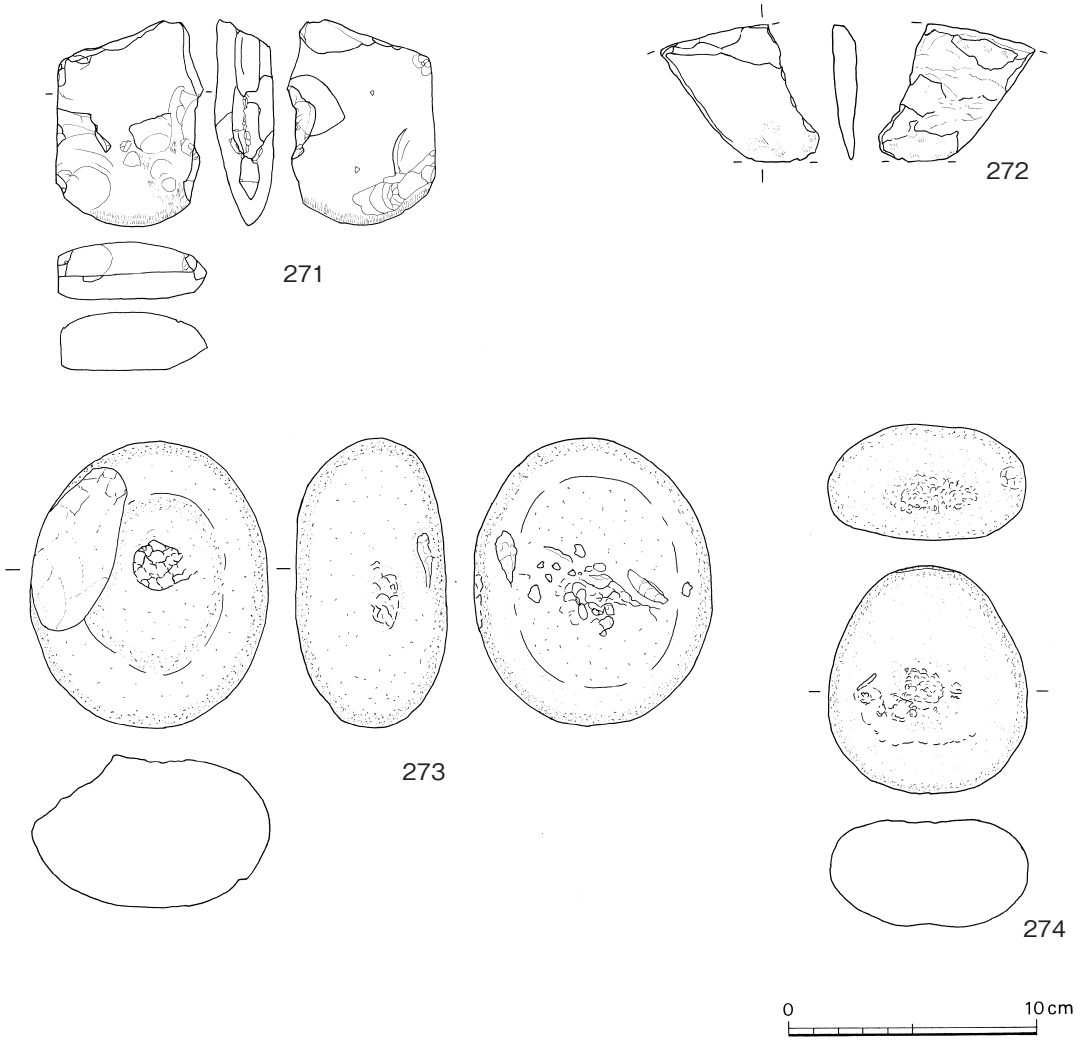


図42　1939年埋立土出土遺物(10)

川瀬雄一2005『沖城跡Ⅱ』諫早市文化財調査報告書第18集
髙倉洋彰1982「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
寺井誠2001「古墳出現前後の韓半島系土器」『３・４世紀日韓土器の諸問題』
鴇田忠正1944「長崎県壱岐郡田川村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』星野書店
永留久恵・永留史彦1975「対馬峰村木坂の古い『しがらみ』の遺構」『太田原遺跡発掘調査報告』峰村教育委員会
古澤義久・川道寛2014『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第12集

表２　土器・陶磁器・ガラス器観察表

報告番号	調査区	遺構・層位	型式	器種	部位	口径・底径(cm)	色調（外面）		色調（内面）		胎土	調整（外面）	調整（内面）	備考
							色	Hue	色	Hue				
1	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	壺	口縁～胴下部	25	黒褐・にぶい黄橙	5YR3/1･10YR7/4	にぶい黄橙・灰黄褐	10YR6/4･10YR6/2	長石・石英・金雲母	ミガキ	(口)ミガキ、(胴)ナデ	焼成後穿孔
2	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	樽形土器	胴部～底部	21	灰黄褐	10YR4/2	褐	10YR4/6	石英・長石・金雲母	ミガキ	ナデ	焼成後穿孔
3	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	32	褐灰	7.5YR5/1	灰褐	7.5YR6/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
4	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	25.3	にぶい褐	7.5YR5/4	明褐	7.5YR5/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
5	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	28.2	にぶい黄橙	10YR6/3	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
6	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	21	にぶい黄褐	10YR5/4	褐灰	10YR5/1	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ	
7	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	19.2	灰褐	7.5YR4/2	褐灰	7.5YR5/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
8	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	24	明褐	7.5YR5/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
9	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	18	にぶい褐	7.5YR5/3	暗灰黄	2.5Y5/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
10	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	25	にぶい褐	7.5YR5/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
11	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	26	にぶい褐・暗褐	7.5YR5/4･10YR3/3	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ→突帯	ナデ	
12	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	21.3	にぶい黄橙	10YR6/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母・角閃石	ミガキ	ナデ・指押さえ	
13	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	24.9	明褐	7.5YR5/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ・指押さえ	
14	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	21.8	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
15	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	24.6	にぶい橙・にぶい褐	7.5YR6/4･7.5YR5/4	にぶい橙・明褐	7.5YR6/4･7.5YR5/6	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ→突帯	ナデ・指押さえ	
16	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	26.4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄褐	10YR5/4	長石・石英・金雲母・角閃石	ハケメ→ナデ→突帯	ナデ・指押さえ	
17	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	27	にぶい黄褐・灰黄褐	10YR6/4･10YR4/2	にぶい黄褐・にぶい黄	10YR6/3･2.5Y6/3	長石・石英・角閃石・金雲母	ナデ	ナデ	黒漆が点状に付着
18	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		橙	5YR6/6	にぶい赤褐	5YR5/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
19	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
20	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		灰黄褐	10YR4/2	暗灰黄	2.5Y4/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
21	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		橙	5YR7/6	灰黄	2.5Y6/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
22	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	底部	6.6	橙・明黄褐	5YR6/6･10YR6/6	にぶい橙・明黄褐	7.5YR7/4･10YR6/6	長石・石英	ハケメ	ナデ	
23	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	底部	6.1	灰黄褐・にぶい橙	10YR4/2･5YR7/4	にぶい黄褐	10YR7/2	長石・石英・角閃石	ハケメ	ナデ	
24	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕		30.2	にぶい褐	7.5YR6/3	灰褐	7.5YR5/2	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ→突帯	ナデ・指押さえ	
25	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	28.6	橙・にぶい橙	7.5YR6/6･7.5YR5/4	褐・黄褐	10YR4/4･10YR5/6	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	
26	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	26.6	にぶい黄橙	10YR6/3	黒褐	10YR3/1	長石・石英・金雲母	磨耗	ナデ・指押さえ	
27	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	壺	口縁部	23.5	にぶい褐	7.5YR5/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ミガキ	ミガキ	外面赤色磨研
28	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	壺	口縁部	23	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	ミガキ	ミガキ	
29	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	壺	口縁部	23.9	黒褐	2.5Y3/2	にぶい黄橙・黄褐	10YR6/4･2.5Y5/3	長石・石英・金雲母	ミガキ	ミガキ	
30	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	胴部		にぶい黄褐	10YR5/4	明黄褐	10YR7/6	長石・石英	ハケメ→突帯→ナデ	ナデ	
31	３区東側	自然河川河床面(20層)	須玖Ⅰ式	甕	底部	10.6	黄褐・黒	2.5Y5/3･2.5Y2/1	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	剥離	
40	３区東側	自然河川堆積土下層		甕	底部	6	明赤褐	2.5YR5/8	灰褐	7.5YR6/2	長石・石英	ハケメ	ナデ	
41	３区東側	自然河川堆積土下層		甕	底部	6.1	橙	7.5YR7/6	黒	N2	長石・石英	ハケメ	ナデ	
42	３区東側	自然河川堆積土下層		甕	底部	8.6	橙	5YR6/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・黒雲母	ハケメ	ナデ	
43	３区東側	自然河川堆積土下層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	8.6	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ	遠賀川以東系

44	3区東側	自然河川堆積土下層		甕	底部	9.3	橙	5YR6/6	黒	N1.5	石英・長石	ハケメ	ナデ	
45	3区東側	自然河川堆積土下層		甕	底部	5.2	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
48	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	26.4	黒褐	10YR3/1	明黄褐	10YR7/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
49	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	26	にぶい黄褐	10YR6/4	黄橙	10YR8/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
50	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい黄	2.5Y6/4	明黄褐	10YR7/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
51	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	27.6	明赤褐	5YR5/8	橙	5YR7/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
52	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	22.4	明黄褐・黒	2.5Y7/6･N1.5/	黒褐	2.5Y2/1	長石・石英	ハケメ	ナデ	
53	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
54	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		橙	2.5YR6/8	淡赤橙	2.5YR7/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
55	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	20.2	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・黒雲母	ナデ	ナデ	
56	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	20.2	灰黄褐	10YR4/2	褐灰	10YR4/1	長石・石英	ハケメ→ナデ	ナデ	
57	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	29	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
58	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	29	灰黄褐	10YR4/2	黄褐	2.5YR5/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ハケメ→ナデ	
59	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	27.6	明黄褐	10YR7/6	にぶい黄褐	10YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ・指押さえ	
60	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	29.6	浅黄	2.5YR7/3	黄灰	2.5YR5/1	石英・長石	ナデ	ナデ	
61	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	25.6	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ・指押さえ	
62	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	33.8	にぶい黄	10YR7/3	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・黒雲母	ナデ	ナデ	外面丹塗
63	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	28	浅黄	2.5Y7/4	明黄褐	2.5Y7/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
64	3区東側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	26	黄橙	10YR7/8	黄橙	10YR8/8	長石・石英	ナデ	ナデ	
65	3区東側	自然河川堆積土上層		甕	底部	7.2	にぶい橙・赤灰	2.5YR6/4･2.5YR5/1	褐灰	7.5YR6/1	長石・石英・金雲母	磨耗	指押さえ	
66	3区東側	自然河川堆積土上層		甕	底部	8.8	灰白	10YR8/2	にぶい赤褐	10R6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
67	3区東側	自然河川堆積土上層		甕	底部	8.8	褐灰	10YR4/1	灰	5Y4/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
68	3区東側	自然河川堆積土上層		壺	底部	6	浅黄	2.5Y7/4	にぶい黄	2.5Y6/4	長石・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
69	3区東側	自然河川堆積土上層		壺	底部	6	にぶい黄褐	10YR6/3	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	外面丹塗
70	3区東側	自然河川堆積土上層		器台	脚部	10.8	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ハケメ	
71	3区東側	自然河川堆積土上層	須恵器	蓋	天井部		灰	N5/0	灰	N5/0	長石・石英	回転ナデ	回転ナデ	８世紀
72	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	31.8	灰白	10YR8/1	灰黄・灰	2.5Y7/2･5Y4/1	長石・石英	ナデ	ナデ	
73	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄褐	10YR6/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
74	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	27	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
75	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
76	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	23.6	暗灰黄	2.5Y5/2	灰黄褐・黄灰	10YR5/2･2.5Y4/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
77	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		暗灰黄	2.5Y5/2	暗灰黄	2.5Y5/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ハケメ→ナデ	
78	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	35.6	にぶい黄褐	10YR4/3	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
79	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	21	橙	2.5Y6/6	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	外面丹塗
80	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	26	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
81	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	6.6	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	ナデ	磨耗	

82	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	5.1	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英			
83	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	8.6	灰黄	2.5Y7/2	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
84	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	6.4	にぶい橙・灰黄褐	7.5YR6/4・10YR5/2	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石	ナデ	ナデ	
85	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	7.1	橙	5YR6/6	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英	ナデ	剥離	
86	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	7.7	にぶい橙	5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
87	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	8	にぶい橙・灰黄	7.5YR7/4・2.5Y7/2	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英	磨耗	ナデ	
88	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	8.2	橙	5YR6/8	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	外面丹塗
89	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部		にぶい橙	7.5YR7/4	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
90	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	7.6	明赤褐	2.5YR5/6	黄灰	2.5Y4/1	長石・石英・金雲母	磨耗	磨耗	
91	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	7.2	にぶい橙	5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
92	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	高坏	口縁部		橙・にぶい黄橙	5YR6/6・10YR6/3	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	内外面丹塗
93	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	長頸壺	頸部		にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい橙	5YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	シボリ痕	外面丹塗
94	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	27.4	明赤褐・にぶい黄褐	5YR5/6・10YR5/3	明赤褐	5YR5/6	石英・長石	磨耗	磨耗	
95	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	29.8	にぶい黄橙	10YR7/3	灰白	10YR8/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
96	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい橙・にぶい黄褐	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母・角閃石	ハケメ	ナデ	
97	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい黄	2.5Y6/3	黄褐	2.5Y5/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
98	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
99	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい黄褐・灰黄褐	10YR5/3・10YR4/2	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
100	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい赤橙	2.5YR5/4			長石・石英	ナデ	ナデ	
101	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	38.7	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
102	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	24.5					長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
103	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		にぶい黄橙	10YR7/3	褐灰	10YR4/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
104	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		にぶい黄橙	10YR6/3	黄灰	2.5Y4/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
105	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	遠賀川以東系
106	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	甕	底部	6.6	明赤褐	2.5YR5/6	褐灰	5YR4/1	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
107	3区中央	自然河川堆積土上層		甕	底部	7	にぶい黄褐	10YR6/3	黄灰	2.5Y4/1	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
108	3区中央	自然河川堆積土上層		甕	底部	6.8	浅黄	2.5Y7/3	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	内面成形痕、丹塗
109	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	5.6	淡黄	2.5Y2/3	浅黄橙	10YR8/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
110	3区西側	自然河川堆積土上層		甕	底部	4.7	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
111	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅱ式	長頸壺	頸部		明赤褐・にぶい橙	5YR5/8・7.5YR6/4	浅黄	2.5Y7/4	長石・石英・金雲母	風化	シボリ痕	外面丹塗
112	3区中央	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	高坏	口縁部		明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英	ナデ	ナデ	内外面丹塗
113	3区西側	自然河川堆積土上層	須玖Ⅰ式	高坏	口縁部		橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	内面丹塗
114	3区西側	自然河川堆積土上層		高坏	脚部		灰黄	2.5Y7/2	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	シボリ痕	外面にわずかに赤色残存
115	3区西側	自然河川堆積土上層		高坏	脚部		橙・にぶい黄褐	7.5YR6/6・10YR5/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母・角閃石	ナデ	シボリ痕	
129	3区東側	5層	須恵器	壺	肩部		灰	N4/0	灰	N4/0	長石・石英	回転ナデ	回転ナデ	7世紀
130	3区東側	1層	明青花	碗	底部	6	明緑灰	7.5GY8/1	明緑灰	7.5GY8/1				

131	3区東側	1層	明青花	碗	口縁部		灰白	5Y8/2	灰白	5Y8/2				
132	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		橙	5YR6/6	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
133	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		褐	10YR4/6	褐	7.5YR4/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
134	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい褐・褐	7.5YR5/4・7.5YR4/3	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・角閃石・金雲母	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	
135	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		褐	7.5YR4/3	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・角閃石・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ	
136	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい赤褐	5YR4/4	褐	7.5YR4/3	長石・石英・角閃石・金雲母	ナデ	ナデ	
137	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		明褐	7.5YR5/6	明褐	7.5YR5/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
138	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	26.7	にぶい黄褐	10YR7/3	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
139	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		灰褐	7.5YR4/2	暗褐	7.5YR3/3	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ	
140	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい黄褐	10YR5/4	黄褐	10YR5/6	長石・石英・角閃石・金雲母	ナデ	ナデ	
141	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	29.9	褐	7.5YR4/3	褐	7.5YR4/3	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ	
142	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		黒褐	2.5Y3/1	にぶい黄褐	10YR4/2	長石・石英・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	
143	2区	近代河川河床面(17層)	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		暗赤褐	5YR3/4	明黄褐	10YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
144	2区	近代河川河床面(17層)		甕	底部		にぶい橙	5YR6/4	赤橙	10R6/6	長石・石英・金雲母	磨耗	指押さえ	
145	2区	近代河川河床面(17層)		壺	肩部		にぶい黄褐	10YR5/4	褐	10YR4/6	長石・石英	ハケメ	ハケメ	
146	2区	近代河川河床面(17層)		甕	底部	7.4	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	指押さえ	
147	2区	近代河川河床面(17層)		高坏	脚部	14.9	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
148	2区	近代河川河床面(17層)	磁器	碗	口縁部		黄褐	2.5Y5/4	黄褐	2.5Y5/4				内面に目跡痕
149	2区	近代河川河床面(17層)	磁器	碗	口縁部	9	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2				
150	2区	近代河川河床面(17層)	ガラス製品		胴部		黄	5Y7/6	黄	5Y7/6				
151	2区	近代河川河床面(17層)	肥前染付	碗	胴部		灰白	5Y8/2	灰白	5Y8/2				
152	2区	近代河川堆積層	肥前染付	壺	胴部～底部	8.4	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/2				
153	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		灰黄褐	10YR5/2	にぶい褐	7.5YR6/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
154	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		橙	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
155	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	25.6	にぶい橙	7.5YR7/4	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	
156	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		浅黄褐・橙	10YR8/3・5YR6/6	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英	ナデ	ナデ	
157	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	26.7	にぶい黄褐	10YR5/4	黄褐	2.5Y5/4	長石・石英	ナデ	ナデ	
158	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		灰黄	2.5YR7/2	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
159	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅱ式	壺	肩部		橙	7.5YR6/6	明黄褐	10YR6/6	長石・石英・金雲母	ミガキ	磨耗	外面丹塗
160	2区	近代河川堆積層	須玖Ⅱ式	壺	口縁部	24.6	浅黄	2.5Y7/3	明黄褐	10YR6/6	長石・石英・金雲母	磨耗	ナデ	外面丹塗、口縁部焼成前穿孔
161	1区	近代河川河床面(4層)	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	24.7	にぶい黄褐	10YR5/3	黄褐	10YR5/6	長石・石英	磨耗	磨耗	
162	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	24	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	
163	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部		にぶい橙	7.5YR6/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
164	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	24.2	褐	7.5YR4/3	にぶい褐	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ・指押さえ	
165	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	21.2	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
166	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	28.6	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ハケメ→突帯	ハケメ・ナデ	

167	2区	1939年埋立土	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	24	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
168	2区	1939年埋立土	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	23	黒褐・明褐	7.5YR3/1・7.5YR5/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
169	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	26	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	工具痕→ナデ	ナデ	
170	2区	1939年埋立土	須玖Ⅱ式	甕	口縁部		灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
171	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	23.6	橙	2.5YR6/8	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ナデ	
172	2区	1939年埋立土	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	19.2	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・金雲母	ナデ	ナデ	
173	2区	1939年埋立土	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	23	橙	5YR6/6	にぶい赤褐	5YR5/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
174	2区	1939年埋立土	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	30	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
175	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	甕	口縁部	29.6	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	長石・石英	ハケメ	ナデ	
176	2区	1939年埋立土	須玖Ⅱ式	甕	口縁部	30.5	黒褐	7.5YR3/1	褐灰	7.5YR4/1	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ→突帯	ナデ	
177	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	23.2	にぶい黄褐	10YR6/3	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ハケメ	
178	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	28.3	にぶい黄褐	10YR5/3	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
179	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	18.4	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
180	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	21	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	タタキ・ハケメ→ナデ	ハケメ	
181	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	33	にぶい褐	7.5YR5/4	黄橙	7.5YR7/8	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ハケメ・ナデ・工具痕	
182	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	23.4	浅黄橙・灰白	7.5YR8/3・2.5Y8/1	にぶい黄橙・橙	10YR7/2・7.5YR7/6	長石・石英	ハケメ・ナデ	ナデ	
183	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	19	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
184	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部		橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・角閃石・金雲母	ハケメ→ナデ	ハケメ	
185	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	23	明褐	7.5YR5/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	タタキ・ハケメ→ナデ	ハケメ	
186	2区	1939年埋立土	弥生後期	甕	口縁部	24	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ハケメ→ナデ	ハケメ	
187	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.1	にぶい赤褐	5YR5/4	暗褐	7.5YR3/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
188	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.9	にぶい橙・橙	7.5YR6/4・2.5YR6/6	黒褐	10YR3/1	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
189	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.2	橙	7.5YR7/6	灰白	2.5Y7/1	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
190	2区	1939年埋立土		甕	底部	8.2	橙	2.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
191	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.2	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
192	2区	1939年埋立土		甕	底部	8	黒	10YR2/1	浅黄橙	7.5YR8/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	
193	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.8	橙	5YR6/8	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	
194	2区	1939年埋立土		甕	底部	7	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
195	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.2	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	
196	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.2	橙	5YR6/6	黒褐色	2.5Y3/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
197	2区	1939年埋立土		甕	底部	9.3	明赤褐	5YR5/6	にぶい黄	2.5Y6/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
198	2区	1939年埋立土		甕	底部		橙	5YR6/8	灰黄	2.5Y6/2	長石・石英	ハケメ	磨耗	
199	2区	1939年埋立土		甕	底部		明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐・灰黄褐	2.5YR5/8・10YR6/2	長石・石英	ハケメ	ナデ	
200	2区	1939年埋立土		甕	底部		橙	7.5YR7/6	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英	ハケメ	ナデ	
201	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.3	橙	5YR6/8	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	底部焼成後穿孔
202	2区	1939年埋立土		甕	底部	8.2	にぶい黄橙・黄灰	10YR7/3・2.5Y4/1	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英	ナデ	ナデ	

203	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.2	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
204	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.1	橙	7.5YR7/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
205	2区	1939年埋立土		甕	底部		にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
206	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.1	明赤褐	5YR5/6	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
207	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.5	橙	5YR6/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英	ナデ	ナデ	
208	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.8	橙	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ハケメ	ナデ	
209	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.6	橙	2.5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
210	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.3	橙	2.5YR6/8	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
211	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.7	橙	7.5YR6/6	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英	磨耗	磨耗	
212	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.4	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英	ハケメ	ナデ	
213	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.7	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
214	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.9	赤褐	5YR4/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
215	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.6	にぶい黄橙・にぶい橙	10YR6/3・7.5YR7/4	橙	5YR7/6	長石・石英	ミガキ	ミガキ	
216	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.8	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
217	2区	1939年埋立土		甕	底部	7	橙・にぶい黄橙	7.5YR7/6・10YR6/3	にぶい黄橙・橙	10YR7/3・7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	
218	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.8	にぶい黄橙	10Yr6/4	黒	10YR2/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
219	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.4	にぶい黄橙・橙	10YR7/4・5YR6/6	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
220	2区	1939年埋立土		甕	底部		明赤褐	5YR5/6	橙	5YR6/6	長石・石英	ハケメ	ナデ	
221	2区	1939年埋立土		甕	底部	8.4	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	磨耗	ナデ・指押さえ	
222	2区	1939年埋立土		甕	底部		にぶい黄橙・橙	10YR6/4・5YR6/6	橙・黒褐	7.5YR6/6・10YR3/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
223	2区	1939年埋立土		甕	底部		にぶい橙	5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	ナデ	ナデ	
224	2区	1939年埋立土		甕	底部	8.1	にぶい橙・にぶい黄橙	5YR7/4・10YR6/3	灰黄褐・浅黄橙	10YR6/2・10YR8/3	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
225	2区	1939年埋立土		甕	底部	8	明赤褐	2.5YR5/8	褐	7.5YR4/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
226	2区	1939年埋立土		甕	底部	6.6	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	指押さえ	
227	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.3	褐灰	10YR4/1	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	指押さえ	
228	2区	1939年埋立土		甕	底部	7.1	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	磨耗	指押さえ	
229	2区	1939年埋立土		甕	底部	6	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英	ハケメ	ハケメ	
230	2区	1939年埋立土		甕	底部	9.1	橙	2.5YR7/8	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	磨耗	ナデ・指押さえ	
231	2区	1939年埋立土		甕	底部		橙	7.5YR6/6	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
232	2区	1939年埋立土		甕	底部	8	褐灰	10YR4/1	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ・指押さえ	
233	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	壺	口縁部	23.7	橙	5YR7/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	外面丹塗
234	2区	1939年埋立土		壺	口縁部	18.5	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
235	2区	1939年埋立土	弥生後期	複合口縁壺	口縁部	25.3	黄灰・橙	2.5Y5/1・2.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
236	2区	1939年埋立土		壺	底部	5.7	灰黄褐	10YR6/2	灰黄・黒褐	2.5Y6/2・2.5Y3/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
237	2区	1939年埋立土		壺	底部		橙	2.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
238	2区	1939年埋立土		壺	底部	7.2	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	ミガキ	ナデ・指押さえ	

239	2区	1939年埋立土		壺	底部	6.2	橙	5YR6/6	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
240	2区	1939年埋立土		壺	底部	8.8	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ・指押さえ	
241	2区	1939年埋立土		壺	底部		にぶい褐	7.5YR7/4	灰	5Y4/1	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ・指押さえ	
242	2区	1939年埋立土		壺	底部		橙	5YR6/8	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英	ハケメ	ナデ	
243	2区	1939年埋立土		壺	底部		にぶい黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石・金雲母	磨耗	ハケメ	
244	2区	1939年埋立土		壺	底部		にぶい黄橙	10YR6/3	褐灰	10YR4/1	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
245	2区	1939年埋立土		壺	底部		橙	2.5YR6/6	にぶい赤褐	5YR5/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ナデ	
246	2区	1939年埋立土		壺	底部		橙	5YR6/6	にぶい橙・橙	7.5YR6/4・5YR6/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
247	2区	1939年埋立土		壺	底部	7.9	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
248	2区	1939年埋立土		壺	底部		にぶい褐	7.5YR5/3	橙	7.5YR6/6	長石・石英	ナデ	ハケメ・指押さえ	
249	2区	1939年埋立土		壺	底部		橙	5YR6/6	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英	ハケメ	ハケメ	
250	2区	1939年埋立土		壺	底部	10.2	にぶい橙・灰黄褐	7.5YR6/4・10YR5/2	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英	ハケメ	ナデ・指押さえ	
251	2区	1939年埋立土		器台	口縁部	14.6	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄褐・褐灰	10YR6/4・10YR4/1	長石・石英	ハケメ	ナデ	
252	2区	1939年埋立土			口縁部		橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母・黒雲母	ナデ	ナデ	
253	2区	1939年埋立土		脚付土器	脚部	6.8	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	内外面丹塗
254	2区	1939年埋立土		脚付土器	脚部	11.4	橙	5YR6/7	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
255	2区	1939年埋立土		甕	口縁部	27.5	浅黄橙	10YR8/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	
256	2区	1939年埋立土	須玖Ⅰ式	高坏	口縁部	23.2	橙	5YR6/2	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	ナデ	ナデ	内面一部丹塗残存
257	2区	1939年埋立土		高坏	坏部		にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい黄褐	10YR7/4	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
258	2区	1939年埋立土	弥生後期	高坏	口縁部	26	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	ミガキ	磨耗	
259	2区	1939年埋立土	弥生後期	高坏	口縁部	38.8	にぶい橙・黒	7.5YR7/4・7.5YR2/1	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ハケメ	ハケメ	
260	2区	1939年埋立土		高坏	脚部	34.5	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	ミガキ	ハケメ→ナデ	内外面丹塗
261	3区	1939年埋立土	擬粘土帯	甕	口縁部	21.7	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英	ナデ	ナデ・指押さえ	
262	2区	1939年埋立土	楽浪系瓦質		胴部		黒褐	10YR3/1	赤褐	5YR6/6	金雲母	縄（原体Ｓ撚）タタキ→沈線	当て具痕	
263	2区	1939年埋立土	三韓系瓦質	短頸壺	肩部		にぶい褐	7.5YR5/4	明赤褐	5YR5/6	長石	縄（原体Ｚ撚）タタキ→ナデ	ナデ	
264	2区	1939年埋立土	三韓系瓦質		胴部		灰	N6/0	灰白	N7/0	長石・石英・金雲母	格子タタキ→平行タタキ→沈線	工具痕・ナデ	
265	2区	1939年埋立土	須恵器	蓋	天井部		灰	10Y6/1	灰	10Y6/1	長石・石英	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	
266	2区	1939年埋立土	同安窯青磁	碗	胴部片		オリーブ黄	5Y6/3	灰オリーブ	5Y6/2				
267	2区	1939年埋立土	明青花	碗	口縁部	10	明オリーブ灰	5GY7/1	明オリーブ灰	5GY7/1				
268	2区	1939年埋立土	肥前磁器	碗	底部	4.6	灰白	5GY8/1	灰白	5GY8/1				
269	2区	1939年埋立土	肥前磁器	碗	底部	4.3	明緑灰	7.5GY8/1	明緑灰	7.5GY8/1				

表 3　石器観察表

報告番号	調査区	遺構・層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
116	3区西側	自然河川堆積土上層	磨石	砂岩	13.6	12.5	5.5	1515
117	3区西側	自然河川堆積土上層	凹石	砂岩	12.1	10.9	6.2	1310
118	3区西側	自然河川堆積土上層	磨石	砂岩	7	5.3	5.5	315
119	3区西側	自然河川堆積土上層	磨石	砂岩	12.9	10.8	6.6	1440
120	3区	1号礫群	磨石	砂岩	9.1	7.8	4.6	490
121	3区	1号礫群	磨石	砂岩	11.3	9.5	5.9	1030
122	3区	1号礫群	磨石	砂岩	11	10.1	6.6	1145
123	3区	1号礫群	台石	砂岩	15.5	11.8	4.8	1490
124	3区	1号礫群	磨石	砂岩	11.4	10.2	6.1	1195
125	3区	1号礫群	磨石	砂岩	12.5	10.3	6.5	1270
126	3区	1号礫群	叩石	砂岩	13	7.1	5.4	785
127	3区	1号礫群	丸石	花崗岩	12.35	11.4	8.8	1820
128	3区	1号礫群	剥片	黒曜石	3	2.7	1.05	6.75
271	2区	1939年埋立土	石斧	チャート	8.15	5.8	2.3	165
272	2区	1939年埋立土	石庖丁	頁岩	6.3	5.4	0.95	35
273	2区	1939年埋立土	凹石	砂岩	11.4	9.4	6	970
274	2区	1939年埋立土	磨石	砂岩	9	7.9	4.6	495

表 4　木器観察表

報告番号	調査区	遺構・層位	器種	木材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
32	3区東側	自然河川河床面(20層)	腕輪状木製品	カヤ	7.5	4.2	0.9
33	3区東側	自然河川河床面(20層)	板状木製品		4	7.2	1.4
34	3区東側	自然河川河床面(20層)	棒状木製品		20.6	2	1.8
35	3区東側	自然河川河床面(20層)	杭		32.9	7.2	4.7
36	3区東側	自然河川河床面(20層)	杭		16.3	3.2	3.8
37	3区東側	自然河川河床面(20層)	横槌		17	5.5	5
38	3区東側	自然河川河床面(20層)	杭		27.2	4.7	3.7
39	3区東側	自然河川河床面(20層)	板状木製品		22.8	12.1	4.4
46	3区東側	自然河川堆積土下層	棒状木製品		29.5	2.4	1.9
47	3区東側	自然河川堆積土下層	網枠	ヒノキ	32	1.9	2.8

Ⅳ　三次元計測器を用いた漆塗り木製品の復元

1．はじめに

平成27年度に長崎県埋蔵文化財センターで調査を行った原の辻遺跡から、一部欠損した状態で漆塗り木製品が出土している。器形や装飾性から装身具と考えられるが完形でないため確証が得られない。そこでこの漆塗り木製品を三次元計測し、欠損部分を復元した状態で３Ｄレプリカを作成し、本来の姿の復元を試みた。

2．資　　料

平成27年度の原の辻遺跡の発掘調査は丘陵部と幡鉾川に挟まれた低地部である芦辺高原地区で実施された。弥生時代の河川跡が検出され、漆塗り木製品はこの河川跡で出土した。河川跡では砂礫層の上に有機物を多量に含む粘質土と砂層が互層堆積していた。漆塗り木製品が出土したのは最下層の河床面であると考えられる砂礫層である。砂礫層では須玖Ⅰ式の土器が出土し、弥生時代中期中葉の河床面であることがわかる。砂礫層から出土する土器は大型の破片が多く、またほとんど磨耗を受けていないことから河川に投棄され、まもなく堆積したものとみられる。また、出土土器の中には日常生活土器以外にも数条の突帯を持ち、三角集線文がめぐる樽形に近い土器など一般的ではない土器も出土している。祭祀などの特殊な状況により投棄された可能性も想定される。

図43　漆塗り木製品

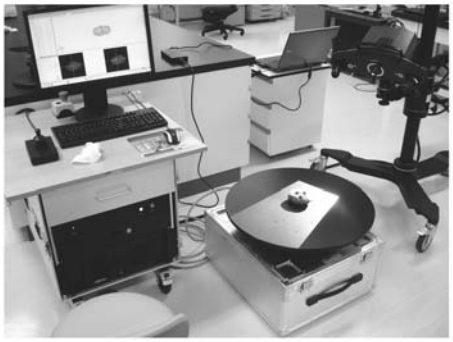
資料は長辺75mm、短辺42mm、厚さ９mmを測り、長辺に対して反っている。両短辺は欠損しおり、正円に復元した際の五分の一程度が残る。三角形断面を呈する７条の線刻があり、全体に黒漆が施されている。また四隅に穿孔がみられるため、紐などを用いて組み合わせて使用されたと想定される。

3．装　　置

復元作業には、長崎県埋蔵文化財センターに設置されている三次元計測器及び３Ｄプリンターを使用した。機器の仕様は以下のとおり。

◆三次元計測器【ATOS Ⅲ/Model400 システム：ドイツ GOM 社製】

カメラヘッド、ケーブル、PC で構成され、カメラフレーム・レンズを装着し PC 制御の下、寸法・形状の３次元デジタルデータを、２個の CCD カメラを用いて非接触で計測が可能である。CCD 画素数は400万画



3D Digitizer

3D Printer

図44　復元に使用した装置

素。測定方式は、三角測量、ヘテロダインフリンジパターン方式。３種類のレンズを有し、測定範囲は可変式で、X，Y，Z：1000×1000×1000～150×150×130mm である。自動回転テーブル（耐荷重は150kg 以上）を使用し、自動測定が可能。

◆３Ｄプリンター【Dimension Elite 3D Printer：米国シトラタシス社製】

熱溶解積層法により造型でき、ABS 樹脂にて積層ピッチ0.1778mm で造形した。最大造型可能サイズは W：200mm×D：200mm×H：300mm。

４．結　　果

漆塗り木製品の三次元計測データと、３Ｄプリンターにて作成した３Ｄレプリカを用いた復元案を図45に示す。今回、復元を試みた資料は装飾性や器形から腕輪などの装身具と考えられたが、類例がなく短甲などの武具の可能性も残されている。また、欠損部と穿孔の関係性も明確でないため元々の使用状況を伺うのが困難であった。今回、三次元計測および３Ｄプリンターを用いて欠損部の復元から複製を作成することで、多くの有識者に手にとって検証を進める作業にも活用され、いくつかの可能性が示された。結論には至っていないが、今後類例の調査等を進めていきたい。

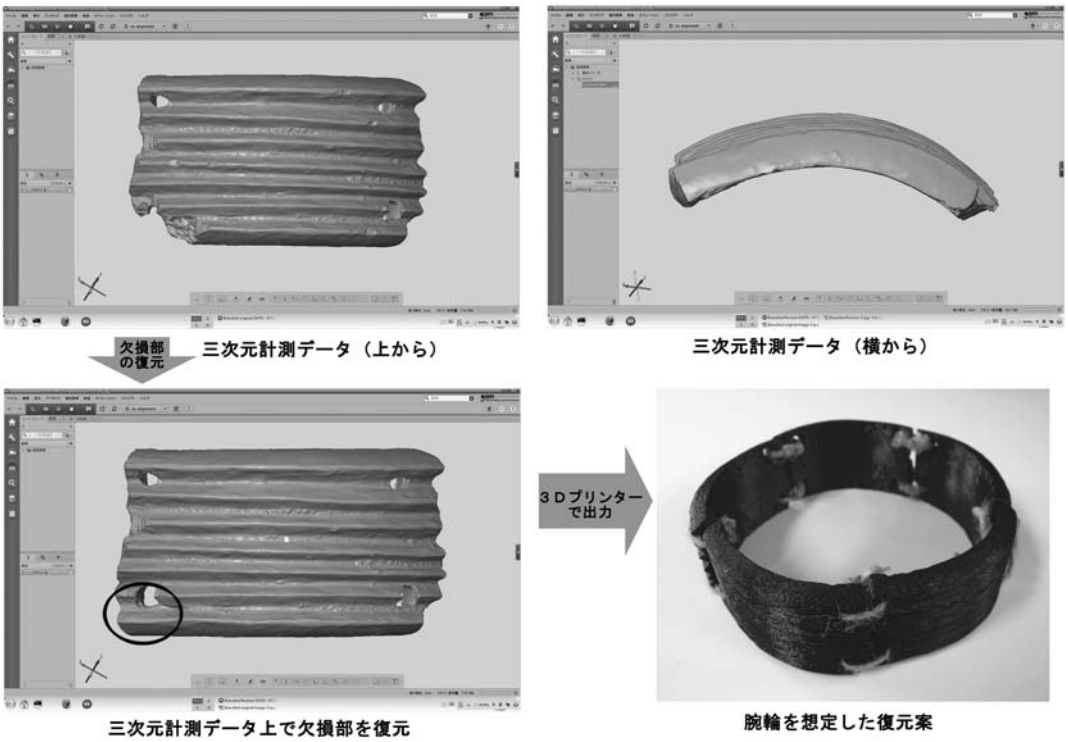


図45　漆塗り木製品の三次元計測データと復元案

本報告は平成28年５月に奈良大学にて開催された第33回日本文化財科学会での発表要旨に一部加筆し再録したものである。本資料の三次元計測およびデータ編集作業は今西亮太氏（現雲仙市教育委員会）による。

片多雅樹、今西亮太、古澤義久2016「原の辻遺跡出土「漆塗り木製品」の三次元計測を用いた復元」『日本文化財科学会第33回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

Ⅴ　総　　括

１．自然河川跡

今次の調査では、３区で弥生時代中期中葉の河床面、１区と２区で近代の河床面を確認した。いずれの調査区でも立ち上がりが確認できず、川岸ではなく、河川中に該当するものと考えられる。３区の河床面標高は最高部が2.44m、最低部が1.97mであるが、2013年度調査川原畑地区１ｂ区の調査(古澤・川道2014）では更新統と完新統の境界が標高約2.6mであることから、河床は更新統を侵食しているものと考えられる。近代河床面は１区で最高部が2.94m、最低部が2.57m以下、２区で最高部が2.85m、最低部が2.46mであり、これも更新統上面にほぼ近い標高値である。そのため、弥生時代の河川に重複する流路で近代河川が流れたとした場合、弥生時代河川の堆積層はほとんど残存していないこととなる。

３区の河川堆積土下層（19層～12層）の最新遺物は須玖Ⅱ式で、弥生時代中期後葉を中心とする時期に堆積したものとみられる。河川堆積土上層（11層～10層）の最新遺物は８世紀頃の須恵器で、古代に埋没したものとみられる。河川堆積層下層では砂質土層と粘質土層が互層堆積していたことから、流下と堆積を繰り返した状況が想定される。

これまでの周辺地区では、2012年調査川原畑地区４区・２区（古澤・田口2013)、1994年度調査川原畑地区Ｄ１区・Ｄ２区・Ｄ３区およびD11区・D15区（山下1997)、1996年北側調査区・南側調査区（宮﨑1998)、2013年度調査川原畑１ａ区・２ａ区（古澤・川道2014）で弥生時代の河川堆積層が確認されている。川岸が検出された地区の様相から推定される河川幅は約35m程度であることと、弥生時代の流路に重複して近代の河川が流れる事例が2013年度調査２ｂ区などで確認されていることからみて、今次の３区が河川中に該当するとみた場合、１区や２区も弥生時代に流路があった可能性が高い。以上を整理すると、図46のような流路が想定される。

２．３区自然河川河床面での遺物出土状況

３区自然河川河床面（20層）では多くの遺物が出土したが、特に約１ｍ程度の範囲で、大型壺（１)、樽形土器（２)、多数の甕、腕輪状木製品（32）などが集中して出土した。いずれの遺物もほとんど磨耗を受けておらず、遺存状態が良好である。これまでの原の辻遺跡における調査でも多くの河川跡が検出されているが、出土遺物は磨耗して細片化する場合が多い。実際に今次の調査でも堆積層（19層～10層）から出土した遺物は、下層（19層～12層）・上層（11層・10層）を問わず、細片が多く、磨耗を受けたものが多い。このような磨耗を受けた細片は、集落などの遺物供給源から人間の意思とは無関係に流され、堆積したものと思われる。一方、今次調査の河床面における遺物出土状況はこれとは異なるため、人為的に投棄された後、ほどなく柔らかい粘質土に覆われ、このような遺存状況に至ったことを想定させる。

このような人為的投棄に祭祀という行為があったのかについては、不分明な部分があり、調査指導委員会でも意見の一致をみなかった。河川祭祀が行われた跡として考えるにあたって有利な点は次のとおりである。

①　体にミガキが施された大型壺、三角集線文が施された樽形土器、ミガキがなされた甕、腕輪状木

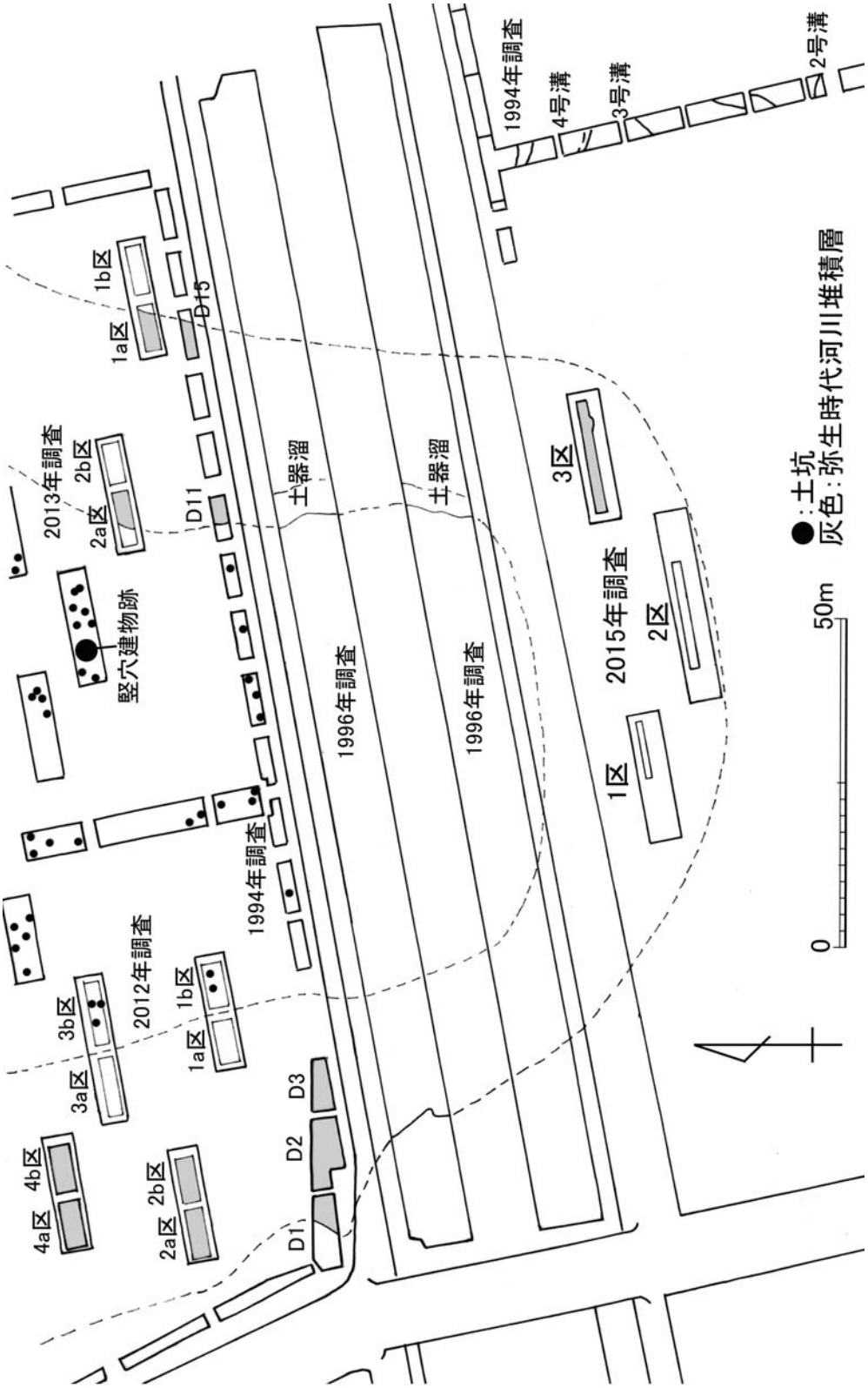


図46　芦辺高原地区と周辺の様相

製品といった稀少な遺物が一括して出土したこと。

② 大型壺と樽形土器にはともに、焼成後穿孔がみられ、実用以外の役割があったことが推定されること。

③ 出土遺物の時期はほぼ須玖Ⅰ式に限定され、比較的短期間に形成されたとみられること。

一方、不利な点としては次の事項が挙げられる。

① 丹塗り磨研土器の出土がほとんどない。

② 遺物集中部は河川中で、川岸ではない。

原の辻遺跡ではこれまで河川祭祀跡が発見されたことがある。2003年度調査不條地区では河道２附近で祭祀土坑が検出されている。祭祀土坑は数枚の炭化物層がみられ、数次にわたり火が燃やされていたとみられている。土坑では城ノ越式の壺が焼成後穿孔され、杭とともに出土した。一方、河道２④層では須玖Ⅱ式の丹塗り土器が多量に出土し、河川祭祀が行われ、投棄されたものと報告された（林2005）。両者とも祭祀の痕跡であるとすると、少なくとも二時期の痕跡があることとなる。

今次の河床面遺物集中部では、丹塗り土器がほとんど出土しなかったことから、2003年度不條地区河道２④層とは異なる状況であった。これは時期が異なるからか、行為の性質が異なるからか俄かに判断することはできない。また、丹塗り土器を利用しない祭祀が存在しないともいえない。今次の調査では、川岸が検出されなかったので、遺物集中部が川岸側へどのように広がっているのかということも問題となる。以上より、今次調査の河床面遺物集中部の特異な出土状況は、河川祭祀が行われた可能性を強く示しているが、そうではない可能性もあると考えるのが穏当であろう。

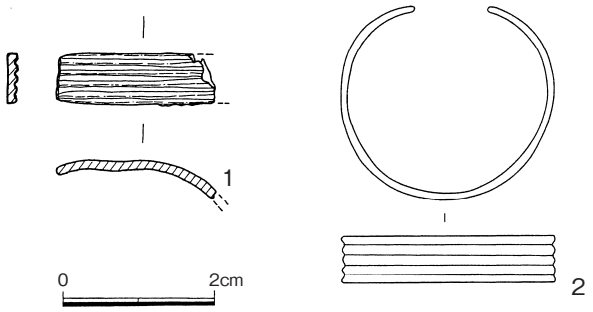
３．腕輪状木製品

弥生時代の自然河川河床面で出土した腕輪状木製品はこれまでのところ日本列島内で出土した事例がない遺物である。本書では「腕輪状木製品」と呼称しているが、原の辻遺跡調査指導委員や福岡市文化財部山口譲治氏をはじめとする多くの方々にご指導を賜ったものの、その用途は不分明である。腕輪（釧）としてみた場合、弥生時代中期中葉に該当する腕輪の出土例がほとんど知られず、類例の対比が困難である。また、短甲の脇部分の部品とみる見解も提示されたが、内径が小さいので、その可能性は大きくないものと考えられる。

この木製品は、角に４個の孔があり、黒漆が塗布されているが、孔の中にも黒漆がみられることから、製品として完成した段階には既に穿孔がなされていたことになる。そのため、紐などでくくりつけて使用されたものとみられるが、この製品を間隙なく円弧を描くように復元すると５点の製品が必要となり、内径は約10.6cmとなる。腕輪としては非常に大きな径となる。そのため、腕輪としてみる場合には、完全な円弧を描くように組み合わせるのではなく、例えば、２点や３点の製品を組み合わせ、その間隙は紐などで結び付けておくと考えるのが自然であろう。

青銅器などの金属器の模倣品ではないかとの所見も複数提示された。その場合、模倣対象物の候補として挙げられるのは、銅釧であろう。銅釧にもさまざまな型式があるが、円環形銅釧はその候補の一つである。通常、円環形銅釧は例えば、平壌市美林里（梅原・藤田1947）、慶州市舎羅里130号墓（朴升圭外2001）、対馬市塔ノ首３号石棺（小田ほか1974）など複数個を同時に使用するので、その複数個使用状態を当該木製品の多条で表現したという考え方は可能である。円環形銅釧は楽浪系銅釧の系

譜をひくとされてきた（森1963, 小田1984）。弥生時代後期に対馬で集中して出土するものは楽浪などの韓半島からの搬入品が多いが、前期末から中期にみられる円環形銅釧の系統については楽浪郡設置以後の韓半島系のものとは異なるとする見解もある（安藤2003）。一方で近年の鋳型の出土状況から弥生時代後期には韓半島からの搬入品だけではなく日本列島産も存在することが明らかとなっている（田尻2016）。但し、衛満朝鮮など古朝鮮の遺跡・墓地の実態が必ずしも明確になっていない現状からみて、円環形銅釧が、楽浪郡設置以前に韓半島西北部に存在しないと断言することもできない。今次調査出土木製品が円環形銅釧を模倣したとするならば、帰属年代が弥生時代中期中葉と考えられる以上、現在でも系統の評価が困難な弥生時代前期末から中期中頃の円形形銅釧（田尻のⅠ型・Ⅱ型）に祖形を求めることとなる。なお、原の辻遺跡では円環形銅釧は高元Ｂ区２層（中尾・溝上2005）、八反SD01（池田・小石2000）、八反SD05（小石・松崎2002）、八反南区５層（小石・松崎2002）、石田大原362W12層（河合2003）でこれまで５点出土している。このうち時期が比較的明瞭な資料としては高元Ｂ区２層例が弥生時代終末期～古墳時代前期を主体とする時期であるとみられる。そのほかの事例は共伴遺物の時期幅が大きく、帰属時期の判別は共伴遺物から推定することは難しい。形態からみると弥生時代後期を中心とするとみられ、弥生時代中期中葉の事例を明確に挙げることはできない。



1原の辻、２羊草荘 16号墓

図47　多条凹線銅釧

円環形銅釧よりもさらに形態上類似する青銅器が存在する。原の辻遺跡高元Ⅶ－１・２区Ⅲ層で出土した「帯状円環形青銅製品」である（図47－１）。この製品は幅1.5mm程度の凹線が４条平行に入れられており、その側面観が湾曲していることから腕輪としての用途が想定されている（田中2008）。この青銅製品の類例が近年、大陸側でも報告された。遼寧省鞍山市羊草荘（白宝玉・徐政・韓洋2015）では７基の石槨木棺墓で複数の平行凹線の入る「銅臂釧」と報告された青銅製品（図47－２）が複数出土している。副葬状態は左右両腕に複数個が着装されたことを示している。このため、原の辻遺跡高元Ⅶ－１・２区Ⅲ層で出土した「帯状円環形青銅製品」は銅釧であることが確定した。

今次の調査で出土した木製品は幅が4.2cmあるのに対し、高元Ⅶ－１・２区Ⅲ層で出土した多条凹線銅釧は最大幅が1.3cmであり、１点の製品として比較すると幅が大きく異なる。この点については羊草荘での事例のように複数個を着装するということで対応できるかもしれない。

ただしこの多条凹線銅釧を今次調査出土木製品の祖形とみる考えには時期の問題という課題が残る。多条凹線銅釧が出土した羊草荘では、いずれの墓葬でも大泉五十や貨泉といった王莽銭が出土しており、時期は王莽新～東漢前期、日本列島の編年との併行関係では弥生時代後期前葉に該当する一方、今次調査の木製品は弥生時代中期中葉の所産であるから、時期的には併行関係にない。多条凹線銅釧

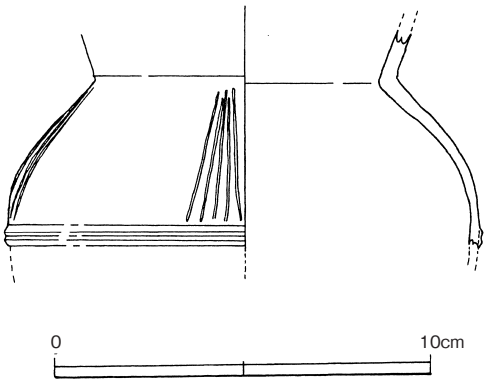


図48　三角集線文施文広口壺

の類例が少なく、その存続幅は明確ではなく、同様の型式の銅釧の制作年代が戦国時代まで遡ることがあれば、模倣可能性があるが、その可能性は高くはないだろうと考えられる。

青銅器の模倣品であるかどうかも確実ではない。今次調査出土木製品の凹線部分には細かな粒上の細工痕が残る。銅釧などの重なった部分にはこのような細工痕は不要であるため、単純に青銅器を模倣したとはみなしがたい部分もある。

このように、今次調査で出土した腕輪状木製品は、その用途を特定するには至らなかった。腕輪の可能性が最も高いが、推測の域を出ることはない。また、青銅釧の模倣品とみるにしてもその候補は現状では特定するには至らず、青銅器の模倣品であるかどうかも定かではない。今後の類例の増加を待ちたい。

4．樽形土器

3区自然河川跡河床面で出土した樽形土器の特異な点は器形とともに胴上部に4条または5条の沈線が放射状に配され三角形を構成する文様がみられることである。沈線は必ずしも直線ではなくやや膨らみを持つ部分もある。このような文様自体が施文される事例は極めて少数であるが、類例としては1999年度調査原地区2号住居跡（山口2001）で出土した広口壺（図48）を挙げることができる。広口壺胴上部の4箇所に三角集線文がみられ、1箇所は6条の沈線で構成されるが、3箇所では5条の沈線で構成される。今次調査例とは器種、ストロークの長さ、線の幅、集線文の個数及び集線文同士の間隔などで差異はみられるものの、関連があるものと考えられる。

5．須玖Ⅰ式甕口縁部附近の製作順序

3区自然河川跡河床面では、須玖Ⅰ式土器がまとまって出土しているが、ほとんど磨耗を受けておらず、製作技法をよく観察することができる良好な資料を多数得ることができた。今次の調査で出土した資料を観察すると、まず、口縁部の鋤先口縁までを形作った後、ハケメを行っていることがわかる。鋤先口縁の屈曲部に至る部分までハケメやハケメの痕跡、ハケメ原体があたった痕跡などを観察することができる資料（図49－14，25）がみられるためである。ハケメを口縁部まで施した後には、強いヨコナデを口縁部に施す。この際に完全に消えずに残ったのが、先述のハケメ痕跡である。口縁下に突帯を廻らせる場合は、口縁部のヨコナデ調整が完了した後に行われる（図49－15，25）。粘土を付着させ、上から強く横方向にナデつける。以上の工程を整理すると、口縁部形成→ハケメ→ヨコナデ→（突帯を廻らせる場合は）突帯貼付→ヨコナデつけという順序となる。この順序に反した事例は今次の調査では確認することができず、製作手順はかなり固定化されたものであるということが了解される。このような製作工程は韓半島の粘土帯土器とは異なるものとして指摘したことがあるが（古

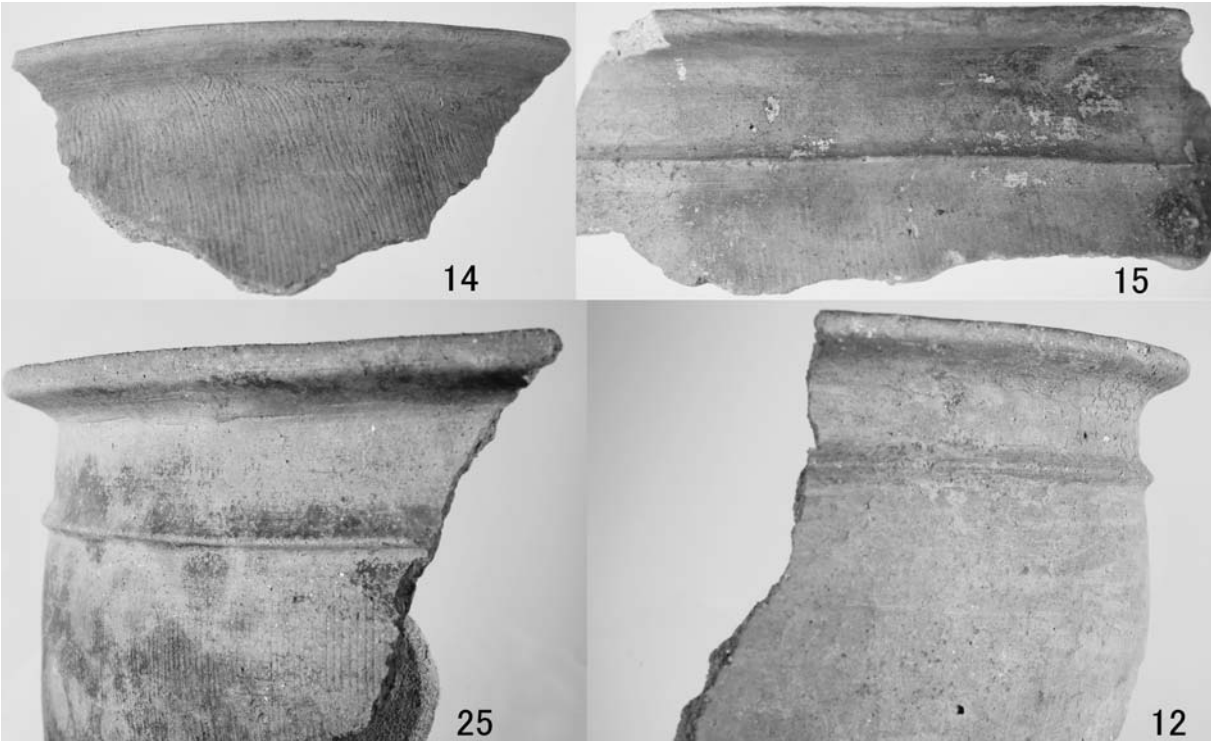


図49　須玖Ⅰ式土器口縁（番号は図13、図14と対応）

澤2016a，b，c)、本調査でもこのことが裏付けられた。

このほかに、今次の調査では12のように胴部にミガキ調整がなされる甕も確認された。この甕は口縁部は強いヨコナデ、突帯が廻り、突帯下は横方向のミガキ、その下部（胴中部）では縦方向のミガキという調整がなされ、いずれの調整も丁寧であるため、前段階になされた調整を窺うのは困難である。しかし、突帯直下までミガキが及んでいるのが観察され（図49－12)、上記のとおり突帯貼付後、ナデつけるのが通例であるとすると、ナデつけた痕跡をミガキが消したとも考えられ、突帯貼付後、ミガキが施されたと考えられる。突帯貼付は工程の中でも遅い段階になされるので、ミガキは最終段階の調整ということとなる。このようにハケメとミガキでは、行われる時点が異なることがわかる。ハケメとミガキの意味が異なった可能性がある。なお、突帯貼付の前段階にハケメなどの調整が行われていたかもしれないが、その痕跡は未確認である。

6．今次の調査区における時期的変遷

最後に、今次の調査によって明らかとなった調査区の時期的な変遷について述べる。弥生時代中期中葉には３区に自然河川の流路があった。ここでは、河川祭祀が行われた可能性がある。この河川は１区や２区に流路があった可能性があるが、不分明である。弥生時代中期後葉には河川に粘質土が堆積しているが、流下と堆積が何度か繰り返された。３区の河川は古代においても流路があったが、埋没した。近世や近代には、３区は陸地化しており、湧水点があり、水汲み場が構築された。一方、１区や２区では流路が存在し、２区では仮設橋（ワタリ）が設けられた。1939年に幡鉾川の直線化工事が行われた。このとき、原の辻遺跡丘陵北部から多量の遺物を含む土壌が埋立に使用された。

安藤広道2003「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観６弥生・古墳時代青銅・ガラス製品』小学館
池田公一・小石龍信2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第１集
梅原末治・藤田亮策1947『朝鮮古文化綜鑑第一巻楽浪前期』養徳社
小田富士雄1984「弥生時代円環型銅釧考」『古文化談叢』13（1984「弥生時代円環型銅釧考」『尹武炳博士回甲紀年論叢』通川文化社）
小田富士雄・斎藤弘征・真野和夫・藤口健二・武末純一1974「上対馬町古里・塔ノ首石棺群調査報告」『対馬』長崎県文化財調査報告書第17集
河合雄吉2003『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第６集
小石龍信・松崎卓郎2002『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第３集
田尻義了2016「弥生時代における金属製装身具の展開」『韓・日의　装身具』嶺南考古学会・九州考古学会第12回 合同考古学大会
田中聡一2008「高元Ⅶ－１・２区の調査概要」『特別史跡原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第12　集
中尾篤志・溝上貴稔2005『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
林隆広2005『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集
古澤義久2016a「邪馬台国時代の壱岐」『邪馬台国時代の狗邪韓国と対馬・壱岐』邪馬台国シンポジウム16,香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」
古澤義久2016b「原の辻遺跡の性格と他地域との関係」『勒島와 하루노쓰지를 通해 본 東아시아 交流의 様相』国立晋州博物館
古澤義久2016c「原の辻遺跡における日韓交流」『大海を渡り、一支国に至る。―国境の島壱岐・原の辻遺跡における日韓交流―』長崎県埋蔵文化財センター
古澤義久・川道寛2014『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第12集
古澤義久・田口貴久2013『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第９集
松永泰彦1997「原の辻遺跡（平成６年度芦辺高原地区）の調査」『原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第１集
宮﨑貴夫1998『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第９集
森貞次郎1963「福岡県香椎出土の銅釧鎔笵を中心として」『考古学集刊』２－１
山口優2001『特別史跡原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第12集
山下英明1997「原の辻遺跡（平成６年度川原畑地区）の調査」『原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第１集
朴升圭・河眞鎬・金美淑・金成泰・金玟憧2001『慶州舎羅里遺蹟Ⅱ』嶺南文化財研究院学術調査報告第32冊
白宝玉・徐政・韓洋2015「遼寧鞍山羊草荘墓地石槨墓発掘簡報」『辺疆考古研究』17

付編　平成27年度原の辻遺跡調査研究事業発掘調査における自然科学分析

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtatidze・小林克也

1．はじめに

長崎県壱岐市に位置する原の辻遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

試料は、３区東20層から出土した自然木１点（試料 No. ３：PLD-31288）である。試料では最終形成年輪は残っていなかった。発掘調査所見では、試料は弥生時代と考えられている。測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31288	調査区：３区東 試料 No. ３ 遺物 No. 木109	種類：生材 試料の性状：部位不明 器種：自然木 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

3．結　　果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C 年代を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範

囲は、OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±１σ）	^{14}C 年代（yrBP±１σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-31288 試料 No. 3 遺物 No. 木109	-28.68±0.25	2292±22	2290±20	397-372cal BC（68.2%）	404-357cal BC（87.7%） 282-256cal BC（ 7.7%）

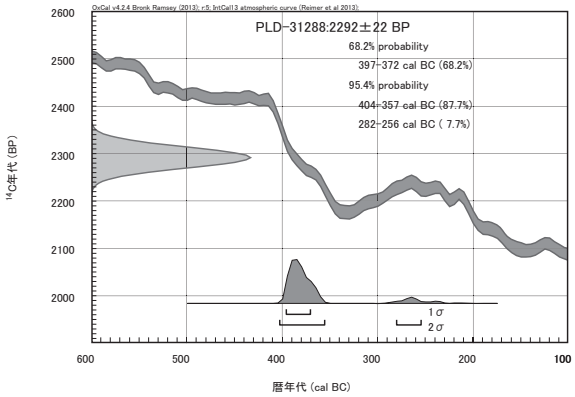


図１　暦年較正結果

４．考　　察

３区東から出土した自然木１点（試料 No. ３：PLD-31288）は、２σ暦年代範囲（確率95.4%）で、404-357cal BC（87.7%）および282-256cal BC（7.7%）となり、紀元前５世紀末～４世紀中頃および３世紀後半～中頃の暦年代を示した。これは藤尾（2009）を参照すると、弥生時代前期～中期に相当する。

なお、今回の試料は最終形成年輪を含む部位について測定が行われていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：９-54，雄山閣.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C 年代」：３-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

原の辻遺跡出土木製品の樹種同定

小林　克也（パレオ・ラボ）

1．はじめに

沖積平野である深江田原に立地する原の辻遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。

2．試料と方法

試料は、３区東側遺物集中部から出土した腕飾り１点と、３区河川堆積土から出土した網枠１点の、計２点である。時期については、弥生時代と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3．結　　果

同定の結果、針葉樹のカヤとヒノキの２分類群がみられた。腕飾りがカヤ、網枠がヒノキであった。同定結果を表１に示す。

表１　樹種同定結果一覧

試料No.	出土位置	器種	樹種	木取り
1	３区東側遺物集中部	腕飾り	カヤ	刳貫き
2	３区河川堆積土	網枠	ヒノキ	半割り

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

⑴　カヤ　*Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科　図版１　１a-１c（No. １）

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、１～５細胞高となる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、１分野に２～４個みられる。また仮道管の内壁には、２本１対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

⑺　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　図版１　２a-２c（No. ２）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～15列となる。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

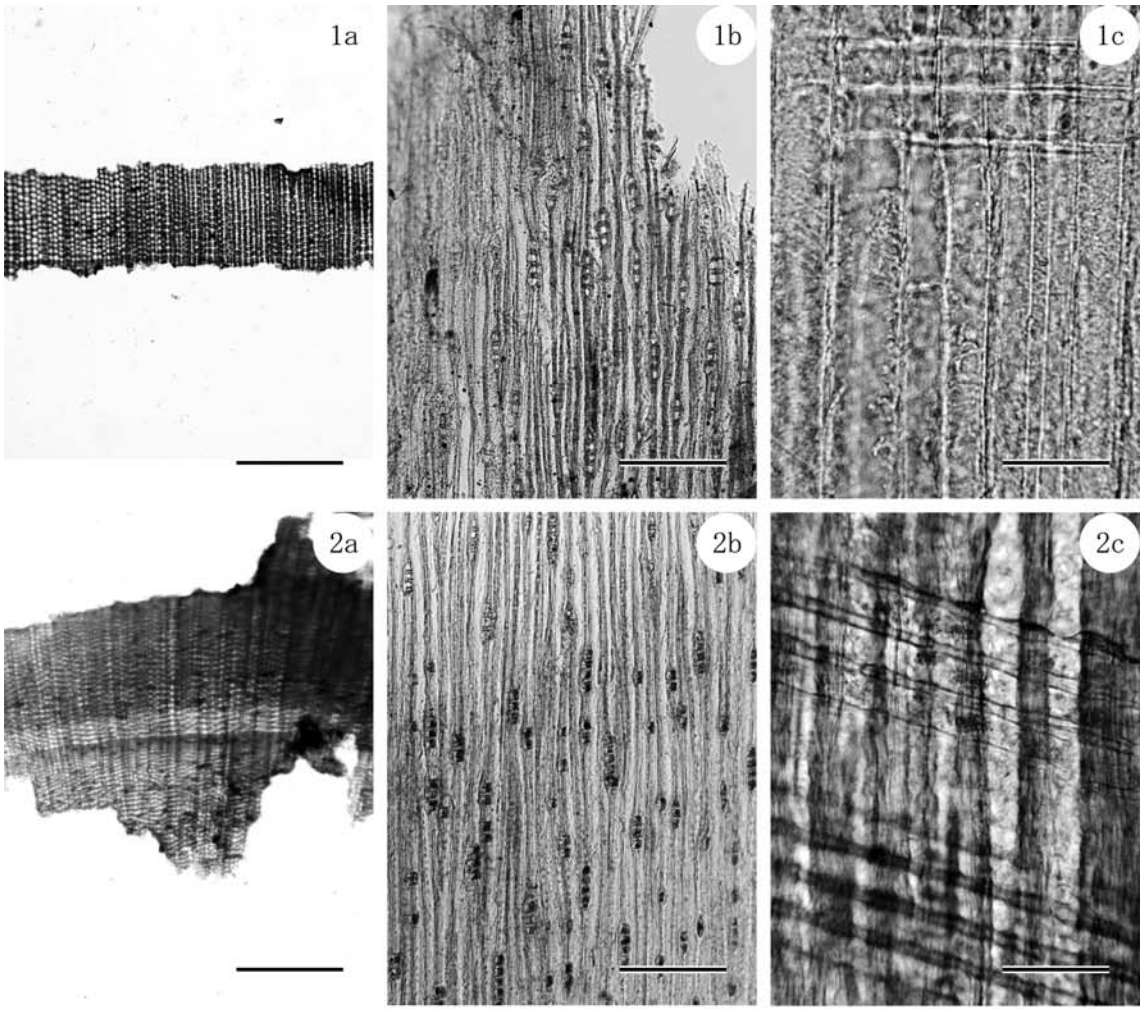
4．考　　察

弥生時代の腕飾りは、カヤであった。カヤは比較的堅硬だが加工性がよく、水湿によく耐えるという材質を持つ（伊東ほか，2011）。弥生時代の腕輪では、兵庫県の新方遺跡、奈良県の唐古・鍵遺跡、

愛媛県の阿方遺跡で樹種同定が行われており、唐古・鍵遺跡と阿方遺跡の腕輪はクワ属、新方遺跡の腕輪はイヌガヤ？であった（伊東・山田，2012）。原の辻遺跡の腕飾りはカヤで、他の遺跡とは異なる樹種であった。しかし腕輪は全国的に同定試料数が少ないため、分析事例の増加によって用材傾向が明確になると考えられる。また弥生時代の網枠は、ヒノキであった。この試料の木取りは半割りで、組み合わせて利用するタイプであると考えられる。ヒノキはやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い（伊東ほか，2011）。福岡県の金山遺跡Ⅴ区で出土した、弥生時代の組合せ網枠はカヤとアワブキ属であり（伊東・山田，2012）、原の辻遺跡のヒノキとは異なる樹種であった。しかし組合せ網枠は九州地方では同定試料数が少なく、用材傾向が不明である。分析事例の増加によって明確になると考えられる。

参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学．449p，海青社.



図版１　原の辻遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

１a-１c. カヤ（No. １）、２a-２c. ヒノキ（No. ２）

a：横断面（スケール＝500μm）、b：接線断面（スケール＝200μm）、c：放射断面（スケール＝50μm）

原の辻遺跡の花粉分析

森　　将志（パレオ・ラボ）

1．はじめに

長崎県壱岐市に所在する原の辻遺跡において、古植生を検討するために土壌試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、古植生について検討した。

2．試料と方法

分析試料は、芦辺高原３区東から採取された２点である（表１）。試料 No. 4 は16層、試料 No. 5 は17層に帰属する。層序的には、試料 No. 5 の上位に試料 No. 4 が重なる。これらの試料を用いて、次の手順で花粉分析を行った。

試料（湿重量約３～４g）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46％フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC. 1826～1834）を作製し、写真を図版１に載せた。

表１　分析試料一覧表

採取 No.	試料 No.	調査区	時期	土相	備考
6	4	芦辺高原３区	弥生時代中期後半	砂礫混じり暗灰黄色（2.5Y４／２）シルト	自然河川堆積層
7	5			植物片混じりオリーブ黒色（５Y３／１）シルト	

3．結　　果

２試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉30、草本花粉25、形態分類を含むシダ植物胞子４の、総計59である。これらの花粉・胞子の一覧表を表２に、花粉分布図を図１に示す。図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、花粉分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。さらに、クワ科やバラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

両試料ともにシイノキ属－マテバシイ属やコナラ属アカガシ亜属などの照葉樹林要素の産出が目立つ。シイノキ属－マテバシイ属は試料 No. 4 で31％、試料 No. 5 で16％、コナラ属アカガシ亜属は試料 No. 4 で19％、試料 No. 5 で18％である。また、二次林要素のマツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属の産出も目立ち、マツ属複維管束亜属は試料 No. 4 で14％、試料 No. 5 で10％、コナラ属コナラ亜属は試料 No. 4 で５％、試料 No. 5 で８％、クリ属は試料 No. 4 で４％、試料 No. 5

で６％となる。エノキ属－ムクノキ属は両試料で産出量に相違があり、試料No. ４では４％と少ないが、試料No. ５では14％と多い。草本花粉では、両試料ともにイネ科やギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属の産出が目立つ。イネ科は試料No. ４で41％、試料No. ５で37％、ギシギシ属は試料No. ４で１％、試料No. ５で２％、アカザ科－ヒユ科は試料No. ４で５％、試料No. ５で３％、ヨモギ属は試料No. ４で７％、試料No. ５で８％となる。その他では、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やキカシグサ属などの産出も見られる。

４．考　　察

両試料ともに樹木花粉では、シイノキ属－マテバシイ属やコナラ属アカガシ亜属の産出が目立つため、遺跡周辺にはシイ類やカシ類をはじめとして、モチノキ属やツバキ属などを伴う照葉樹林が広がっていたと思われる。さらに、マツ属複維管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属など二次林要素の分類群が産出しているため、遺跡周辺の開けた明るい場所にはニヨウマツ類やコナラ、クリからなる二次林も分布を広げていた可能性がある。次にエノキ属－ムクノキ属であるが、辻ほか（2005）は弥生時代中期から古墳時代の植生について述べる中で、エノキ属－ムクノキ属は場所によって

表２　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	芦辺高原3区東 試料No. 4	試料No. 5
樹木			
Podocarpus	マキ属	1	2
Abies	モミ属	1	2
Tsuga	ツガ属	1	2
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	28	21
Cryptomeria	スギ属	5	5
Salix	ヤナギ属	－	1
Myrica	ヤマモモ属	1	－
Pterocarya－*Juglans*	サワグルミ属－クルミ属	1	4
Carpinus－*Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	6	1
Betula	カバノキ属	1	3
Alnus	ハンノキ属	3	5
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	10	17
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	38	38
Castanea	クリ属	8	12
Castanopsis－*Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属	63	35
Ulmus－*Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	5	9
Celtis－*Aphananthe*	エノキ属－ムクノキ属	9	30
Phellodendron	キハダ属	1	－
Mallotus	アカメガシワ属	1	－
Ilex	モチノキ属	2	5
Vitis	ブドウ属	2	3
Parthenocissus	ツタ属	1	5
Camellia	ツバキ属	3	6
Araliaceae	ウコギ科	4	－
Styrax	エゴノキ属	－	2
Oleaceae	モクセイ科	1	－
Ligustrum	イボタノキ属	3	1
Fraxinus	トネリコ属	1	1
Viburnum	ガマズミ属	－	1
Lonicera	スイカズラ属	2	2
草本			
Typha	ガマ属	5	3
Sagittaria	オモダカ属	5	3
Gramineae	イネ科	231	205
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	3
Moraceae	クワ科	1	9
Rumex	ギシギシ属	5	10
Polygonum sect. *Persicaria*－*Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	2	2
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	29	18
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	－
Nuphar	コウホネ属	－	1
Thalictrum	カラマツソウ属	2	－
Ranunculaceae	キンポウゲ科	－	1
Brassicaceae	アブラナ科	2	3
Rosaceae	バラ科	1	2
Leguminosae	マメ科	3	4
Rotala	キカシグサ属	3	1
Apiaceae	セリ科	2	8
Solanum	ナス属	1	－
Paederia	ヘクソカズラ属	2	－
Rubia－*Galium*	アカネ属－ヤエムグラ属	1	1
Actinostemma－*Gynostemma*	ゴキヅル属－アマチャヅル属	－	2
Ambrosia－*Xanthium*	ブタクサ属－オナモミ属	1	3
Artemisia	ヨモギ属	40	42
Tubuliflorae	キク亜科	4	2
Liguliflorae	タンポポ亜科	2	2
シダ植物			
Ceratopteris	ミズワラビ属	1	2
Salvinia	サンショウモ属	－	1
monolete type spore	単条溝胞子	13	4
trilete type spore	三条溝胞子	6	2
Arboreal pollen	樹木花粉	202	213
Nonarboreal pollen	草本花粉	348	325
Spores	シダ植物胞子	20	9
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	570	547
unknown	不明	15	16

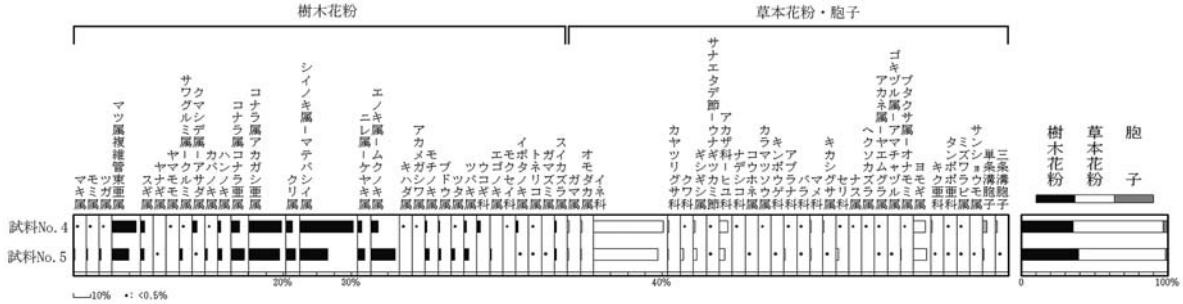


図１　原の辻遺跡（芦辺高原３区東）における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

産出率が異なり、局地的な分布を反映していると指摘している。今回の芦辺高原地区では、有機質な試料 No. 5 ではエノキ属－ムクノキ属の産出が多いが、砂礫質の試料 No. 4 では減少する。例えば、河川周辺の肥沃な場所に生育していたエノキ属－ムクノキ属が、堆積環境の変化により分布を縮小させた状況が推測される。ちなみに、石田高原地区のＢⅡ調査区の弥生時代後期から古墳時代初頭の層準（鈴木，2008）や、西側低地15調査区 S−T 2 （H 3 地点）の古墳時代の層準（辻ほか，2005）では、エノキ属－ムクノキ属の顕著な減少が確認されている。

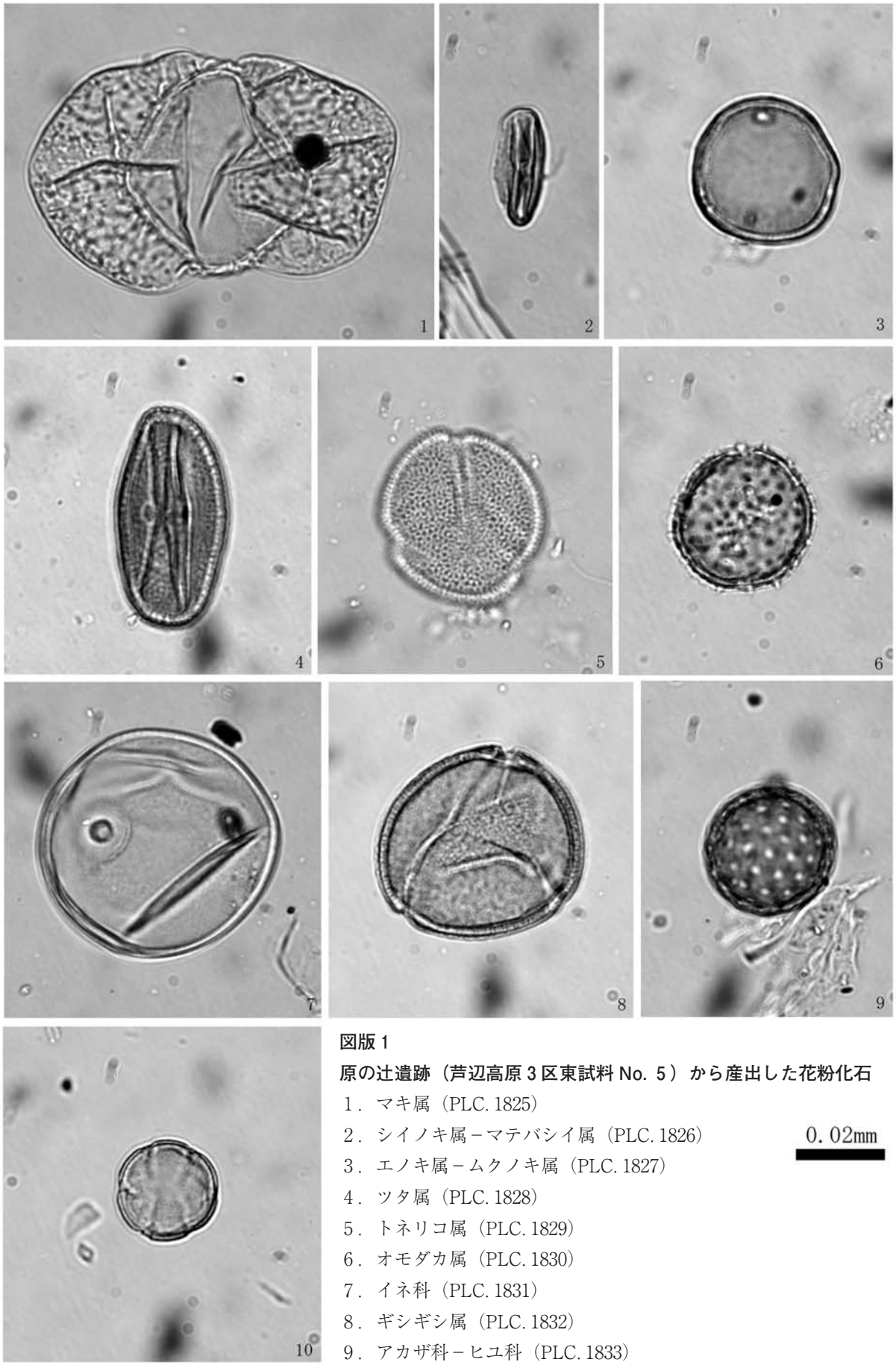
草本花粉では、両試料ともにイネ科やギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などが産出しており、これらの分類群が遺跡周辺の草本植生を形成していたと思われる。あるいは、イネ科の多産とともに水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やキカシグサ属が共産しているため、遺跡周辺において水田稲作が行われていた可能性もある。これまでに原の辻遺跡で行われた花粉分析やプラント・オパール分析の結果を鑑みると、原の辻遺跡周辺では水田稲作は少なくとも弥生前期末～中期前葉から行われている（古環境研究所，1998）。

引用文献

古環境研究所（1998）原の辻遺跡（河川地区）における植物珪酸体分析．長崎県教育委員会編「原の辻遺跡上巻」：56-66，長崎県教育委員会．

鈴木　茂（2008）花粉分析．長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所編「原の辻遺跡」：107-111，長崎県教育委員会．

辻　誠一郎・辻　圭子・鈴木　茂（2005）植物遺体群からみた原の辻遺跡の植生と人間・植物関係史．長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所編「原の辻遺跡　総集編Ⅰ」：226-241，長崎県教育委員会．



図版 1

原の辻遺跡（芦辺高原 3 区東試料 No. 5）から産出した花粉化石

1．マキ属（PLC. 1825）
2．シイノキ属－マテバシイ属（PLC. 1826）
3．エノキ属－ムクノキ属（PLC. 1827）
4．ツタ属（PLC. 1828）
5．トネリコ属（PLC. 1829）
6．オモダカ属（PLC. 1830）
7．イネ科（PLC. 1831）
8．ギシギシ属（PLC. 1832）
9．アカザ科－ヒユ科（PLC. 1833）
10．アカネ属－ヤエムグラ属（PLC. 1834）

0. 02mm

2015 년도 하루노쯔지（原の辻）유적

아시베타카하라(芦辺高原)지구 발굴 조사 성과

2015년11월2일～12월25일에 걸쳐,하루노쯔지유적 북측 저지부 토지 이용을 밝히는 것을 목적으로 발굴조사를 실시하였다.발굴조사구에는 남북 5m×동서 20m 조사구 2 개소, 남북 5m×동서 30m 조사구 1 개소를 설정했다. 현재까지 발굴구 주변 조사에서는,야요이시대의 하천이 발견되었다.

이번 발굴조사에서는 3 구에서 야요이시대 하천과 근세・근대의 우물이 발견되었다. 야요이시대 하상면(河床面)에서는 출토예가 드문 대형호,삼각집선문이 시문된 통모양 토기(樽形土器),다수의 옹,그리고 일본렬도에서 처음 나온 팔찌상(腕輪状) 목제품 등이 출토되었다. 팔찌상 목제품은 유예가 없기 때문에 그 용도는 분명하지 않다.

1 구와 2 구에서는 근대의 하천이 발견되었다.2 구에서는 근대의 가설교(仮設橋)나 역군(礫群)이 발견되었다.이 외에 1939 년 매립토에서 '의(擬)점토대토기'(점토대토기를 모방하고나 영향을 받은 토기),낙랑계 토기,삼한계 토기를 포함한 다수의 야요이시대 유물이 출토되었다.

（翻訳：古澤義久）

2015 年度原之辻遗址芦边高原地区的考古发掘

2015 年 11 月 2 日至 2015 年 12 月 25 日，长崎县埋藏文化财中心对原之辻遗址北侧的芦边高原地区进行了考古发掘。在发掘区内布了南北 5m×东西 20m 的探方 2 处、南北 5m×30m 的探方 1 处，记作 1-3 区。在以往的考古发掘中，芦边高原地区发现过弥生时代的河川遗迹。

本次发掘中，3 区内发现弥生时代的河川及近代的积水沟等遗迹。在弥生时代河床里出土了罕见的大型壶、三角集线纹樽形陶器、大量的瓮及手镯状木制品等遗物。其中，手镯状木制品属首次发现，用途不清楚。据推测河川内有可能举行过祭祀。

1 区和 2 区内也发现了近代的河川遗迹。2 区内还发现了架桥及砾石堆。此外，在 1939 年的回填土里发现了大量的弥生时代遗物，有拟粘土带陶器（指效仿朝鲜半岛早期铁器时代粘土带土器的陶器）、乐浪系陶器及三韩系陶器等。

（翻訳：王達来）

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡調査研究事業調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第20集
編著者名	古澤義久（編）・川道寛・楠本正樹・片多雅樹
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地１　電話0920（45）4080
発行年月日	西暦2017年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡（はるのつじ）	長崎県壱岐市 芦辺町深江平触	42424	72-92	33°45′30″	129°45′55″	2015 11. 2～ 2015 12. 25	350㎡	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡（芦辺高原地区）	集落	弥生時代 近世・近代	自然河川 水汲み場遺構 仮設橋遺構 礫群遺構	弥生土器 弥生時代石器 木製品（腕輪状木製品、横槌、網枠等）	初めて弥生時代中期中葉の腕輪状木製品が出土

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第20集

原の辻遺跡

2017（平成29）年３月31日

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂